

ぼいすふるむ  
ふくしま

VOICE FROM FUKUSHIMA 2018

ほいすふるむ  
ふくしま

VOICE FROM FUKUSHIMA 2018

## はじめに

福島第一原発の廃炉において中長期的に取り組むべき課題を解決する。そのために、「透明性の確保」と「住民参画」の余地を徹底的に追求する中で事実を共有し、冷静で多様な議論の場を作ること。そのうえで、住民が満足できる幸せな未来を構想していくこと。それが本日の目標です。

この「目標」は、昨年より福島第一廃炉国際フォーラムのDAY 1・住民向けセッションのファシリテーターをつとめる中で意識してきたことであり、それ以前から個人的に様々な実践を通して向き合ってきたことでもあります。

昨年の第二回福島第一廃炉国際フォーラムでは住民の方々が抱える多くの不安や不満、要望があぶり出された一方、来場者アンケートでは地元の声を反映できたか、理解・疑問解消につながったかといった問いに8割以上の参加者からポジティブな反応が出る場を作ることができました。

しかし、現状はまだまだ「目標」の実現にはほど遠いと言わざるをえません。

フォーラムの会場に来た人は住民の全てではなく、その「住民」というのも、帰還した人、避難の継続を余儀なくされ続ける人、新たにこの知に移住してきた人、あるいはここに住まずとも遠くから廃炉に思いを寄せる人、と立場も様々に分岐していつている。ここ1年で、福島第一原発の廃炉のことも、地域の生活再建・産業再生の状況も目まぐるしく変化している。

その中で、「お役所・東電の自己満足」に終わらせないよう、私たちがいまやるべきことは何か。

今年の第三回福島第一廃炉国際フォーラムでは、昨年以上に多様な声を取り入れながら福島第一原発廃炉についてのあぶり出し、「住民が廃炉を語り続けるための土壌」をつくることを目指していきます。

ファシリテーター・開沼 博

## CONTENTS

はじめに .....	2
住民が廃炉を語る場をつくる！：廃炉フォーラムの3年間 .....	4
課題解決に向けた事例づくり：「はいろ」のいろは .....	6
今年の議論の進め方：「廃炉への森」をつくる！ .....	8
プレリサーチから浮かび上がった「課題の木」・「希望の木」 .....	10
浮かび上がってきた「廃炉の課題マップ」 .....	12
インタビュー .....	14
資料：「はいろ」のいろは .....	52
終わりに .....	56

# 住民が廃炉を語る場をつくる！：廃炉フォーラムの3年間

「住民が廃炉を語る場」をつくる。言うのは簡単で、実際にそれらしきものはありましたが、残念ながら不十分だと言わざるをえません。じゃあ、その背景にいかなる課題があるのか。福島第一廃炉国際フォーラムのこれまでを振り返りながら、その現在を確認します。

2016年4月10日・11日

## 第1回 福島第一廃炉国際フォーラム@いわき市



もっと住民の声を取り入れ、議論をすべき！

丸一日を住民向けセッションにしよう！



2017年 春～夏

## プレ・リサーチ

- イベント前に論点をあぶり出す＆住民のニーズから議論をはじめ＝フリップド（反転型）リサーチアプローチ！
- とりあえず住民向けイベントをやりました、という「アリバイづくり」「儀式」で終わらせない。



## 見えてきた課題

私たちはそもそも「何がわからないかが分からない」のでは？

2017年7月2日

## 第2回 福島第一廃炉国際フォーラム@広野町

- 住民の思い（不安、不満、疑問、要望）の可視化
- 「何がわからないかが分からない」から「そうだったのか」に



## 第3回 福島第一廃炉国際フォーラムへ

2017年12月24日

## フォローアップミニ@福島市



残る課題を確認する中で新たに浮き上がった課題

そもそも「なぜ私たちは廃炉について考えるべきなのか？」

## WEBサイト「ほいすふるむフォーラム」の開設



<http://ndf-forum.com/voice/>

## リーフレットの制作

詳細は次ページ

第3回福島第一廃炉国際フォーラムに向けた登壇者によるアドバイザリー会合の議論

- ・ 廃炉の技術的な話しと住民の生活との乖離を埋める、地域の未来を見据えた議論の不足
- ・ 若い人の声を取り入れることの重要性
- ・ 帰還者、移住者が増える中での地域の変化
- ・ そもそも関心が無い、付き合わされたくないという声をどう踏まえるかこれら新たな課題を踏まえるべき！



2018年 春～夏

## プレ・リサーチ



2018年8月5日

## 本日 第3回福島第一廃炉国際フォーラム@楡葉町



# 課題解決に向けた事例づくり：「はいろ」のいろは

最も頻繁に指摘される「廃炉の課題」が情報発信に関する事です。「発信が足りない」「わかりにくい」「風評が消えない」・・・。第三回福島第一廃炉国際フォーラムに向けて、フォーラムを主催する原子力損害賠償・廃炉等支援機構が制作したリーフレット『「はいろ」のいろは』は、昨年の登壇者はじめ多くの住民の方々の意見を反映しながら編集されました。

それでも、皆が納得するものかはわかりません。ただ、このような住民目線の率直な意見の反映を繰り返していく中で情報発信が自己満足・形式的に「伝える」だけで終わるものではなく、納得感・安心感を生み出す「伝わる」ものにつなげていく必要があるでしょう。



ポイントがよくわからない

興味を持てるよう工夫を



住民の生活を踏まえた議論を



～皆様と考える1Fの「はいろ」～

## 「はいろ」のいろは

みなで一緒に考えよう！

福島第一原子力発電所(1F)の現状と今後の対応について、住民の方々の意見を反映しながら編集されたリーフレット『「はいろ」のいろは』の紹介。

**Q1 (疑問・不安)** 福島第一原子力発電所は安全なの？ 今後も大丈夫なの？

A1. 事故当時、水素爆発が起きるなど危険な状態だったが、様々な対策を講じた結果、1Fは現在、「安定状態」にあるんじや！

- ★ 原子炉内は低温に保たれ、爆発する可能性は限りなく低い
- ★ 1F敷地内で一般作業服などで作業できるエリアは95%
- ★ 放射性物質の飛散を低減する対策をとり、常時監視している

このまま放置すると「不具合が出る」可能性があるんじや！ リスクを減らし「安全な状態」にするため、「はいろ」作業を行うんじや！

安定状態って、「安全」ということなの？

【高まるリスク】 燃料の変化や建物の老朽化により放射性物質が外に漏れることなど

マンガ、イラストを活用しつつ客観的な情報を理解できるようにする。

ポイントを絞る！

技術者同士で使う言葉を選べて、わかりやすい表現にする。

**Q2 (疑問)** そもそも「はいろ」って何をすることなの？

A2. 建物から燃料を取り出し、安全に貯蔵して処分していく作業のことなんじやよ！ 大きく分けると3つ！

- ① 汚染水対策
- ② 燃料の取り出し
- ③ 解体・後片付け(廃棄物対策)

**Q3 (疑問)** 「はいろ」の完了までどのくらいの時間がかかるの？

A3. 仕事を進めるには、まず、目標や計画を立てるが、「はいろ」の計画でもある「中長期ロードマップ」では、30～40年かかるんじや！

ポイントを絞る！

燃料デブリって何?? 燃料と建物の金属が溶けて混じった状態。その性質などが現在、不明であるため調査をすすめていく必要があるんじや！

燃料デブリの「不確かなもの」を「明らかにすること」から始めるんじや！

調査・研究 (ロボットなどによる調査・機器の研究開発) を続け、得られた情報をもとに作業を一步一步、着実に進めていくんじや！

安全を最優先に「はいろ」の作業を行うため、どうしても時間がかかるんじや！

「はいろ」は子供たちの明るい未来、ふくしまの復興につながっているんじや！

技術者同士で使う言葉を選べて、わかりやすい表現にする。

普通の人でも理科できるように的確な例えを使う。ただし的外れだと逆効果になるから慎重に。

さらに興味を持った人が学べるようフォーラムやWEBの情報を示す。

住民の視点を織り交ぜながら課題を発見し、その解決に向けた具体策を講じる。この「課題発見と課題解決のサイクルづくり」を様々な方法・機会を利用しながら行っていくことが必要です。本日もその一つになるでしょう。

**Q4 (不満・要望)** 分かりやすい情報をきちんと発信して！

A4. NDFでは、「福島第一廃炉国際フォーラム」を開催し、「はいろ」に関する情報発信や地域の皆様と意見交換を行っているようじや！フォーラムに参加して、「はいろ」への想いを専門家にぶつけてみよう！

ポイントを絞る！

第2回 福島第一廃炉国際フォーラムの様子 (2017年7月2日) 於: 広野町 484名参加

第3回 福島第一廃炉国際フォーラム 2018年 8月5日(日) 榎葉町コミュニティセンター 8月6日(月) いわき芸術文化交流館アリオス

インフォメーション [NDFリンク集] 「はいろ」の取り組みに関するポータルサイトです。ご利用ください。

URL: <http://www.dd.ndf.go.jp/link/index.html>

【発行】原子力損害賠償・廃炉等支援機構(NDF) 廃炉総括グループ 東京都港区虎ノ門2-2-5 共同通信会館 5階 NDFはいろ

## 今年の議論の進め方：「廃炉の森」をつくる

これから数十年先にゴールが設定されている福島第一原発の廃炉。  
 私たちの目の前には先の見通しの立たない、深く足場の悪い

「廃炉への森」がある。

### ◆今日やること

私たちの眼前に漠然と存在する課題希望正体をあぶり出す。その上で、福島第一原発の廃炉について課題今後の見通しについて住民の立場から徹底的に解明する。

## プレリサーチ+ミニワークショップ

### 課題と希望の抽出！



- 午前の「話す」セッション：会場全体で話します
  - (1) 6名のグループで「小さな課題・希望の葉」を各1枚書く
  - (2) ブロックごとに「小さな課題・希望の木」をつくる
  - (3) ブロックごとに「大きな課題・希望の葉」を各2枚ずつ書く
  - (4) 全体で「大きな課題・希望の木」をつくる
  - (5) 午後のセッションへ

- 午後の「聞く」セッション：地元登壇者が原子力損害賠償・廃炉等支援機構、経済産業省、東京電力の担当者に聞きます
  - (1) プレリサーチの結果(次ページ以降の「課題の木・希望の木」や「廃炉の課題マップ」を参照)や午前の話すセッションの内容を踏まえて、問いかけます
  - (2) 問いへの答えが納得できるまで聞きます
  - (3) それを繰り返す中で会場から出たさらなる疑問についても聞きます
  - (4) 最後にシールを貼ってフィードバックします



ゴールに向かう中で、この森の実態を明らかにし、皆で理解し合うことなしに、私たちは途中で立ちすくんでしまおう。

森には多くの木がたっている。そこには、「課題の木」と「希望の木」の両方がたっているだろう。

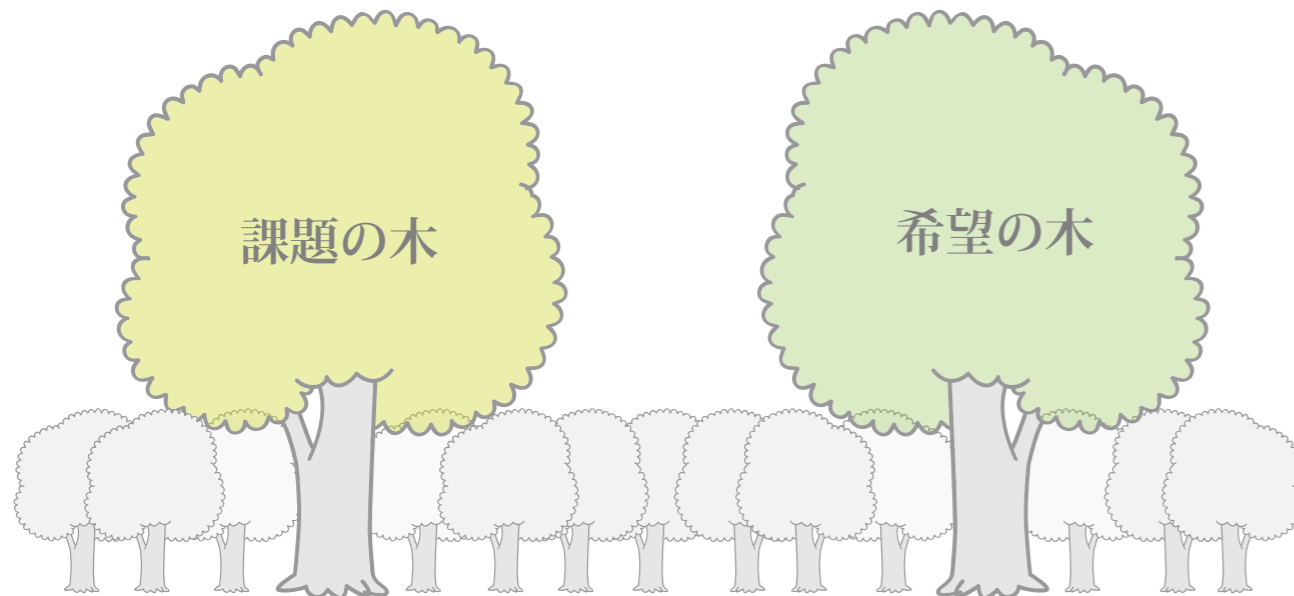
私たちが漠然と捉えている課題と希望を明らかにしながら、どんな課題と希望がそこにあるのか、考えてみましょう。

そして、

「何がわからないか」をわかり、

「そもそも、なぜ私たちが廃炉について考えなければならないのか」

という問いにもできる限り向き合う時間にしましょう。

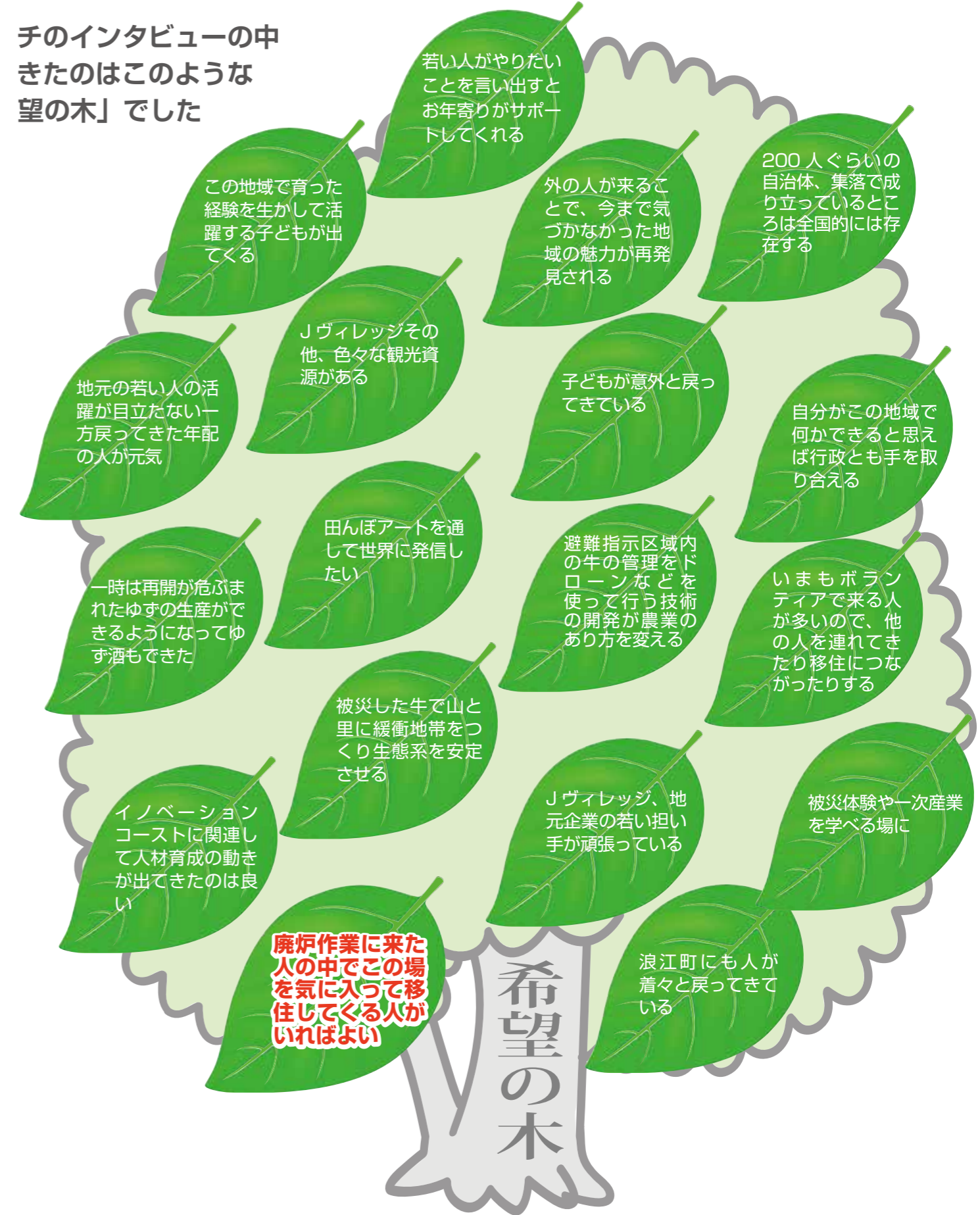
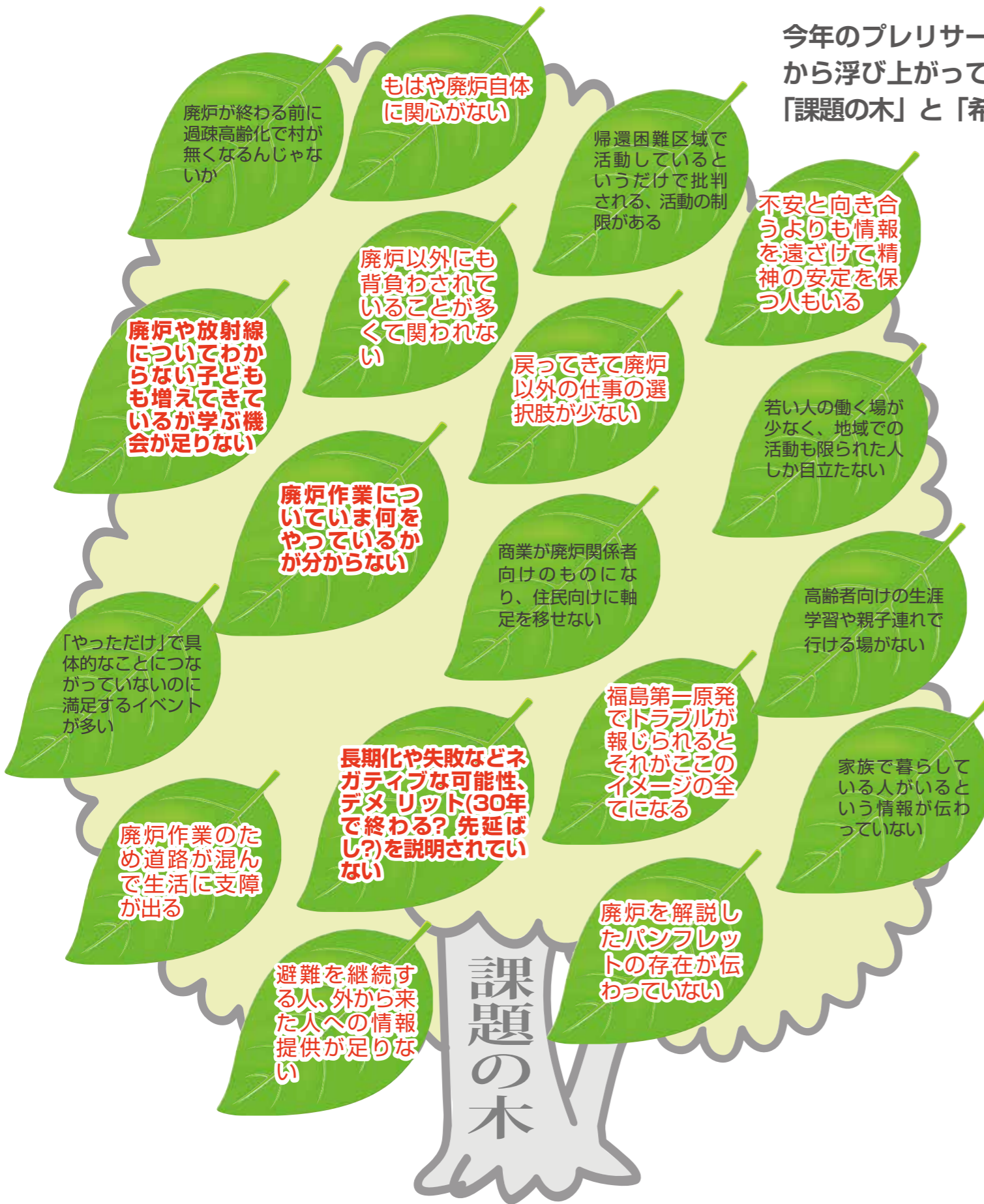




# プレリサーチから浮かび上がった「課題の木」と「希望の木」

今年のプレリサーチから浮かび上がって「課題の木」と「希望の木」

子のインタビューの中きたのはこのような「希望の木」でした





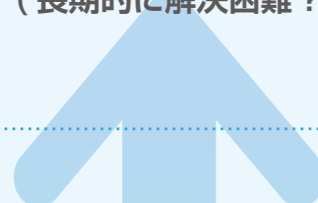


# 浮かび上がってきた「廃炉の課題マップ」

これまでの福島第一廃炉国際フォーラムに関する活動を通して、様々な課題が浮かび上がってきました。技術的なことはもちろん、廃炉の作業が続く中で住民の生活に生じる問題も見えてきています。本日の議論もそれを踏まえて進めていきます。

**「要望」が多い**  
=> 具体的改善策の提示と実践必要

**「不安」が多い**  
=> 不安のもととなる課題の解決と信頼関係の再構築

**「疑問」が多い**  
=> 正確な知識の共有

傾 向	地域の将来	情報発信・コミュニケーション	安全・危機管理	事業計画、廃炉促進
<p><b>解決が遠い</b> (長期的に解決困難?)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 炉が終わった後何が残る?</li> <li>・ 廃炉や放射線についてわからない子どもも増えてきているが学ぶ機会が足りない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ なぜ住民が廃炉の話に付き合わされなければならないのか?</li> <li>・ 長期化や失敗などネガティブな可能性、デメリット (30年で終わる? 先延ばし?) を説明されていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 汚染された建屋やそこから出た廃棄物がある限り、汚染が広がるリスクはあるのでは?</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 取り出したデブリはどうする?</li> <li>・ 費用や廃棄物の負担を下の世代におしつけるのか?</li> <li>・ コスト・リスクを考え、全体スケジュールを 30-40 年より長くしたり短くしたりもすべきでは?</li> </ul>
<p>(いずれ解決できるかも?)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 復興関係で来た人を前提としたまちづくりの姿が見えない、単身赴任ばかりか</li> <li>・ 子育てを安心してできない</li> <li>・ 復興創生期間、2F 廃炉後の地域経済をどうするか</li> <li>・ もはや廃炉自体に関心がない</li> <li>・ 戻ってきて廃炉以外の仕事の選択肢が少ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 福島第一原発でトラブルが報じられるとそれがこのイメージの全てになる</li> <li>・ 海外での福島イメージがひどい</li> <li>・ 不安と向き合うよりも情報を遠ざけて精神の安定を保つ人もいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ また再臨界や爆発する可能性は?</li> <li>・ 廃炉作業についていま何をやっているかが分からない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作業の終わりは更地? 途中で止める?</li> <li>・ 働き手の確保は長期的に大丈夫か?</li> <li>・ デブリ取り出し本当にできる? できるならどうする? できないとしてどうなる?</li> <li>・ トリチウム水の処理、意思決定どうする?</li> </ul>
<p>(すぐに解決し得る)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 廃炉作業で交通渋滞が起こって不便</li> <li>・ 廃炉以外にも背負わされていることが多くて関われない</li> <li>・ イノベーションコースト構想が地域にもたらすメリットが見えない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東電、行政等の WEB、冊子がわかりにくい</li> <li>・ 避難を継続する人、外から来た人への情報提供が足りない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 廃炉作業の中で一次産業や周辺地域での居住に問題はでないか?</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2F はどうなっていくのか?</li> <li>・ 無駄なコストをかけてないか?</li> <li>・ タンクの水はどこまで増える?</li> </ul>
<p>(既に解決しつつある)</p> <p><b>解決が近い</b></p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域住民が廃炉を議論する場がない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 廃炉を解説したパンフレットなどの存在が伝わっていない</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 汚染水は漏れていないか?</li> </ul>



# インタビュー 01

※ 開沼が今回のフォーラムにあたり論点になりそうなところを太字にしています。



## 和泉 亘さん・小林 奈保子さん

浪江町にゲストハウスを開き、地域に暮らす人とそこを訪れる人の交流の拠点をつくろうとする若者たちがいる。住民が全く居住できない状態を経て避難指示が解除されたこの地域には、役場や飲食店などが再開するものの、原発事故前のような人の賑わいはない。賑わいが戻らないから人が集まらない、人が集まらないから賑わいが戻らないという悪循環が続く。一方、この地域にはボランティアや視察などで多くの人が行き来し続けてきた現実もある。廃炉と向き合うこの地域の今後をいかに模索するのか。そこを行き交う人々の受け皿となる「あおた荘」の展望を聞いた。

ここは避難指示がかかった地域で、まわりには取り壊した家もありますが、この建物はきれいですね。

**小林** ここは比較的新しい建物だったので、大掃除だけできれいにできました。修繕も残っていますが、クラウドファンディングでまかなう予定です。

避難指示がかかっているときも、年に何度か掃除に来ていたようなのですが、やはり最初は大変でした。小動物の糞が窓のところに広がって真っ黒になっていたり、色んな人に集まってもらって2回に分けて掃除をして

どうい経緯でこのあおた荘をゲストハウスにすることに？

**和泉** あおた荘はもともと下宿として使われていたんですが、家主の青田さんは白河市に避難してそこですでに生活基盤ができていました。避難指示が解除されて、ここを誰かに使ってもらえればという話を区長さんにしていて、そんなときに、私が住む家を探していると役場に行ったりしているうちにここを紹介されました。

元々、私は福島市に住んでいて、NPOで福島市に避難している浪江の方の支援などの仕事をしていました。避難指示解除前に浪江町をどうするのかと考えるイベントに行ったときに、浪江は地域を支える若手がいないという話を聞いていて、自分にできることはないかと移住を検討していました。

浪江の住民の方が集まったのワークショップはいろいろあったんですけど、やっぱりそのときの話題は、戻る戻らない、これからどうするというような話が多くて、その中で、じゃあ住民さんたちの本当の声というのは、買い物をする場所とか病院がないとか、人がいないから戻りたいけれども戻れないという浪江町がやっぱりまだ住める環境ではないというのが一番強かったと思いました。じゃあ、自分で何かできることはないか。何かにぎわいを作れることをすれば、戻りたい人が戻れるようになるんじゃないかと浪江町に移住することを決めました。

じゃあ、大規模な避難指示の解除が見えてきた2016年ぐらいの段階から準備はしています？

**和泉** そうですね。

ただ、なかなか住む場所が見つからないのと、1人じゃあ何もできないし人が集まる場所が欲しいという構想はありました。ゲストハウスなのかシェアオフィスなのかは分からないけれども、取りあえず探そうと去年の夏に出会ったのがこのあおた荘というわけです。

実際に住み始めるまでは、福島市から通いながらボランティアに参加したり、住民さんが家を片付けたいというのを手伝って交流の輪、つながりを広げようという方々と関係を構築していました。

それで、昨年夏、こちらを拠点に活動するぞと決まって、実際に住み始めたのというのは？

**和泉** 最初は、まだ住める状態ではなかったんで、10月に住めるよう掃除をして、そこからまず福島市とことで2拠点で生活して、今年の2月に元いたNPOを退職してここに完全に移住してきました。

ゲストハウスだけでは生活費が足りませんので、復興庁の被災者支援コーディネーターという仕事の委託を受けたり、支援事業の補助金、助成金を取って自分の人件費としてやっています。

ゲストハウスにしていこうという構想をもったきっかけは？

**和泉** 自分でボランティアで入って、関わってきてニーズが見えてきたところからです。浪江には、県外から来ているボランティアが多いんです。その人たちは、大体土日にボランティアをやるんですが、夜泊まる場所がなくて、道の駅で寝ているとかテントを張るとかいろいろ苦労している状態で。だから、まずはそういうボランティアの方がせっかく浪江に来ているんだから、泊まれる場所があればと。

それに、地元の人、県内の人でも、浪江に行ったときに泊まる所がない、あればいいなという人も多かったんで、じゃあ、ゲストハウスをやってみるかという形で。

なるほど、そうなんです。一方、小林さんは、2017年4月から既に浪江に居住をはじめていましたが、いつからこのゲストハウスに関わりだしたんですか。

**小林** 私も、別の人から、あおた下宿というところがある、活用してほしいんだ、という話を聞いていて、見にも来ていました。和泉君と会ったのも昨年の夏なんですけれども、その後、一緒にやってみるかという話になって。

**和泉** そうですね、10月の掃除は2人で始めてという形です。

小林さんは、帰ってきた時点で、きれいな物件を借りられたということですか？

**小林** 夫が役場職員なので、役場で早々に戻ってくる人は、もう物件を割り当てられていてそこに入りました。

最初は、ずっと田村で復興支援員をやってきたから少し休憩しようと思って、そこまでアンテナを張っていなかったんですが、実際に住んでみるとやっぱり若手が少ないなというのはすごく実感していました。役場にはそれなりに若い人がいるけれども、仕事で忙しいし、地元で若手という、本当にここぐらいしかないというのがあったので、やれることはやれるうちにやっておかないといけなかなという感覚があって、で、やってみるかという。

去年の秋口に具体的に動き始めて、今年の正月ぐらいにはいろいろな若者が集まってくる場になっているのをFacebookで発信していましたよね？

**和泉** あれも掃除のイベントだったんですけど、掃除をしてきれいになったところでみんなでご飯を食べて、浪江で騒いでみるかと企画を立てたんです。そんなに人を集める気もなかったんですけど、うわさで人が集まってきてすごく大人数になりました。

そこらへんから、いろいろ人の巻き込みというかコミュニティづくり的なことに入っていきます。

**和泉** そうですね。ここで生まれる交流の輪はすごく広くて、役場の人も来れば一町民さんも来れば町外から訪れる大学生も来たり。

このゲストハウスの今後の構想について伺いたいんですが、先ほどあったようなボランティアの方の受け皿になるということもあるでしょうけれども、もっといろんな可能性がありそうですね。泊まる場所としてだけではなく。

**和泉** やっぱりここを拠点に、ここで何らかの活動をしたい若い人の受け入れを多くやっていったり、町民さんたちの集まる場だったり。私たちが移住者なんですけれども、他の移住者を連れ込めるような仕組みも作ったりできればと思っています。

小林さんはどうですか。

**小林** 割と町民の方々に特技を持っていて披露する場があればなという方は多いんです。こないだは藍染め教室をやりました

が、例えば、浪江に関心がある若い人たちに対して料理教室をやったりするような教室をすとか、マッサージ教室でもいいかもしれませんが、そういうことができれば良いと思います。浪江町には、生涯学習のできる環境が戻っていないんです。

なるほど。そういう場が失われたままなんです。店がない、病院がない、という話は聞きますが、それ以外に何かここに住んで気づくことはありますか。

**和泉** 困ることに関して、買い物とか病院とかを挙げられるのは、私たち若い人にとっては車があるので隣の南相馬まで行けば大して困ることはないんです。ですが、なりわい、仕事が無いのは困ります。若者が、普通に稼いで普通に食べて結婚できて養っていくような仕組みというのをどうやっていくのか。これは自分の課題でもあるんですけども、不安でもあります。

それはゲストハウスは経営としては成り立ちそうですか。

**和泉** そうですね、いろいろなアイデアと手法でやっていこうとは思いますが、もっと多く、他の人が移住してきたときにその人たちの動き口になるような一次産業、二次産業を作ればなと思います。自分がモデルケースになればいいと思っています。自分ですけれども。

なるほど、そうなんです。小林さんは困っていることは？

**小林** 困っていることは、本当に特になくて買い物は不便だとよく言われるけれども、確かに、ほうれん草買いたいというときに25分かけて車で行くのは大変なんです。でも、それはなんとかやりくりすればいい話だけであって。

今、将来的にという話もあったんですけども、今日は町内で再開した学校の入学式だったんですけども、浪江で過ごしてきた記憶がある若者がどんどん減っていくのかなと思っていて。町内にはこども園、小中とあるけど、高校は今休校中、大学はないから出ていく。若手が誰もいないという状態が何年も続くと、浪江町に関わりたいたいという思いももうなくなっていったり、住むという選択肢もないとか。要は、若い世代がすっぱり抜けるような気がして。

だから、1回出たとしても浪江町が魅力的な町だったり子どもが過ごしやすい街だったりとかというのは、今から多分作っていかないといけない。子ども向けとか親子向けとかそういうプログラムも作っていただけならなと思っています。

髪を切りに行ったりとか、どこまで行くんですか。

**小林** 4ヵ月切っていないんですけども。元々、田村市に住んでいたんで、行き付けの美容室が郡山だったんです。だから、郡山に行ったついでに切るというのも今は選択肢にあるんですけども、今南相馬市で探しています。そこはちょっと考えないといけないなという。

浪江の中ではまだ回復は？やっているとこはあるんですか。

**小林** あるんですけども。理髪店で、若い人が行くには少し。



# インタビュー 01

小高も真っ先に再開したのは理髪店でしたね。地元の人がちゃんと来るから商売の見通しが立つとか、そういうのがあるんですね。

小林 おそらく客層がやっぱり 40～50 代以上の方々だと。

なるほど、若者がいないとそういう。

小林 そうですね、美容室となると多分、なかなか客層としてはまだいないんじゃないかなと。

和泉 仕事にならない。

**周りの若い人で、帰還しようとか移住してこようという人はいないんですか？**

和泉 います。

小林 大掃除のときとかに巻き込んだ人の中の 1 人にいるんですけど、浪江の人たちも若い人たちが来てくれることをうれしがる人が多くて、すごく引っ張るんですね。「浪江で働け、浪江で働け」とずっと引っ張りまくっていて、引っ張られて来た人がいます。

その方は浪江出身者？

小林 違います。

そうですか、仕事はどうしたんですか。

小林 仕事は、浪江町内にまちづくり会社が立ち上がって、そこに就職すると。

まちづくり会社には他にも若い人が働いていますね。そう聞いていくと、あくまで和泉さん、小林さんの顔が見える範囲の関係かもしれないけれども、結構ダイナミックに人の動きがあるというのが、この半年ぐらいでしょうか。それは、3年後5年後をみたときに、ずっと続いていきそうですか。どうなっているんだ、あるいは、どうなればいいのかというところは、どうですか。

和泉 浪江町を第2の故郷として、あとは、こういった**原発被害があった場所としていろいろなことを学べるとか、ここでできない農業体験とか漁業体験とかをできる場所**として今後ここから情報発信をして、日本各地、世界に広げていければなと思っています。

小林 私は主人と一緒に、浪江でやっぱり子育てしたいよねという話はしています。もう既に子育て世代で、帰ってきている人も少ないけれどもいるんです。

外から見たら、浪江でも子育てできるよという情報はすごいインパクトがあるなと思っていて、そういうのをやっている人もいるという、モデルみたいな形になっていけばいいかなと思っています。

あと、浪江町の震災前の産業別の就労者数のデータを見ると、福祉医療関係従事者が多かったんです。老人福祉にしても小

い病院にしてもたくさんあったんです。建物を見ても病院や福祉施設が多かった。でも、それが今はない、あるけれども元の規模ではない。元の規模にしていくつもりも多分町にはないと思うんですけども。今帰ってきている高齢者は元気ですけれども、多分10年後とかは自然に衰えていくわけで、これから、医療福祉関係は必要になってくるだろうなど。



そうですね。富岡もそうですが、大規模な避難指示解除から1年ほど経過して元の人口の5%ぐらいの水準になっているところは、広野や川内のようにいまから考えれば早いうちに避難指示が解除されてもう8割を超えている地域とはだいぶ違う障壁がありますよね。

小林 そうですね、年数には勝てないなと。7年も経てばやっぱり家族でここに住もうとかという選択を十分できるので。なかなか他の自治体のように8割を目指すのは難しいかなとも思います。

和泉 やっぱり高齢の方からは病院が遠いとかという愚痴はよく聞きます。一応浪江にも医療機関はありますが、**専門の耳鼻科とか眼科とか歯医者とか**となっていくと、**そういった細かいものがやっぱり必要になってくるので**、欲しいと言っていましたね。

歯医者はあるんですか。

小林 ないです。原町に行きます。あと、救急のときに入院施設がないので、やっぱり原町か新しくできた富岡の病院に行くしかないというのはあります。

あと、南のほう、広野、楢葉辺りだと住民の方からは、原発事故後に廃炉や除染の作業員の方が町に住むようになり元からの住民との葛藤があるという問題も聞きますが、こちらはどうですか。

小林 作業員の方はそれなりに住んでいらっやいます。でも、あんまりそういう問題みたいなものは。

和泉 住民さんから聞くと、やっぱり作業服で夜に町で会ったりする人とかを見るのは、元の浪江町ではあり得なかった光景なんで、違和感があると聞いたこともあります。

そこの感じですね。実際は役場もある程度把握しているんでしょうけれども、正確な人数は分からないですが、元住民より作業の方が多い感じですか？

小林 いえ、そこまでは。

和泉 区長さんのお話を聞くと、作業員の方が100名ぐらいは住んでいるんじゃないかという話なので、まだ住民さんのほうが多いのかなと。

**交通インフラは、どういう状況でしょう。電車はもちろん通ったけど、バス、タクシーはある？**

小林 デマンドタクシーがあります。

和泉 まだ浪江町内が狭いので、飲みに行っのタクシーに乗るといのは少ないんですけども、やっぱり浪江と富岡間の移動というのはちょっと不便は感じます。代行バスといっても1日3～4本で、全然電車の代行にはなっていないので。

小林 夜飲んだ後の代行がないので、早く代行をやってほしいという話は飲んでる人たちからはよく聞きます。

双葉郡の中でも浪江は自治体の面積が広くて、避難指示解除になっていない場所もありますが、ここは役場の近くだからいっぱい人が住んでいるのは想像できますけれども、遠方にぼつんと住んでいる人とかはいるんですか。

小林 いらっやいます。

和泉 郊外の元々大きいおうちだったとか、先祖代々のおうちだったという方のほうがぼつぼつ戻ってきています。

小林 この間おばちゃんと言っていたのは、静かでいい、とは言っていて、本音は分からないですけどもそういう側面もあるのかなと。過ごしやすいという、広々とした自分の家というのはあるんだと思います。

野生の動物が町中にいる状況は続いていますか？

小林 はい、イノシシ、キジ、モグラ、サル。

和泉 ハクビシン、キツネ、フクロウ。

小林 います、普通にいますね。

和泉 サファリパークみたいと言った人もいました。

小林 ただ、地域の人がパトロールも回っているし、警察もすごく回ってくれているので、住んでいても安全だという感覚はあります。

そんな中で、廃炉作業が30～40年続いていきます。小林さんには昨年のフォーラムに登壇いただきましたが、和泉さんは思うところとかはありますか。

和泉 自分は、NDF や経済産業省の人から話を聞く機会があったので、一般的な人よりは多分不安が少ないんです。ただ、情報発信をもっと分かりやすく広く一般的にすることが必要なかなと思います。やっぱり誤解をしている人がすごく多いので。

例えば、どういうところが。

和泉 原発は悪者だ、東電は悪者だ、廃炉なんて本当はできないだろうという声がやっぱり聞かれます。ちゃんとやっているところもあるんだというような情報が伝わっていないのは悲しいことです。

**具体的に、どこら辺がちゃんとやっていると思ひ、でもそれが伝わっていないのとか、あるいは逆に、ちゃんとやってなさそうな部分とかが見えているのであればそういうところとかも、どうですか。**

和泉 それはやっぱり風評被害だと思うんですけども、線量がここは高かったとか、漏水したとか、そういうミスがバツと広がったらもうそれが全てになっちゃうじゃないですか。そういうので世論が傾いちゃったりする。

なるほど。じゃあ、浪江町に住んだり訪れたりするに当たって廃炉の問題があることは、壁になっていますか。重要な要素なのか、なっはいるけれどももっと大きな要素がいろいろ動いているみたいなのところもあると思いますし、そこら辺はどうですか。

和泉 これは潔癖症みたいなもので、気にする人はすごく気にします。ここで普通に**こども園とか小中学校が再開して家族連れがいるという情報はほとんど伝わっていないから**、子育て世代で気になる人もいるでしょう。

それは、やっぱり浪江町自体の情報も伝わっていないというのが今は壁になっているのかなと思います。

**さきほど NDF とか経産省の人とのコミュニケーションに意味があったとおっしゃいましたが、どういうところが良かったんですか。**



和泉 直接話しをして、人柄が伝わってきたことだと思います。廃炉のやり方自体が、わけが分からなかったのが分かったというよりは、直接話を聞いて納得できた。

じゃあ、パンフレットとか、ありますよね。和泉さんは復興に関わる仕事をしてきた中で廃炉について直接話を聞く機会があったわけですが、一般の人はなかなかそういう場への参加の機会はなく、パンフレットみたいなものに頼るしかなかったりするんですけども、**実際にパンフレットは見たことがあります？**

和泉 廃炉についてのパンフレットは、この間存在を初めて知りました。

そうなんです。視界に入ってすらなかった。

和泉 そういうことなんだと思います。



# インタビュー 01

実際のところ、本当は廃炉がうまくいかないんだろうとか、ロボットでの調査がうまくいっていないというニュースを聞いたとか、汚染水みたいなのがどこかへ漏れたらいいみたいなイメージが固定化している。

和泉 そうですね。

なるほど。じゃあ、聞き方を変えて、**どういうところに向けた情報発信が必要だと思いますか。**

和泉 やはり、既に浪江に住んでいる住民さんに対してよりは、戻りたいけれども戻れないという人たちでしょうね。すごく難しいと思いますけれども、

廃炉の話から離れて、**放射線のリスクコミュニケーションについてはどうでしょう。例えばここに住んでいて、放射線が高いのが気になるという話ができるのかどうなのか。**

小林 あの辺は高いよねとか、そういう日常会話は時々あるような気がしているんですけども、戻ってきている人はそこでもう気にしていないという感じなので、目立って出る話ではないかなと思います。やっぱり、外からここを見に来た人たちが、ここはどれくらいなんですか、と聞かれたときに答えるくらいですかね。

住民同士で、あの辺は放射線が高いよねというような話しは、**どういったタイミングで出てくるんですか。**

小林 この間あの辺に行ったんですよ、みたいな、山のあそこら辺をちょっと散歩してみました、高いよねとか。あと、あの辺で畑をやるのかなと話して、あそこは高いからちょっとやめたほうがいいんじゃないの、とかそんな感じかな。

和泉 あまり日常的に意識してというのはいないです。普段はもう自分たちの生活があるので、そっちのほうで頭がいっぱい。

そうですか。じゃあ、**そんな日常が始まっているこの地域の希望はなんですか。**先ほどもいろいろ聞きましたけれども、ゲストハウスで何をやりたいみたいな話もそうだし、子育てがしやすい、できるというところみたいなものもあると思いますけれども、**地域の希望**という意味で、他に何かありますか。

和泉 **人が着々と戻ってきているというのが希望そのものだと思います。**

今それをすごく実感しているわけですよね。そして、子育てができるようにとか、仕事があるとか、医療福祉が充実している、それらが魅力で外から人が来るという話があるのはわかりますが、**その先にどんな希望があるんですか。**

小林 そうですね……。

和泉 それを作っていくというのが、多分今いる人たちの、別に使命感を持ってみんなここにいないわけじゃないですけども、やっていくことだと思います。**ある意味ここに人たちが作り上げていくものというのが、これからの浪江町で続いていく**

**ものなので。だから、やっぱりここに人たちが今希望のかなというのは、それが全てかなというのが、自分の中では。**

小林 小学校の入学式に行ったら来賓が50人ぐらい、国とか県とかからいっぱい来たんですけども、その中に10人だけ新入生がいて。だけれどもめちゃくちゃはきはきしてて超元気だったんです。それを見て、都路でもそうだったんですけども、**やっぱり子どもが地域にいるということだけで、もうものすごい大人が元気になる**というのはまた目の当たりにしました。

その流れはでも多分、今後もううまくいきますかね。今から、じゃあその10人よりも減っていくみたいなことは考えにくいとすれば。

小林 そう。やっぱり最低ラインに立った町だから、ここからゼロになることは、もう多分ない。ちょっとずつプラスにプラスにとやっていって、昨日の新聞を見たら、こども園が13人も入ったと。もうびっくりしました。うれしかったですね。

廃炉作業に携わる人たちも、入れ替わりはあるにしろ、この地域に取りあえず住んでいる方が多いわけなので、この先の町を作っていくときにそういう人たちの中で100人に1人でもいいから、町にそのまま滞在して住むという選択肢もあったらいいなというのは思います。

あと、ふたば未来学園の子たちとか、廃炉に興味があるとか、廃炉のことに関する仕事がしたいとかいう言葉を結構聞いていたりするので、ここで学べるんだというフィールドみたいなものになったらいいなという感じですね。

**大学のゼミを受け入れてゲストハウスを使ってもらうのも良いかもしれませんね。**

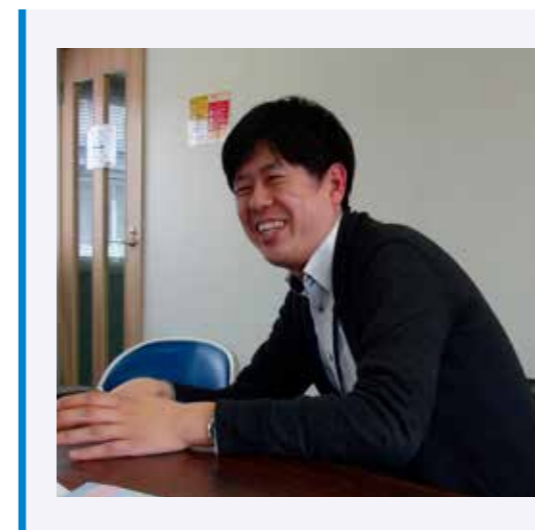
小林 そうですね、ここを拠点にしてもらってあっちに行ったりこっちに行ったり、話を聞いてきたものをここでガチャガチャもんでもらうとかという使い方はぜひしてもらいたいと思っているし、そこに地域の大人が混ぜてもらってもいいと思うし。

いろんな可能性がありそうですね。

小林 うちらはやっぱり移住者というか転入者なので、顔と名前をまず地域で知ってもらわないと何もできないというのもあるので、友達作りから地道にやっていこうかなというのが一番あります。



# インタビュー 02



## 長谷川 勇紀 さん

原発事故後、福島第一原発周辺にあった学校が休校を余儀なくされる一方、今後の地域の教育を担うべく新設されたふたば未来学園。2015年に高校が開校して今年3月には一期生が卒業。来年度から中学の入学者も迎え入れて中高一貫校となる。「未来創造探究」という地域と関わりながら進められる必修授業はじめ特徴的な教育プログラムが進められるのみならず、「学校が終わった後」に子どもたちの力を伸ばすための受け皿も用意されている。校舎裏の敷地の片隅に建てられた建物にある「コラボ・スクール 双葉みらいラボ」だ。その運営をする長谷川さんに話を聞いた。

**こちらはどのように運営しているのでしょうか。**

長谷川 普段はこの施設は学校が終わった放課後の16時頃から20時まで開館しています。スタッフは僕を含めた常駐職員が5人に、大学生の長期インターン生や短期できている大学生ボランティアを含めて、常時8~9人ほどいます。学校と併設しているようなかたちなので、前半は部活がない生徒たち、後半は部活帰りの生徒たちが来館します。またふたば未来学園には寮生が150人ほどいるので、その生徒たちもよく来館し、普段放課後には大体50~60人ほどの生徒が来ていますね。

ここはプレハブの建物ですが、2017年9月に立ち上がり、間もなく1年が経ちます。生徒たちにとっても日常的な居場所になってきていますし、高校併設ということで、先生方との協働機会も増えてきて、最近ようやく活動が安定してきたかな、というタイミングです。

**この双葉みらいラボは、東京・高円寺に拠点を置く認定NPO法人であるカタリバが運営していると聞いています。開館されるまでの経緯は？**

長谷川 カタリバは2001年より高校への出張型のキャリア学習を行ってきた団体です。高校に社会人を連れていって2時間対話をする、というような出張授業という形式で活動をしていました。現在でもこの形式で年間300校程度の高校との関係が続いています。

ここ「コラボ・スクール 双葉みらいラボ」と同じように拠点を持つようになったきっかけは、東日本大震災です。2011年に宮城県女川町と岩手県大槌町に「被災地の放課後学校」というコンセプトで「コラボ・スクール」を開校しました。震災直後は家をなくして仮設住宅などで過ごしている生徒が多く、地べたに寝転びながら宿題をしていたり、なかなか勉強に集中できる環境ではなかったんですね。しかしそんな多大な被害を受けた中でももう一度立ち上がろうとしている子どもたちを見て、教育に携わっている僕たちで何かできないかと考え始めて活動を続けてきました。そういった動きを見てくださったふたば未来学園の関係者が声をかけてくださったのがきっかけですね。学校としては、「ここからこの地域や社会の未来を担っていくリーダーを生み出していくんだ」という方針を持ち、それを公立高校単体だけではなく、地域住民や企業、また僕たちのようなNPOと協働して前へ進めていこうとしていました。一方で、避難を経

験したことがある生徒も多く、心のケアの観点や幅広い学力層へのきめ細やかな指導も重要でした。それら、学校が目指しているものを実現したり、課題に対応したりしていくためにも、手を取り合って、一緒に進んでいこうと話をしていきました。

**そしてこのコラボ・スクールができてきた。長谷川さんはどのように関わっているんですか？**

長谷川 2016年の10月から僕が単独で、当時住んでいた東京から毎週、通い始めました。最初は、先生方との面談を3ヶ月ほど繰り返して、今課題に感じていることや困っていること、またこれからどうしていきたいかななどをひたすら伺っていました。先生方はとても思いを持って語ってくださり、学校のことや生徒のこと、地域のこと、たくさんその機会を通じて勉強させてもらいました。そんな中で生徒たちもふれあうようになり、現状もよく分かるようになってきて、今まで僕たちが活動してきたことを活かして何か価値を提供できればという覚悟が決まってきました。

そして2017年4月にカタリバとして正式にチームを組み、6月には、まずは高校内の空き教室を使用し、福島では初めてのコラボ・スクールを立ち上げました。

**事前の準備も念入りをして、いま、それがしっかり形になっているわけですね。**

長谷川 まだまだだなとは感じていますけれどもね。この場所が定着してきたからこそ、もっともっと生徒たちの意欲や創造性を伸ばせるような仕掛けや仕組みを創っていきたくと思っています。

でも何より、このふたば未来学園にきて最初に大きく感じたのは、「ここに子どもたちが集まっている」という紛れもない事実なんですよ。ここ広野町では住民の7%程度が高校生なんです。全国平均は3%程度なので、それに比べると、ここでの高校生の存在って圧倒的に大きい。子どもたちの声がする場所って、それだけでもこの地域の未来を感じます。

**その高校生がどう充実した生活ができるのか、というのは町の姿そのものにもつながっていくと。プレハブですが、この建物はコマツの寄付でできたんですか？**



# インタビュー 02

**長谷川** そうです。3か月間はどうしても手狭な空き教室で何とか運営していたのですが、コマツさんにとても協力していただき、9月にプレハブをオープンすることができました。当初、コマツさんは東北復興に対してある程度緊急支援的に活動されていて、特にハード面の支援はある程度落ち着いてきたと判断されていました。そんな中で、やはり「建物が必要だから相談させてほしい」というお願いをしたところ、コマツさんもご尽力くださり、ここを建てることできるようになりました。

**元々は校舎内にあったわけですね。それを別の建物にした。実際にたつて、ある程度の時間がたつた、当初やりたかったことは予定通りうまくいっていますか？**

**長谷川** まず大事にしたかったのは、「生徒たちが自分らしく過ごせる居場所を創る」ということです。そういう場所で安心して本音を話しながら学習にも取り組んでもらえたら、と。その意味では、十分な敷地面積がある建物が建ったことで、生徒が安心して使えるようになりました。

またその上で、僕たちは「居場所からステージへ」という言葉を使っているのですが、安心・安全な場所として気持ちよく過ごしてもらいつつも、だからといってここに依存させるわけではなく、ステージを用意し、自らの力で前へ踏み出す経験も積んでいってほしいと思っています。最終的には自立して巣立っていく生徒たちの後押しをしたい。なので何かやってみたいと言う生徒には全力でサポートをしますし、プレハブのスペースを使って、生徒自身の興味関心を深堀するようなイベントを開催したりもしています。

**最近ではどんなイベントがあったんですか？**

**長谷川** 外資系企業の外国人社員との英会話イベントや、漫画のキャラクターの特徴から考えるキャリア学習のイベントなど様々です。生徒たちの自主企画イベントということで、自分を取り組んでいるプロジェクト発表会を行ったりする生徒もいます。この居場所に集まる生徒たちが、ゆっくりではありますが、徐々に自分の意志を持って前へ進み始めているなという実感があります。

**では、当初目標としていた部分がかなり達成できているということですね。**

**長谷川** あくまでフリースペースですから生徒が集まらなければ意味がないので、最初は不安もありました。だからこそこちらから学食に向向いてコミュニケーションを取ったり、先生方と連携して生徒を送り出してもらったりと、地道な活動をしてきました。結果的に生徒たちがこの場所を認識してくれて、また、求めてくれる生徒も増えてきて、いまは生徒たちの居場所として定着してきたのだと思っています。

先生方との連携に関しては、例えば「アメリカ研修に行く生徒がいるからちょっと英語を見てやってほしい」と先生から言われたり、逆にこちらから「その件なら教頭先生に協力してもらいなよ」と生徒にアドバイスをしたり、みらいラボと学校とで様々なキャッチボールをしています。

様々な大人が関わっていく中で生徒たちがどんどん大きくなっていくような成長が徐々に見えてきている段階なので、今、ようやく手応えを感じ始めているところですね。

**自分が高校生の時を振り返ってみても、「学校のクラス」という枠組み以外でのコミュニティや繋がりがつた大切なものだったな、と感じます。ただ、その点で言えば、昔から例えば図書室だとか、友達の家だとか、部活だとか、既にそういうコミュニティがあ**

**ると思うのですが、今あえてコラボ・スクールという枠組みを創ったということには、何か意味があるのでしょうか。**

**長谷川** 確かにそうですし、そういった既存のコミュニティはとても大切です。ただ、全員が全員そういった機会やコミュニティを持っているかという、そうでもない。自分で居場所を見つけられる子もいれば、そうでない子も実はたくさんいる。

例えば放課後の習い事に行く子と行かない子など、家庭の経済状況によって放課後の時間の使い方にはかなり差があるという調査もあります。図書館でも部活でも何でもいいのですが、そういった自分にとっての第三の場所を見つけて過ごすことができることで、とても充実した学びの機会が得られますよね。

でもそれをなかなか見つけられない子も社会には沢山いて、そういう生徒たちにもまんべんなく学びの機会、居場所を届けていきたいという気持ちがあります。

**あとは、家、学校では出会わない人と出会うというのも重要でしょうね。**

**長谷川** それがコラボ・スクールを創ったもう1つの理由でもあります。親や先生との縦の関係ももちろん大事ですし、友達同士での横の関係も大事です。ただ、同質性が高い関係でもあるので、なかなか本音を話せなかったり、視野が広がり切らなかったりもします。そこに更にちょっと年上の先輩のような第三の関係があれば、もっと視野を広げて自分自身の本音や将来のやりたいことに気づける機会が生まれるのではないかな、と。

僕たちは「ナナメの関係」と呼んでいるのですが、親でも先生でも友達でもないこのスタッフや大学生、また、ここに集まる地域の大人たちと関わることで、生徒たちの心が動く瞬間が生まれればいいなという想いで活動をしています。

**コラボ・スクールを立ち上げるまでも大変だったと思いますが、ここから先、何かゴールとして目指しているところはありますか。**

**長谷川** 「先輩の姿がかっこいい。自分もあの人のように頑張ろう。」と思ってもらえるようなナナメの関係がこの地域の中で連鎖していくというのが、理想の形です。

来年度、ふたば未来学園は新校舎ができるので、このプレハブを卒業し、新しい校舎内の多目的スペースへと、みらいラボは移ることになります。今はどちらかという高校生生の居場所メインになっていますが、徐々に学校と地域が協働するようなコミュニティスペースへとコンセプトを移して行って、最終的には地域と一体となって子どもたちを育てていくような方向にしていけないかと考えています。そうやって初めて、ここが持続的なものとして、ちゃんと地域に根付いていくことになるのかな、と。

**それにしても常勤スタッフが5名で金銭的にも大変でしょうし、インターンも長期となるとなかなかハードルが高そうですね。**

**長谷川** インターンの候補生はやはり教育に興味があったり、教師を目指していたりという人材が集まってきます。けれど、1年間という長期間、活動するということで、こちらも採用面接は本気で本人たちと向き合います。こちらが求めているような人なのかはもちろんですが、逆に本人の未来にとって必要なキャリア環境を提供できるのかという点は、しっかりとすり合わせをして検討しますね。

この1年間は立ち上げ時期だったので新規採用が多かったこともあり、今いるメンバーのほとんどは、元々カタリバの職員ではない人たちで、わりと様々な人が集まっています。

**費用面ではどのように運営されているんですか？**

**長谷川** 半分ほどが国からの補助金でまかなわれています。生徒たちの心のケアと学習支援、両方をサポートする場所ということで、予算を立ててもらっています。残りの足りない部分は、カタリバの取り組みや東北支援のために寄付をしてくださる法人企業や、全国の個人サポーターの方々から応援していただき、運営を行っています。

**今集まっている生徒たちを見て、どんな悩みや課題を抱えていると思いますか？**

**長谷川** 一言でストレートに答えるのは難しい部分もあるのですが、これまでたくさん的高校を見てきて自分にとって、まずここに来て思ったのが、「1つの高校だけど1つの高校っぽくないな」ということでした。

だいたいどこもその学校ごとの生徒層の色があるんですよね。ところがこちらは生徒層があまりにも多様すぎて、その色のようなものが感じられなかったんです。多様な生徒層で、学校という枠組みの中で、自由に活動している。後々聞いてみると、双葉郡にあった5つの高校の受け皿として生まれた場所だということ、そして、総合学科という形を取っているということで、なるほどなと思いました。

それも、将来に対しての考えや今感じている課題というのは、生徒によって本当に様々だなと感じています。例えばある生徒は外の大学へ一旦出たいけれど、いずれは地元に戻り地元のために働きたいと考えていたり、またある生徒は高校出てすぐ地元就職したい、と考えていたり。

**必ずしも全員が全員地元に戻って働きたいと言うわけでもありません。ただ、何らかの意志を持って次のステップへ進もうとしている子が多いな**という印象が強いです。

**現在の1年生が4期生ということで、最初は何事にもチャレンジをしている感じがあったのが、徐々に落ち着いてきて、年ごとに生徒の雰囲気も変わっているんじゃないですか。**

**長谷川** 1期生で目立って活動している生徒は、やはり中学時代から目立っていた子たちが多い気がします。2期生、3期生はまた少し違って、元々目立っていたわけではない子も含めてそれぞれがやりたいことを意志をもってやっているような印象です。

**その違いは、どこから来るんでしょうか。**

**長谷川** 1つ目の変化は、だんだんと双葉郡出身者の割合が減ってきているということです。1期生では7、8割程度いたのが、今では五分五分程度になっていて、今後もこの感じで続いていくと思います。ここでやっている教育が、双葉郡だけではなく、**福島全体の次を担っていけるような人を育てる場所だという認識が県内に広がってきている**気がしています。

もう1つの変化は、男女比率が逆転してきたということです。1期生2期生は男子のほうが多かったのですが、最近では女子が6割程度を占めるようになりました。この世代ってやはり女子のほうがアクティブな印象はあって、海外に行ってみたくとか、自分を成長させたいとか、積極的に考える女子生徒が増えてきている印象があります。

いずれにせよ、このみらいラボを含め、学校で様々な機会を設定しているため、生徒全体が引き上げられるようなきっかけが多く場所に転がっていると思います。それが様々な場所で、生徒と化学反応を起こして、一歩前へ踏み出す雰囲気为学校全体で高まっているのだと思います。

**自宅から通えない生徒向けの寮も充実していますね。寮生とそれ以外の生徒とでは、何か違いはありますか？**

**長谷川** 特に大きな違いはないと思います。夏休みなどは寮生以外がわざわざこちらへ出向くのが大変だということはあると思いますが、普段来館する生徒の割合も、そこまで大きな違いはないです。

**でもやはりいわきに行けば駅前にいろいろと学生が集まれる場所もありますが、こちらではその点大変ですよね。**

**長谷川** カラオケもゲームセンターもカフェもありませんし、ある意味、逃げ込む場所がないですよ。学校とは少し違った空間が彼らには必要で、だからこそここに通ってくる生徒がいるんだと思います。集える場所があるということ自体、とても大事なのだと感じます。

**イベントもあるとおっしゃっていましたが、自習とかもできる？**

**長谷川** 現在は2棟に分かれていて、手前の棟が学習棟になっています。教え合いなんかもOKで、大学生が学習支援も行って、キッチンがあったり、自分の興味にアクセスできるような雰囲気作りをしています。そこから創発的にコミュニティが生まれて、イベントが生まれて…ということもあります。

また、個室の相談室もあり、1対1で話したいときに利用したり、打ち合わせスペースとして利用したりしています。

**高校生はケータイ、スマホもだいぶ使いこなしますよね。**

**長谷川** 利用は禁止していないので、LINEをやったり、Twitterをやったり、普通に使います。実際は、だから通ってくれるという点もあるでしょうね。でもそこから、対面のコミュニケーションに誘い出していけるような雰囲気作りは意識しています。

**生徒とコミュニケーションを取っていく上で、何か意識されていることはありますか？**

**長谷川さん** こちらが勝手に言いたいことを言うのではなくて、生徒ひとりひとりがいま何を考えているのか、何を求めているのか、そんなことを見立てながら、コミュニケーションを取っています。

スタッフ同士でも必要に応じてコミュニケーションを取り、いつでも生徒の悩みに対応できる体制をつくれるようにしています。

**結構な頻度になりますよね？**

**長谷川** 僕たちは施設の管理者として、ただそこに居るだけで価値があるわけではなくて、ある意味、ナナメの関係の専門職として生徒たちとコミュニケーションを取っていくことが大事だと思っています。先輩として見えている景色も違いますし、それをどのように生徒たちに伝えていったらいいかの研修をしたり、スタッフ全員で自分たちの生徒への関わり方を振り返るということをしたり、そういった点には力を入れています。

**この地だからこそ持てる希望みたいなものは何かありますか？**

**長谷川** 震災というのはやはり誰にとっても辛く大変な経験だったわけですが、その経験を自分なりに意味つけて、プラスに変えていくことができる子たちって強いんですよ。



## インタビュー 02

そういう子たちにとって、自分から何かを動かしたり、地元のために何かをしようとしたり、辛い経験をしたからこそその強さを持って社会に出て行くタイミングが今なんです。こういう強さを持った子たちが、別に被災地に限らず、人口減少し過疎化していている日本全体を引っ張り、盛り上げていくのではないかと。

辛い経験をバネにして強さを発揮できる子どもたちに希望がある、と。

**長谷川** そうですね。辛い経験をして「辛かったね」「大変だったね」「かわいそうだね」と言われるだけで終わるのではなく、そこから自分の足で踏み張って行く子たちの未来には、希望を感じます。震災に限らず辛い経験をしている子たちって、話してみると強さとリーダーシップを持っていて、こちらも見習うべき大人なんですよ。この地域、この日本をこの子たちがどう変えていくのか、とても楽しみです。

一方で福島第一原発の廃炉についての課題はどのように捉えているのでしょうか。

**長谷川** そこに関しては、自分たちの手の届かないところでいろいろと決まっていってしまうからといって、無関心になってはいけません。この先何十年にも渡る問題なので自分たちはゴールを見ることができないかもしれませんが、それでも積極的に知識を入れたり、意見を求めたりしなくてはいけないという話はしていますね。

以前、ふたば未来学園の生徒たちと、町長を含む地域の方々との座談会のようなものがあったのですが、住民の方がおっしゃってとても心に残る発言があったんです。

富岡の話で、避難指示の解除の後、当時300人くらい住民が戻ってきていたのですが、その方は「16,000人だった住民が300人になってしまった、と言うと絶望的だけど、16,000人だった住民が、一旦全員いなくなり、0人になったが、そこから300人戻ってきた、と思っている」とおっしゃっていて、全く意味合いが変わるというような内容で、本当にその通りだと思いました。

廃炉作業がこの先長い期間かけて進めていく上では、現状を知りたいと思っている地域の方や生徒たちが、しっかりと状況を共有し理解し合っていくということが何より大事なんだと思います。

**そもそも、そういう難しい話はよく出るんですか？**

**長谷川** 「未来創造探究」の授業の中では良く取り上げたりしていますが、日常的な会話の中に出ているわけではないです。日常的になかなか触れる機会もありませんからね。でもやはりここで起こった現実ですし、この地域にとって切っても切れないことなので、もっと触れる機会があるべきだし、子どもたちに伝えていくのも僕たちの役割なのではないかと強く感じています。

この地域で、高卒で就職する生徒はどのくらいでしたっけ？

**長谷川** 2、3割くらいですね。

結構いるんですね。ここで就職するとするとやはり今の最大雇用主は福島第一原発ですし、それ以外にもインノベーションコーストの話があったりしますが、地域産業がこうなっているってほしい、というような話題はですか？

東京で先進的な仕事をしたいという生徒もいれば、一旦東京に行ってから戻って働きたいという生徒もいると思いますが、地域雇用が受け皿となる点での不安定さの部分とか。

**長谷川** そこがまさにここでのホットトピックで、これから考えていくべき部分です。多くの雇用が廃炉のような大企業の下請けになっていて・・・という構造自体を変えていく必要性も考えなくてははいけません。

いかにこの場所ならではの産業を生み出していくのか。関心は高いです。

そういった点でも、ふたば未来学園やみらいラボでやっている探究的な学びを他の浜通りの高校にも導入できないか、入れていけないかという話もあったりします。これから中身のあるものにしていきたいですね。

地域柄、就職は土建系が多くなりますか？

**長谷川** もちろんそういう就職先を選ぶ生徒もいますが、それだけではなく、食品会社や福祉施設など多岐にわたっています。僕たちはカタリバとして全国に8拠点程の場所で活動しているのですが、やはり町の産業が活発なところは、教育にも力が入りますし、逆に、教育に力を入れるからこそ、産業が活発になっている町もあります。教育を核とした町づくりを進めていくことはとても大切だと思っています。

何をもって成果とするのかも、難しいですね。

**長谷川** そうですね。進学率、就職率が成果とされたりしますが、やはりそれだけではない気もします。

ここでは集まってきた生徒が何を生み出したかとか、その後どう地域に還元されていったのかとか、長い目で見た時に残っていくもの、そういう部分が一つの成果になるのだろうなとは思っています。教育はどこまでが成果かなんて言えないので、難しいですけどね。

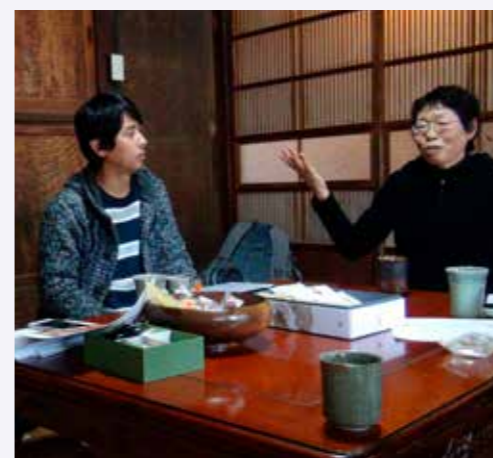
現時点で成果だと言えそうな具体的な動きは、何かありますか？

**長谷川** 2013年から始めている「マイプロジェクト」という活動があります。支援を受けるだけではなく、今度は自分たちがこの町に貢献したいんだ、という生徒たちが手を挙げて立ち上がったプロジェクト活動です。

津波によって何もかもがなくなってしまった町だけど、そこに残った魅力を町に訪れた人に紹介するプロジェクトだとか、なくなってしまいそうな地元の特産品を県内外にPRするプロジェクトだとか。東北から始まったその活動が、今は全国に広がり、年に一度、マイプロジェクト・アワードという大会も開催しているのですが、全国から200を超えるプロジェクトが集まっています。そこに、昨年度はふたば未来学園からも6つのプロジェクトが選出されました。浪江で高齢者と子どもたちがコミュニケーションを取るような機会を創ろうとしている生徒や、双葉郡の情報を「語り部」という形で訪れた人に伝えていく活動をしている生徒などがいます。

自分自身がオーナーシップをもって身の回りをより良くするプロジェクトを起こしていく。そんな生徒が増えていくのは、一つの成果としても追いかけていきたいですね。

## インタビュー 03



### 新妻 洋子 さん・市川 英樹 さん・松本 淳 さん

2015年9月の避難指示解除から3年が経とうとする柵葉町。当初は人もまばらだったが人口は少しずつ増加し、現在までに町内居住者は3000人を超えている。学校、医療・福祉施設、商業施設などが相次いで再開しはじめているが、様々な面でまだ足りないものもある。これから何が必要か。いまま町のシンボルとされるゆずの栽培に取り組む新妻洋子さん、今年度から柵葉町で「田んぼアートプロジェクト」を進める市川英樹さん、柵葉町を拠点に双葉郡をドローンで記録する松本淳さんに話を聞いた。

最初に、みなさんの最近の活動などについて、お伺いします。まずは、新妻さん。ゆずの栽培を原発事故前からはじめて、再開されています。今年から、ゆず酒も再開するそうですね。

**新妻** 柵葉町でゆずの栽培が始まったのは30年ほど前でした。竹下登首相の時代に「ふるさと創生事業」がありましたね。全国の各市町村に自由に使える1億円を交付するという。柵葉町では町の特産品にしようとしてゆずの苗を全戸配布したんです。「柵葉をゆずの里」にすると行って、植栽する人を募って、苗木を無料で配った。植えるときは、筑波大の先生が来てくれて、地形や気候まで調べてくれたんです。そして、「この土地なら」って。そのときに、町民有志で「ゆず研究会」を作って、少しずつ収穫量を増やしていきました。ゆず酒を発売したのは、震災の前年です。純米酒をベースにした「ゆず里愛（りあい）」というお酒で、初年度は1000本がすぐに売り切れるほど好評でした。翌年は出荷数を2000本に増やす予定だったんですが、1000本造ったところで3月11日の震災でしょ。私たちが売ったのは300本くらいでしょうか。残りは震災後に、酒造会社がインターネットで販売したそうです。2年前、町に戻ってきてから、ゆず里愛を再び売れるようになったときに私たちの復興だと思って、ゆずを育ててきました。ようやくゆず酒造りが再開できて、すごくうれしいです。

柵葉町のご当地キャラ「ゆず太郎」であったり、天神岬に宿泊したときも部屋にゆずのお菓子が置かれていたり、いままゆずは町のシンボルとして健在ですね。次に、市川さん。市川さんは、4年前に原発の作業員として福島に来られたんですね。

**市川** 私は愛知県豊田市に住んでいたのですが、震災後、ずっと福島のことを気になっていました。被災地支援のボランティアとしてくることも考えたのですが、やはり原発のことを知りたいと思い、原発で働くことを決めました。愛知の友人には相当反対されたのですが、「本当に被ばくして危険なら1カ月か2カ月で帰ってくるよ」と言って。契約は半年だったのですが、結局1年働き、その後福島に居ついてしまいました。

愛知に帰ろうとは思わなかったんですか。

**市川** やはり、福島の人魅力ですね。最初来た頃は、申し訳ないのですが「福島の人ばかりかわいそうだな」と思っていました。しかし、実際に住んでみると、福島人は明るくて、元気良くて、人がいいんです。見ていると、「このまま風評被害で福島の良さが失われていっていいのかわからない」ともったいなく感じられて。そんなときに、たまたま知り合った居酒屋の大將に「いっちゃんがいなくなると寂しくなるよ」と言われて、「じゃあ、こっちで住んでみようか」ということになりました。そして、休日ごとに地域のイベントを回るようになる中で、たまたま田村市常葉町の田んぼアートのイベントに参加したんです。これが楽しくて。

そして、原発作業員として働いているときの風景を思い出しました。震災・原発事故から3日目、家から福島第一原発に向かう道を往復する時、そこは草でボウボウになっていた。ここも前は田畑があったんだろうな、どうにかできないかと考えていたんです。そこを再生して、もう一度作物をつくる。そして、そこに田んぼアートがあれば、外からたくさんの人が見に来るようにできるんじゃないか。そう思い立って「福島田んぼアートプロジェクト」という団体を作り、自分で田んぼアートを主催するようになりました。去年はいわき市四倉町で田んぼアートをつくって、今年から柵葉町でもはじめました。サッカーのナショナルトレーニングセンター「Jヴィレッジ」の一部再開を記念して、Jヴィレッジ近くの水田で高校生も巻き込みながら作業をしています。

原発事故から7年経って、支援者は減少傾向にあります。その中でいまの取り組みはどういう意義を持ちますか。

**市川** 阪神淡路大震災が約20年前に起きました。震災後10年くらいは世間の関心も高かったのですが、その後は少しずつ記憶も薄れていっているような気がして。今では神戸で大地震があったことさえ、忘れてる人が増えている。福島だって同じでしょう。田んぼアートをやっているということ県外はもちろん、世界にも発信して、多くの人に見に来てほしい。多くの人やってくれば、町の人たちとの交流が生まれ、柵葉や福島のこと知ってもらえます。僕はもともと外の人間ですが、



# インタビュー 03

**楢葉町をはじめ、いわき市や浜通りを盛り上げていきたい。お金になるわけではありませんが、それが僕の仕事だと思っています。**

ありがとうございます。続いて松本さん。ドローンを使って、取り壊さざるを得なくなった避難地域の家屋や閉じられていく仮設住宅とそこに住んできた人たちの姿などの映像記録を撮影する取り組み、あるいは、町の魅力を発信するインターネット動画を作っているらしいです。最近も取り組みがテレビで取り上げられていました。いまのご活動に至った経緯を教えてください。

**松本** 私は楢葉町出身で、震災前は会社員をしていました。震災後、家屋が次々と解体されていくのを見ていて、知っている風景が変わっていくのがすごく切なく、悲しくなりました。町の記憶というか、地域の記録を残していきたいと思い、ドローンで家屋などを撮影し、映像を持ち主に渡す活動を始めました。それが3年前です。これまで解体される家屋を50軒くらい撮影して、今も続けています。

あと、楢葉町の活性化や復興をサポートしようと発足した民間団体「ナラノハ」の活動に参加しているのですが、今年度から「ナラハチャンネル」という映像サイトをインターネットで立ち上げました。毎月、楢葉町の人々や自然、歴史、文化などユーモアを交えて紹介しています。

**松本さんは、今もいわき市に住んでいて通ってきているんですね。**

**松本** はい、私は、まだ町に戻ってきていない側の立場です。家が津波に流されてしまったので、一応、公営住宅は無料で借りられるのですが、今すぐ、そこに住めるかというとなかなか難しい。私の年代は子供が生活の中心ですから、震災から6年も7年も経つと転校させるのはかわいそうだということになって。けれど、いわき市でのコミュニティには、いまだに溶け込めていない。その中で楢葉に10割の力を注ぐという感じでやっています。

ありがとうございます。お三方とも、それぞれの立場から楢葉でご活動されています。それぞれもう少し詳しくお話をうかがいたいと思います。まず、新妻さん、避難している時、ゆずのことを考える余裕もないぐらいに大変だったんじゃないですか。

**新妻** 震災後はいわき市の仮設住宅で避難生活を送っていましたが、ゆずづくりを再開したいという思いは強かったですね。ただ、一時帰宅で初めて戻ってきたとき、ゆずの木が見えないくらい、周りの草が高く伸びていたんです。背丈以上の高さがあった、草むらからイノシシが飛び出してくるんじゃないかと思ったら、近づくこともできない。それを見たときに「ゆずはもうやれないな」と思いました。当時、果汁の多い果物は放射性セシウムの濃度が高いとも報道されていたので、「もうだめか」って涙が出ました。

**でも、あきらめなかった。**

**新妻** 平成24年に警戒区域見直しが行われてから、ちょっとは自宅に戻れるようにもなって、ゆずの実を取ってはセシウム濃度を測ってもらうようにしていました。26年からは農業普及所の先生が検査して結果を郵便で送ってくれたんです。そうやって測っていると、しだいに濃度が減っていくのがわかるんです。一番最初は400ベクレルだったのが、次の年は180ベクレルになって。

半減していく濃度の数値をみて、「これは大丈夫かもしれない。早くうちに帰って、ゆずの世話をしたい」と思うようになりました。ゆず酒「ゆず里愛」のことも心残りで、「飲んでみたいな。オンザロックで」なんて思うと、一層もういちどゆずを栽培したいという思いが強まりました。避難生活を送る中で、それが私の元気の素になったというか、私には家に帰ってやることがあるんだという気持ちにさせてくれました。自宅に戻ったのは平成28年8月9日です。自宅に戻ると、もう周りは藪になっていて。毎日のように草刈りをしていました。イノシシも庭にやってくるし。大変なことになったと思いましたね。



**ゆずが食べられるようになったのは、いつ頃からですか。**

**新妻** 昨年のゆずの検査結果はND（不検出）でした。一昨年には、先生に「もう大丈夫だよ。もう新妻さんのゆずは食べていいよ」って言ってもらえました。そこで、果汁を絞って、よい実と一緒に箱詰めにして、支援物資を送ってくださった方たちに送りました。あと親類にも送って。昨年と一昨年と。すごく喜ばれました。

**松本** ゆずができるようになって、ゆず里愛が復活するのは楽しみですね。ゆず酒づくりの様子をぜひ取材したいです。

**新妻** 4月に果汁を絞って、酒蔵に持っていくんです。純米酒に果汁を加えるだけなので、出来上がるまで、そんなに日にちはかからないようです。今は、ラベルをどうするか考えています。

**いよいよ形になってきたわけですね。市川さんは、田んぼアートを始めた頃、地元の方の反応はいかがでしたか。**

**市川** 最初はいわき市でやって、昨年、楢葉町でもやりたいと言ったんですが、楢葉町の人たちはすごいですね。いわき市の人たちも親切に協力してくださったのですが、楢葉町では町長をはじめ、木戸漁港の組合長や商工会の会長まで本当によくしていただきました。僕みたいな人間に任せていいのか、と逆に思ってしまうくらいで。田んぼは松本さんに紹介していただきました。

**松本** 田んぼアートは高いところから見下ろせないといけないうじゃないですか。平地からでは、田んぼの絵がわからないので。天神岬とか、田んぼを見下ろせそうなところをいろいろ探した

んですが、なかなかよい場所がなくて。田んぼから距離が遠すぎるとか、周囲の景観がよくないとか。そんな中で、たまたま近くでいいところが見つかったんですね。それで紹介することができて。

**市川** 僕もいろいろ見たんです。楢葉町で。運動場に行ったり、天神岬へ行ったり。その中でも紹介頂いた田んぼはばっちりの場所でしたね。

**松本** まだまだ、コメ作りを再開した農家が少ない中で、田んぼアートという形で、多くの人に楢葉でコメができてのを見てもらいたいという考え方は、すごくいいと思いました。私もドローンで上空から見た田んぼアートの映像を撮影して、情報を発信するお手伝いをしています。市川さんのような面白いことをしてくれる人が町に来てくれるのは、ありがたいことです。

**市川** 楢葉町のいいところは、新しいことをやろうとすれば、それができるといことです。田んぼアートにしても、それを受け入れてくれる態勢がある。いわき市で田んぼアートをやったときは、周囲に大反対される中でやったんですけど。

**松本** いわき市は、多くの農家がコメ作りを再開していて、田んぼアートをやる場所がありません。この辺は、いくらでもと言ったらいい方が悪いかもしれませんが、まだコメを作る人がいなくて。平成30年までは田畑の保全管理をすることとは決まっていますが、そこから先は見通せない。だから、今の楢葉の姿をとりあえず見せようという活動を若い人たちが始めて。すると、そうした活動にテコ入れしてくれる地域の人たちが現れるんですね。田んぼを耕すのを手伝ってくれる人とか。こうしたことが、将来農業を再開していく中でいい流れになってほしいという思いはありますね。

**昨年から始められた「ナラハチャンネル」の反応はいかがですか。**

**松本** 昨年秋から、映像の公開を始めたんですが、まだまだ認知度が低いというのが課題ですね。もっと行政と連携できれば、もう少し知ってもらえるのではないかと、という気もします。こうした情報発信は本来、町が取り組むべきものだと思うのですが、なかなかそれができないから、街づくりのサポートとしてナラノハがやらせてもらっているという状況です。今年度も楢葉町のよいところを発信するために番組を制作していきたいと思っています。できるだけ多くの人に番組を見てほしい。町民だけではなく、日本中、世界中の人たちに見てもらえるような内容にしていきたいです。

**市川** 本来は町がやるべきことだけど、自分たちでできないかなあという思いは私にもありますね。先ほど、Jヴィレッジ近くで田んぼアートをやると言いましたが、せっかくJヴィレッジが一部再開するのだから、何か宣伝できないかという勝手な思いがあるんです。

**新妻** 松本さんや市川さんの話をうかがっていると、うれしくなりますね。こんなすごいことをやっている人が近くにいるんだって。

**そうですね。戻って来られて町での暮らしはいかがですか。課題などがあれば。**

**新妻** 震災前に比べて、本当に寂しい町になってしまいました。私の自宅から役場まで歩いて30分ほどかかるんですが、途中の家はみんな解体されてしまって、家も店もない。震災前は、何人もの人と挨拶を交わして、世間話をしながら歩いていた感じがして、今は途中で誰にも会いません。人がいないんです。

**復興の拠点として「笑ふるタウンならば」ができますね。**

**新妻** もともと、私の家は近くに郵便局も商店街もあって、駅にも近い便利なお店があったんです。ところが、今は全部、笑ふるタウンに行ってしまうと、近くには何もありません。この間、「自分の家に戻ったから悪いだろう」という人がいたんです。でも、家があるのだから当然でしょ。自分の家に戻るのには。

**松本** そりゃあ、住み慣れた家に戻りたいですよ。

**市川** 僕は外部の人間で、横で聞いているだけで、色々急ぎすぎていることもあるような気がします。まあ、できちゃったので、今さらなんですけど。

**新妻** 2月末に、竜田駅西側開発についての会議があったんです。そこで、「最後に何か言ってください」って指名されたので、私は「避難指示は解除されました。帰ってきなさい」と言われて元の家に戻った人はすごく不便な暮らしをしていますって言ったんです。復興だ、復興だと言われても、私たちにとっては住みづらい町だとしか言えない。

**町の玄関口って、われわれは駅だっと思うんですけど、その駅前にお店が一軒もないんです。**この前、89歳のおばさんが、東海村から一人でうちに来たいって言って電車に乗って来たんです。そのおばさんが、竜田駅から出た瞬間、涙が出てきたって言うんです。何も無い、駅のすぐ前が草になっていて、悲しいって。

**どうすれば改善できるでしょうか。**

**新妻** 行政がもっと住民と一緒にやっていくという意識があればと思います。例えば、最初に配布されたゆずの苗木は自分たちで植えて、そのあとは、何も行政との関わりがありません。今回、震災があって初めて農業改良普及所の先生がきてくれて。最初は放射線量の計測があったからだったんですけど、私たちが、「剪定の方法とか、今まで何も教わっていません。これまで自己流でやってきましたけど」と言ったら、何回か先生が来てくれて教わりました。

ちょうど2010年、町で「ユズ料理コンテスト」をやるといことになって、「何か作って応募してくれないか」と役場に頼まれたんです。私はそんなに料理が得意ではないので、ゆずジュースとゆず入りもちようかんの2点を出しました。そうしたら、ゆずジュースが最優秀になって。「最優秀になったものは商品化します」という話もあったんですが、翌年に震災でしよう。それっきりです。

**松本** 楢葉には、結局、お土産になるような特産品ないですね。



## インタビュー 03

**新妻** 「ゆず里愛」は何かイベントがあると、商工会にお土産に使っていただきました。すごく重宝されましたね。それだけに、復活させたいと夢見てきたんです。震災から7年目ようやく叶って、それはよかったなって思います。

**市川**さんは震災後に町に来られたわけですが、町の課題をどうとらえていますか。

**市川** 僕は今、木戸駅近くに避難指示解除後にできた「結のはじまり」という小料理店の手伝いをしているのですが、町の人を見て思うのは、**新妻さんもそうですが、戻ってきた人は元気がよすぎるということですね。**

**松本** 逆に元気がいいから、戻ってきたんでしょうね。

**市川** たとえば、店で言うと、60代、70代の人たちが夕方5時から酒を飲み始めて、9時、10時まで宴会のように盛り上がる。

**新妻** そっちね。そっちの方が元気でこと。

**市川** そしてね、僕らみたいな30代、40代に元気がない。

**松本** 確かに。それは課題かもしれない。

**市川** そう。町の中高年にパワーがありすぎて若い人に力が入らないのかもしれない。お父さんやお母さんに元気がなかったら、俺たちがなんとかせにゃいかんって、踏ん張らなきゃいかんってなるんでしょうけど。

**松本** 確かに60代、70代の人たちは町に戻ってきていますが、自分のような20代、30代の若い世代は戻ってきていないし、町のために何かやりたいって人も少ないですよね。全くないわけではなくて、ちらほら現れてきてはいるんですが、まだまだ若い人の力が足りないと感じます。これは楳葉町だけではなく、双葉郡内全体でそうなんです。

**市川** 震災後に外からやってきて、頑張っている個人ばかりが目立ってしまっている。僕もその一人ですが、もっと地元の若い人が活躍していけると良いですね。

その点、若い人が放射線を気にしてあまり帰ってこないというもの言ひもよくありますが、放射線量の問題はどう捉えられていますか。

**松本** 帰還困難区域の見直しはもっと早くした方がいいと思いますね。3年後とか5年後とか言わずに。遅くなればなるほど、帰還しにくくなりますよ。1年遅れるだけで、帰還は難しくなるんです。

**新妻** 私は、楳葉町が一番早く解除されるのではと思っていました。早く規制が解除されて、町と住民が一緒になって復興に向かってやっていけるのかなって。それを見て、他の町村も住民の帰還が始まるのだろうと思っていました。なかなか、全部うまくいくわけではありませんけど。うちの息子は茨城県東海村の原子力関連企業に勤めていまして、今は楳葉町にできた廃

炉研究施設（モックアップ施設）に来ています。息子は「東海村から来た技術者は、楳葉町の放射線はもう大丈夫だって言うてるよ」って言うんです。「だから、絶対に怖くない」って。

中間貯蔵施設の問題も障害になっているんじゃないですか。最終処分は県外で行いますなんて、どこが引き受けてくれるんでしょう。結局は大熊町、双葉町の中間貯蔵施設が最終処分場になるんじゃないかって。

**市川** 中間貯蔵施設にしても、自分が犠牲なることで福島復興が進むんだという思いでハンコを押している人が多いと聞きますからね。福島の人って、やはり人がいいんですよ。最初は反対の声が大きくても、時間が経つほど、そうした雰囲気が出てきて、最終処分場を受け入れちゃうかもしれない。

福島第一原発の廃炉問題については、みなさんどう受け止めているのでしょうか。

**松本** 廃炉って、なかなか地域に住んでいても、接点がないですよ。それなのに、住民たちにいろんな責任がのしかかってくる。帰還をするかどうか、とか、中間貯蔵がどうなるかもそうです。いろいろな問題を背負わされて、住民はいっぱいいっぱいになっている気がするんです。本当は住民も、県外から来た人たちの話も聞いて勉強し、地元が抱える問題について自分で語るなければならないと思うんですが、住民が勉強してどこまで知ることができるかといえば、そこは難しい部分があるんですよ。でも、廃炉にもしっかり関わっていかないと、問題を次世代に先送りすることになる。

**松本** 住民の間では、30年、40年では終わらないと思っている人も多くいます。一応の計画を挙げているだけで、本当は終わらないかもしれない。そのときは30年後に考えたらいいんじゃないか、とか。まさに先送りですよ。そもそも、30年って何を根拠しているのか、という疑問もあって。

原発で働いていた側として、廃炉をどう見ていますか。市川さんは。

**市川** 私にとっては、廃炉は仕事でしたから、廃炉に携われれば、お金になるという感覚ですね。だから、仕事が廃炉だろうが、単純に作業員らは仕事場に近い場所に住むようになり、作業員を目当てに飲み屋ができて、街がでてきていく。

それは原発ができるときと一緒にですよ。

**市川** そうなんですよ。お金の話で言うと、僕も原発で働いていたころはお金の心配をすることなく生活できていたけど、原発の仕事をやめて、いまやっているようなイベントをやるようになると、**どんどん赤字が膨らんで、「このままお金が尽きたら、やりたいプロジェクトもできないな」という感じになってきて。結局、廃炉に携わって働く人や業者は儲かるし、懐も潤うけれど、地元を離れた人たちが、地元に戻ってきた人たちは何も恩恵がないですよ。別に地元への補償という話ではなくて、やる気があって地元に戻ってきて、なんとか地元を盛り上げようとしている人たちが空回りしてしまっているようなもどかしさがありますね。**

僕も、汚染した地下水を遮断するために地面を凍らせて遮断



壁にするとか、破損した第一原発のカバーを解体するといった現場に携わったんですけど、現場は廃炉のような遠いゴールの話ではなく、毎日の業務で精いっぱいですからね。たまに東京電力の偉い人が来て、「今の状況はこうなっています」などと話をしていくけれど、仕事として見れば、

はっきり言って、お金もらえればいいし、とにかく早く仕事を終わらせて帰ればいいし、もっぴらの関心は「危険手当はちゃんとでているかなあ」といった辺りの話だったり。

**新妻** マスクをかけないで行う安全な現場よりは、マスクをかけてやる現場の方がいいとか。

**市川** やっぱ、そうなっちゃいますよね。危険な仕事の方が手当てもつくし、その代わり、そんな現場は被ばく量の関係で、長期間続けられないという面もありました。

結局、産業があるところには人が集まるし、そうでなければ人は離れて行かざるをえなくなってくる。

**市川** 今、福島の被災地で頑張っている人たちも、このままの状況で資金が底をつけば、結局、お金になる東京オリンピックの現場だとか、他の災害復旧現場で働くことを考えると思うんです。お金になるところには人は集まるけれど、お金にならないところは、人が減って過疎になるという状況ですよ。

そうですね。過疎も、原発をめぐるいろいろな問題の根源の一つなんですよ。一方、市川さんがそうであるように、いまだからこそ、福島の被災地に行こうという人も出てきているわけですね。第1原発を見学に来る人も増えています。

**市川** 広島では原爆ドームが、原爆の恐ろしさ、悲惨さを伝えるものとして残ったじゃないですか。原爆投下直後には死の街だったのが、今は世界遺産になって。別に第一原発を残して世界遺産にしるとまでは言わないけれど、それくらいの価値のある遺物だとして残すことも考えるべきだと思うんですよ。一度見ておく価値のあるものだと注目を浴びれば、この地域も変わってくるのではないかと。今、この地域は、かつての広島のように「死の街」のようなイメージがあるかもしれませんが、逆に「第一原発を世界遺産にしよう」というぐらいの熱意をもって、地元を盛り上げるために多くの人に活動してほしいと思います。

僕は第一原発の作業員として誇りを持って危険な作業にも従事してきたと言えるんですよ。周囲には「過酷な労働条件の中で頑張りましたね」と同情されたり、ねぎらわれたりするんですが、私には元作業員としてのプライドがあります。東京電力の中でも、「作業員には誇りを持って仕事をしてほしい」と言っている人がいました。だから、今もイベントなどに取り組むときには、元作業員としてのプライドを持って福島のために貢献するという気持ちでやっています。自分に自信をもって、何かをやり遂げるチャンスだと思ってね。

**新妻** なんか、うれしいよね。そんな気持ちでやってくれること。

**市川** これは福島だからこそ、やりたいって思うんです。故郷の愛知県だったら、体張ってまで何かやろうとは思わないもんね。そうさせるのは、新妻さんもそうですけど、福島の人魅力ですよ。本当に、この町の人たちは自分の町が好きで、その良さは実際に来てもらえれば絶対わかる。いろんな人たちがフォーラムなどを開いて町の様子や暮らしぶりを世界中に発信しているけれど、やはり、実際に町に足を運んでもらわなくちゃ。僕がやっている田んぼアートだって、インターネットの動画や写真でみるだけじゃなくて、実物を自分の目で見てほしい。そのあとで、海産物やゆずなども食べてもらって、「なんだ、普通の生活を送っているんだ」と感じてほしいんです。「普通だよ、こっちは」みたいなことを僕は、体を張って発信していきたいと思っている。僕がバカなことをすれば、人が集まってくるのなら、どんなバカなことでもしますよ。そんな気持ちです。

いま、楳葉町には廃炉や除染、家屋解体などの作業員の方も多く住んでいます。

**新妻** 自宅の周辺でも、田んぼを全部つぶした後に、廃炉や家屋解体の作業員の方向けの宿舎が数多く建っているんです。作業員の宿舎があっちこちにできたとき、町民の中には作業員を悪者みたいに言う人がいました。でも、「そういう人たちのおかげで町が潤うようになるんじゃないかな」と、思っています。

**市川** 「結のはじまり」なんかは役場の人と作業員が客としてやってくるので、ちょっとした交流の場になっているかな。

**新妻** そういう場って大切だと思いますよね。われわれみたいに戻ってきた人間と作業員さんたちが、他愛のないことを話したり、困っていることを話したり、「楳葉にはこういういいところもあるんだよ」と話したり。

**市川** それができないと、結局、廃炉が30年から40年続くとなると、地元町民向けと作業員向けで、町が分かれてしまうかもしれませんね。飲み屋ができて、地元の人あまり行かず、作業員ばかりという店ができるかもしれませんし。

**新妻** 町民と作業員が交流できる会、場所を作りたいよね。みんな集まってよい点、悪い点、いろいろ出し合って。長くここで働く人もいるでしょうし。そんな人たちと楽しくやっていかなかったら、これから先、変な町になってしまうじゃないですか。

**松本** 住民向けの集まりはあるんですけどね。座談会みたいのとか。

**市川** 僕もそうですが、作業員ってだいたいが単身で来ているので、そういう場があれば、どんどん参加したいという人が多いでしょうね。

**松本** 市川さん、以前言っていましたよね。普通、週末はパチンコくらいしかすることがなくて、悶々としていたって。



## インタビュー 03

**市川** 作業員って流れ者が多いので、町民がよくしてあげれば、「住み着いてしまおうか」という気持ちになりますよ。作業員に定着してもらえれば、町も潤っていきます。作業員ははっきり言って、所得は安定していますから。

**新妻** この前、そば屋さんと息子と入ったら、作業員らしき人たちが6人ほど入ってきたんです。そして、その方たちが話している内容が耳に入ってきたんですが、榎葉町のことだったんです。それで、私、声をかけたの。私も榎葉なんですけど、どこにお住まいなんですか。そしたら、うちの近くなんです。そんなんで話が盛り上がりちゃって。町のことをよく知らないようだったから、そこはこうなんですよ、という感じで。帰り道で息子に「お母さんは誰とでも話をするんだね」って言われたけど、そうやって、町民と作業員の方たちが自然に話せるような町にしていけないと。廃炉作業や除染作業をする方たちがいるから、復興していく、これから良くなっていくわけなので。

ここ、そんなに寒くはないし、夏も暑くないし、台風もあまり通らない。

**松本** 住みやすいですね。海も山もあって。スポーツができるし。



**市川** もちろん、行政にもやってもらわなければいけないと思いますが、新妻さんのような方のマンパワー、声掛けが大事ですよ。俺の場合も、知人に「お前がおらんと寂しくなる」って言われたもので、ボンとこの町で暮らすことを決めちゃった。なんか、やっぱり心に届く一言なんですよね。  
**新妻** そうなんだ。

**市川** そう、人間なんてそんなものです。俺はちょっと頭が弱かったから、後でその知人に聞いたら「俺、みんなにそう言ってるよ」って。そうか、俺だけじゃなかったんだって。こんな俺みたいなものいるんですよ。だから、そういうきっかけを増やしていけば。

**新妻** 本当ですよ。同じ地域で生活を送るわけですから。挨拶一つで違ってきますよね。それは大切なことだと思う。町でも、そういうことをね、やってくれればいいね。

**市川** ですから交流会のようなものも大事です。飲み屋や飲食店でも、声をかけあい、雑談をすとか、ちょっとしたところから何かできればいいのにとおもうんですけど。

**新妻** そば屋でも、「休みの日に夜、飲みに行こうと思って飲み屋がない」という話から始まったんですよ。それで、「ああ榎葉町で暮らしているんだな」と思って声をかけたんですけど。普通に話してくれましたよ。煙たがられることもなかったし、粗野に扱われることもなかったし。地元の人には「作業員は怖い」なんてイメージがあるかもしれないけれど、それはイメージだけで。怖くもなんともありませんでした。

**市川** 寂しい思いをしているんですよ。休みでも行くところがないから、飲み屋に行ったり、ギャンブルで過ごしたりしてしまう。

そういうところで鬱憤を晴らすから、「怖い」なんてイメージがつくんでしょね。だから、「今度草刈りをしますので、来てくださいよ」なんて言われたら、「町民じゃないけれどもいいのかな」なんて思いながら、行きますよ。本当に、町の人に受け入れてさえいただければ。

**新妻** 先日、街の花壇に花を植える活動をしていたんです。そしたら、「新妻さん、この前はごちそうさま」って声をかけられて。「誰かな」と思ったら、東京電力の社員さんだったんです。以前に花植えをしたときに、その人も来ていて。私はお茶を出したり、ジュースを出したりしていたんです。その中に風邪をひいている人がいて、ユズの果汁とショウガと蜂蜜を混ぜて、熱いお湯を差して渡しました。作業中に。それから、「夜に飲む分も作ったから」とペットボトルに入れたのを渡したんです。それを覚えていてくれたんでしょうね。作業を終えて帰るときにも挨拶に来てくれましたよ。「私たち、これで本家に帰ります。お世話になりました」ってね。そういうことの積み重ねで、人はつながりを深めていくのではないのでしょうか。

**松本** 東京電力の社員も草刈りなどに、制服を着て参加していますね。でも、そうじゃなくて、制服なんか着ずに、もっと近い関係になっていけばいいのに、と思いますね。



## インタビュー 04



### 志賀 風夏さん

全村避難を経験した川内村。多くの住民が帰還してきた一方、元からあった過疎化や生活上の利便性などの課題は残り続けている。川内村産ワインの製造に向けたブドウ栽培など地域内外を巻き込んだ新たな取組を通して、新たな魅力づくりが進む。川内村の文化の拠点の一つが詩人・草野心平の別荘であった天山文庫だ。川内村で育ち、大学を出て再び戻ってきて、天山文庫の管理人になった志賀さんに話を聞いた。

現在、川内村に住み、天山文庫で働かれています。あらためてプロフィールを紹介していただきたいと思います。

**志賀** 私はここで生まれました。両親の出身は父は浪江で、母は相馬で、ふたりとも陶芸家です。父は東京の大学へ行ってから、京都で仕事をしてたんですけど、30年くらい前に川内に引っ越してきて。私はそのまま川内で育ち、高校に入る時にここを出ました。

高校は相馬高校です。このへんで高校へ行くには、双葉高校か双葉翔陽高校しか選択肢がなくて、あと富岡高校もあるんだけど、富岡だと5時半に起きてバスに乗って、電車に乗って、そこから自転車で乗らなきゃならない。私は朝が弱いし、そんな苦痛には耐えられないし。それに相馬高校から歩いて5分くらいのところに母の実家があって、そこで祖母が一人で暮らしてたんです。それで相馬に決めて家を出ました。震災があったのは、高校1年の終わりで、それで一時期避難して、相馬高校に戻った後、福島大に4年通いました。

就職はどう考えていたんですか？若い人が川内で働く場所も限られるわけで。

**志賀** 私は特に就活をする気もなく、東京へ出ようとも思っただけで、こっちは戻って来ようかなと。天山文庫に入れたらいいなとは思ってたんですけど、はじめは空きがなくて、川内に震災後にできたカフェ「AMAZON (アメイゾン)」に勤めました。でもすぐ、いいタイミングで天山文庫の募集があって、今日に至ります。去年の4月からだから、もう1年たちました。

なるほど。かつて草野心平の別荘だった天山文庫ですが、実際に働き始めていかがですか？

**志賀** やっぱり勤め始めたら面白いです。元々、文学が好きだけど、詩はよくわからないなと思ってたし、小学校の遠足で天山文庫に連れられてきても、つまらないなという記憶があって。小学生に草野心平って言われてもね。でも勤め始めてけっことはまったんです。面白かったら、

それをやっぱり人にも伝えなきゃって。今は本当に建物や蔵書を保存するだけになってしまっていて、イベントもマンネリ化して、何年も同じものを繰り返してる。新しい試みを企画したり、もっと人が来やすい環境にできればいいなって思っているんですけどね。

イベントのマンネリ化ってのは？

**志賀** いわきにも草野心平記念館があるんですが、あそこはあれこれ企画展やイベントをやったりして、リピートしてもらえます。ここはそうじゃない。

心平さんを好きな人で、60代以上なんです。年配の人は心平さんをすごく好きでも、その下の年代は興味ないですね。草野心平は川内の宝だって言われて育ててきたのに、若い人には関心がない。そうすると心平の企画展って言うても、なんのこともかわからないし、見に来るはずもない。だから企画展も長い間やってないし、展示も動かしてない。

建築の専門家に言わせると、この天山文庫の古民家は洋風建築でけっこう面白い建物なんだそうです。ふつうの古民家がそのまま残ってるのとは違うと。それに、若い人の間で、詩がちょっとしたブームになって草野心平も注目されてるとも聞きます。今までそんなブームはなかったから、ここで若い世代を取り込んでおかないと、次はいつチャンスが来るかわからない。そういうところもアピールすれば、もっといろんな層の人たちに来てもらえるようになると思ってます。

先ほど言われた60歳以上なら心平さんを好きってのは、やっぱりナマの草野心平を知っているからということですか？

**志賀** そうです。いまの60代はぎりぎり、70代の方は本当に心平さんと交流があって、もちろん心平さんを大好きだし、心平さんのいろんなことを知ってるし、本も読んでます。

川内村を知らなくても、草野心平の天山文庫を知ってる人は多いです。年配の方ですけど。お年寄りが知っている心平さんのエピソードを、下の世代にどうやって引き継いでいったらいいの。経歴はネットで検索すれば簡単にわかるけど、実際に心平さんとお酒を呑んであ



# インタビュー 04

だった、こうだったっていう話は、そのお年寄りたちしか知らないことだから、なんとかして残しておきたい。そういう話を引き継げる場所にしたいなって思いますね。ここは村が運営してて、私は正社員になって週に6日働けるから、これからそうしたこともできるかなと思っています。

なるほど。志賀さんが高校生の頃、その先、大学生や社会人になって、自分が何を指して、どう生きて行こうかを考えていたと思うんですけど、そんな時に震災があって、真正面から現実と向き合わざるを得なくなった。被災とか避難とかに直面して、高校1年生が大人として震災に向き合えるはずもないんですが、今、川内村に帰って仕事に就いている自分と、あの震災の中にいた自分と、何かそこに関連性を見ることってありますか？ たえば、震災があろうがなかろうが、私は天山文庫にいるとか、苦難の川内村を考えて今ここにいるんだとか、色々な方向があると思いますが。

**志賀** 私は震災があったから帰ってきたわけじゃないし、復興を支援したいからでもありません。ただ実家がここにあるので、帰れるようになったから帰ってきたんです。ちょっと意識が低いなあって思うこともあるんですけど、正直に言えばそういうことです。

震災直後、コンパスで円を描いて20km圏内を封鎖したじゃないですか。うちはその圏内だったからバリケードができて、自分の家に入れなくなっちゃったんです。その後、風向きとかいろいろ条件で、円が曲がったりで、うちの地域は入れるようになったんですけど、その線引きのぎりぎりのところだったから、保証金絡みで大変でした。境目のちょっとした内外で、保証金をもらえる、もらえないで、同じ地域でもめたりしたんです。

両親は帰村宣言と同時に帰ってきました。うちは先祖代々の村人ってわけじゃなくて、ただ川内が好きで越してきたんです。それでうちの親がその良さをお客さんに伝えて、中には川内の魅力を知って、毎年、川内を訪ねてくれる人もいます。私も陶芸をやったり絵を描いたりしてるんですが、何か足りないことがあってもネットがあればどうにかなる。だから、ここを出て行く必要もないし、むしろ、こんないい場所を残しておきたいなって思います。

**天山文庫の話に限らず、震災で失われたものはたくさんあるんですが、反対に、得ることができたもの、魅力が増したかなって思うことってありますか？**

**志賀** 震災復興でたくさんの方が入ってきてますけど、村の人じゃないから、田んぼや緑がきれいだって言うし、川内の方が食べ飽きてるようなものでも、すごく喜んでくれるんですね。生まれ育ったところには飽きちゃうのか、私の周り地元を出たい、都会に行きたい、そう言ってる人がほとんどです。でも、私たち自身が気づいてない、小さな村の魅力はあります。それを村外の方が発見してくれて、私たちが村の人間として外に発信するっていう。それが得たものと言えるかもしれないですね。失ったと言うのがふさわしい表現かは何とも言えないですが、やっぱり震災の後、口をつぐむ、つぐまなきゃってことが多くなった気がします。前、何かにか書いたこともあるんですけど、大学の授業で先生が、「原発はなくならないと思う人は手を挙げて」「原発をなくすべきだと言う人は」って。

授業は政治的なことじゃなくて、ただ、なくせるか、なくせないかの討論材料だったんですけど、私たち当事者にしてみたら、何かにさらされてる感じがしてイヤでした。私の隣にいた友人は「なくならない」に挙手したんだけど、その瞬間に壁ができちゃいました。それからは壁をつくるのがイヤで、自分はその話題には触れないようになりました。震災がなければ、考え方で人を選別したり、人間関係を壊さないためにしゃべらない、そんなことはなかったはずですよ。

**あの授業の時、福島大だから双葉郡内の人もけっこういたんです。意見がある人はどうぞって言われても、私と同じ高校から来た人とか、双葉郡内、相双の人も黙ったままで。やっぱり、みんな触れたくない話だったんだと思います。それからは似たようなことがあった時、口をつぐんで論争にならないよう気をつけるようになってますね。**

ひと頃、帰る、帰らないで、村が分断されたような印象がありましたが、最近は帰還した人も多くなり、そうじゃなくても、通ってる人もいるし、新しく移住してきた人もいます。いま何が必要ですか。

**志賀** 帰る帰らない、通うけど生活拠点は別、家を建てるなんていうのは、本人の「怖い」の差で、私はそんなに気にならないんですけど、気にする人はすごく気になっちゃうのは当然で。その怖さの感覚を他人は知りようがないですが、帰ろうかって迷ってる人のために、川内を帰りやすい環境にしておくことが大切で、帰ってきた人がやるべき仕事だと思います。

その点、**ここはもとから不便だし、スーパーがないとか、再開しないから病院がどうのっていうのはそんなに震災とは関係ないんです。**病院は絶対に必要だけど、買い物だっでできないわけじゃない。川内に帰ってくる人は、便利になったからって帰るんじゃない、川内の田舎っぽさが好き、ふるさと感がいいっていう人だと思うんです。ここに駅ができて大型スーパーができたから、じゃあ川内に帰ろうかっていう話ではない。それよりは、いかにして今までの川内っぽさを取り戻すのか、帰ろうかって思ってもらえるかなんです。

田舎が嫌いな人はきっかけさえあれば都会に出ちゃって、それを止めることなんてできません。川内がいくら頑張っても郡山にはなれっこない。それだったら川内らしさを保ち、つないでいくことができれば、戻りたい人は川内に帰って来るんだと思います。

ただ、不便なのは、やっぱり放射能ですね。これは食べられる食べられない、そこは行ける行けないって、常に放射線量が生活について回る。これが常に脳裏にあるってめちゃくちゃ不便ですね。交通機関とかは、富岡駅もできてるし高速も通ってるから、川内は機能的にはほとんど戻ってるんじゃないかな。

**ここで生活すると、家電なんかを買うとなれば郡山ですか？**

**志賀** そうですね。生活用品は富岡とか船引とかの近場ですけど、私が生まれた頃から、みなさん週末は郡山に行く習慣みだだったんで、それはずっと変わってないです。

放射線量を気にするっていうことは、裏を返せば、自然の恵みの中で生きてるってことですよね。僕はいわき育ちなんで、食品はスーパーで買うものばかりだけど、自分の家で野菜をつくったり、山でタケノコ採ったり、自然の豊かさで共生してきた部分が川内は大きいわけですよ。

**志賀** 川内には大きなスーパーもないから、山から採ってくる、畑でつくる、水も井戸水で、自然から出てきたもので成り立ってきたから、イヤでも放射線量を気にしなきゃならない。自分たちが食べるものはひと通り計ってます。まだ数値の高いものは、私たちは食べませんが、お年寄りはどうせ死ぬんだからって平気で食べてますね。ただ、**おばあちゃんなんか間違えて、私たちの前に出して、それに気がついた時に、「ごめん、これは食べられないんだよね」**って謝られるのがイヤです。そんなふうに使わせたくないんです。



**福島第一原発ではまだ廃炉作業が続いています。そして、それをあまり意識しなくなってるということもあります。望む望まざるにかかわらず、共存はしていかざるを得ない。何か思うことはありますか？**

**志賀** 起きちゃったことに対しての後処理としては、**すごく頑張ってくれてると思うんですけど、色々な問題が先延ばしにされているように感じます。**人間の記憶って風化するじゃないですか。このまま風化して消える頃まで延ばされちゃうんじゃないかって気がして。私はたぶんこのへんで一生暮らしていくんだろうし、私の代で終わるはずもないことなんでしょうけど、もう原発はやめようって気持ちもだんだん薄れていくのかもしれない。仕方ないなって暮らしていくんだろうなって思います。

**福島第1原発をニュースで見るともあれだと思います。ふだんから何か不安に感じることはありますか？**

**志賀** もうここで暮らしてますから、不安は薄いほうなんだと思います。ただ、今まで情報が隠されていたり、ごまかされていたりしたことがあったんで、まだ何か知らされてないことが、っていう思いはあります。放射線は目に見えないんで、何かあっても隠されたりするとどうにもならないから。見えない不安というのはありますね。

**去年の第二回福島第一廃炉国際フォーラムでは、私たちが廃炉について「何が分からないかが分からない」状態にあるからそれをどうすべきか、というテーマがありました。**

**志賀** それはもちろんあります。**原発、放射能って何ですかって聞かれても、私は答えられません。私たちは今まで、原発で潤って暮らしていたし、原発は安全だし、便利なんですって刷り込まれてきたんです。原子力安全の日書道コンクールなんかがあって、原発すてきね、みたいなものを書かされて。あと、**

**費用が出て、子どもたちを旅行に連れて行くんです。とにかく小さいころから、いいものだ、安全だからを刷り込まれてるから、事故が起きてから考えても、そもそも原発って何だったのかまるでわからない。専門書はあっても、私みたいなふつうの人は難しく読む気にもならないし、じゃあ、わかりやすい本と思っても、そんなのはありません。結局、「原発ケシカラン」と、そう言うだけなんです。でも、今の子どもたちには、ちゃんと教えてほしいですね。近くにあるけど何だか知らないじゃなくて、わかりやすい教育が必要です。**

**東電が「はいろみち」っていう月1で出してる小冊子があって廃炉はこんなですよっていうのが書いてあるんですけど、見たことありますか？**  
**ほかに住民が廃炉について勉強する場もあるけど、行ったことありますか？**

**志賀** ないです。私はごくふつうに暮らしてるだけなので、冊子を渡されれば目は通しますが、自分からもらいに行ったり、勉強会に参加しますっていうのでもないんです。だから、これだけ原発の近くにいるのに、情報は東京や大阪の人が見聞きするのと同じです。

**なるほど。じゃあ、廃炉と暮らす中で見えてきている希望って、何かありますか？**

**志賀** 廃炉とは直接関係ないですけど、さっき話したように、**外の人があることで、今まで気づけなかった村の魅力が再発見されるんです。やっぱり新しい人や考えの入ってくる必要なんです。それが震災の中で見つけた唯一の希望ですね。**  
**あとは今、川内は子どもが増えている。川内の安全さ、安心して過ごしやすい暮らしができる環境を身をもって体験して発信している人がいるからこそ、そうなっていると思います。子どもが多いのは希望ですね。**

**そうですね。ただ、高校からは村の外に出なければ学校に通えない状況があるというのは、大変ですね。志賀さんは大学は福島大ということでしたが、何を学んでいましたか？**

**志賀** 美術科でした。美術をやりたい人は普通は美大へ行くんですけど、福島大の美術科は県内で美大みたいな勉強をしたいっていう人の受け皿でもありますね。美術の先生になりたいって人もいますけど、美術の先生の門がすごく狭くて、本気で美術の先生になりたいって人は、他の県の美術科とか教育学科に行くと、そのままその県に残るんです。

**小さいころから、親御さんがアーティストとして生計を立ててこられたわけですよね。**

**志賀** それもやっぱり川内だからだと思います。うちのお客さんの半分は近くの人ですけど、あと半分は東京の人です。その東京の人たちが、景色がいいとか自然が気に入ったとかで、毎年、夏の長期休暇にうちに来てくれるんです。それで製品を買ってくれるので、わが家の生計が成り立ちます。川内のザ・田舎っていう雰囲気じゃなかったら、陶芸じゃ難しかったかもしれないですね。うちは素人の家庭菜園程度しかできないから、農業もダメだし。



## インタビュー 04



そうですか。そういう交流がある一方、川内村の内部での若者同士の交流はなかなか難しそうですね。

**志賀** それは痛感します。同級生は郡山か東京なんで、週末とか月1とかで出かけて行かないと会えない。こっちに来てって言っても、こっちじゃ遊ぶところも飲むところもないから、やっぱり私が出て行かないと。近くに友達や若者がいないのは大変なんです。

同級生って何人くらいいるんですか？

**志賀** 小中の同級生は20人、それでも多いほうです。小3までは3校あったんですけど、小4になる時に川内小1校になっちゃいました。それで合計20人になりました。学校が遠くて大変だからって3校あったようなんですけど、スクールバスを入れて1校にまとめて。20人のうち、ここに残ってるのは保育所にいる1人だけです。

他の同級生はどこに行っちゃったんですか？

**志賀** 東京と郡山で半々くらいですね。川内は、田舎だから同世代同士でつながっているって思うかもしれませんが、そんなわけでもないんです。学校が一緒じゃないと顔も知らないんです。それも川内の課題のひとつですね。

そうなんです。

**志賀** こういったインタビューを受けるのも、私ばかりになって申し訳ないんですけど、村の若者ってなると少なすぎて、とりあえず私に来るんです。ちょっと若者の幅を広げれば、移住者の方とかも若者に入るんだけど、40歳前後になってしまうので。だいぶ年齢ギャップが出ちゃうかな。

でも、今まで川内村や相双地域で若者同士でつながりましょう、みたいなことってなかったじゃないですか。震災で人が減ったからなんとかしよう、っていう人たちが出てきて、初めて相双のつながりが見えてきたんです。そうじゃなかったら相双の若者と知り合う必要も感じてなかったの、交流のきっかけがなかったらありませんでした。

他に天山文庫をやることでできた新たな人とのつながり、お客さんとか支えてくれる人、そんな人は？

**志賀** それはいます。さっき、天山文庫は何もしてこなかったって言いましたが、みんなと連絡を取ったり、呼びかけをしてこなかったんですね。でも草野心平ファンはけっこう全国にいます。私が天山文庫から来たって言うと、「心平のファンだったんです」とか「何か力になりたいです」とか言ってくれるんです。私がやってる天山文庫のツイッターを見て取材に来てくれるライターもいて、騒いだ効果はあったみたいですね。それは川内の人もそうで、見向きもしてくれなかったおじいちゃんも、最近、天山文庫がやかましいから手伝ってやるかとか言いながら、かかわってきてくれるんです。

いまも毎年、有名な詩人がやってくるイベントがあるんですよね？

**志賀** 天山祭りは毎年。「歷程」という何十年も続いている詩の同人雑誌があって、そのメンバーで心平さんと交流があった方たちが毎年来るんです。

天山祭りは、高齢化で来られなくなった方も多くて、若者を入れるにはどうしたらいいかを考えています。若い詩人やアーティストを呼べたらいいなと。

そういう文化は大事ですね。一方、仕事ってどうなんでしょう。

**志賀** 川内にはけっこう仕事があるんです。工場もたくさんあって、人手不足なんです。だから引っ越して来ちゃっても、職種は限られるけど働き口には困らないんです。

あと、民泊をやりたいとか、カフェをやりたいって人にはすごく向いてる場所だと思います。他でそういうことを始めようとしたら、全部、自力でやらなきゃならないんですけど、ここならクラウドファンディングとか資金面でも、労力の面でも協力してくれる人もいます。実際に、浪江町のあおた荘がそうで、みんなが手伝って、協力したんです。

**田舎の若者は、田舎ってかっこ悪いって思うんですけど、都会の人が、田舎に移り住む動きもある。自分のアトリエを持ちたいから田舎に引っ越してみたいな。そういう人に注目されればいいなとも思います。アトリエが増えたり、よその人が来るようになれば、田舎はダサイなんて思ってた地元の私の同級生も帰って来るかもしれないですね。田舎で、どうやって田舎っぽくない生活をするかが今の課題です。**



## インタビュー 05



### 下枝 浩徳さん

福島第一原発が立地する双葉郡には8つの町村がある。その中でも最も小さい自治体が葛尾村だ。ただでさえ人口流出と地域コミュニティの崩壊が進む中、全村避難を経験したことは村の今後に大きな影響を与えたに違いない。帰還した人の数は元の住民の数に比べれば少ないが、その中でもできることをやろうと様々な活動が生まれている。そんな葛尾村の現状について地域づくりを担う一般社団法人葛力創造舎の下枝さんに聞いた。

いま、どんなご活動をしているんですか？

**下枝** これからお話する話は、多様な状況、立場、それぞれの思いがあるということをお話する前に、あくまで私個人が感じていることです。また、他の方の考えを否定したいわけでもないのその点を理解していただきお話を聞いていただきたいです。

まずは、簡単に自分の経歴についてお話しします。

私は福島第一原発から25キロメートル圏相当の位置にある葛尾村で生まれました。村の人口は、大体震災前は1,500人あまりでしたが、現在戻ってきた住民の数は200人ほどです。

葛尾村で中学校まで暮らして、原町高校に行く時に村を出ました。原町高校は実家から遠かったの、原町で下宿しながら高校に通う必要があったんです。高校卒業後は、埼玉の東京電機大学に進学をしました。大学では土木の勉強をしていたんですけど、何の因果か私がしていた研究のテーマは地震でした。大学院を修了して、水資源の開発に関する仕事につきました。ただ、そこで本当にこの仕事でいいのかと疑問を抱いていた頃に、自分が生まれ育った村のことが気になり、葛尾村へ戻ろうと返って来て。ちょうどその頃に地震が起きてしまったんです。辞表を出した日がまさに地震が起きた日だったというもので、何か運命的なものを感じました。

じゃあ、ちょうど7年と少し前までは村から出ていたと。

**下枝** そうなんです。葛尾に戻ろうと動いたのは2011年の4月17日でした。まあ、実際には葛尾村には戻れなかったの、村の近くの本宮市という所で運送屋さんとして働き始めて、そこから色々なNPOの理事をやったり、団体や協議会の会長をやったり。そして、本当に葛尾村の地域作りをやるぞ、と、自分の団体を作ったのが一般社団法人葛力創造舎です。

やろうとしていることは、基本的に、地域の持続にコミットしたいということ。

持続とは何だろうという話になったときに、色々な視点があります。経済的にお金が続いていくとか、社会インフラがちゃんとあるとか。団体としてどこにコミットしようかと思ったときに、私は村の文化の継承だ、と考えました。

文化の継承とは何だろう、文化とは何だろうと考えたときに、

文化とは生活そのものだという考えにたどり着いて。次世代にどのようにして伝統文化をつなげていくか、そのために生活が続いていくということは生業があるということだのと、生業作りをやろうとしています。それは、どこから大きな工場を持ってきてというのではなく、今までやってた暮らしの生業を引き継ぐということ。これまでの暮らしや生業を捨てるか続けるかちゃんと考えながら、次の世代につないでいくことが文化の継承だと思っています。今は、それを支えるためのサポーター作りを一生懸命やっている段階です。

東京から福島への移住を考える人のサポートもしているんですか？

**下枝** はい。東京から福島へ人を連れてきたりしています。結局、葛尾村で暮らす人は二百人あまりしかいない。その大部分がお年寄りだと、そもそも社会として成り立ちません。その中で、他の地域とリソースをシェアしていく、その関係づくりを続けています。

とはいえ、色々形になってきたのは最近のことです。2012年の最初の頃は、やっぱり団体を作った方がいいものの、何をやっていいのかわかりませんでした。はじめは、ツアー作りや都市農村交流からやり始めて。当時は葛尾村で活動できなかったの、基本的に郡山で手植えのツアーをやっていました。

なるほど。

**下枝** 葛尾村で活動する基盤となるネットワーク作りをやっていました。

郡山での活動では、視察やグリーンツーリズムのツアーを受け入れていました。活動を行うにあたり、ある程度お金の成果を出さなきゃいけないので、ツアーでは40~50人を受け入れるわけです。ツアー参加者のために、避難中のお母ちゃんたちにご飯を作ってもらったり、ツアーの内容も試行錯誤しながら活動していました。

ただ、そのとき、協力してくれた葛尾村のあるお母さんから、「もうやりたくない」と言われてしまったんです。40~50人のツアー客を受け入れたところで、さほどお金はもうからない



# インタビュー 05

し、ゆっくり話をするのも難しい、交流にならない。「何もいいことがないからやめたい」と。

私もなるほどと思ったんです。被災地のために外から色々な応援をするために来ている人たちが、実は被災地の人を苦しめている。地域の人も外から来る人もお互いを楽しめる、それが地域の発展につながる。そんなコンセプトがないかなと色々探してたどり着いたのが、「結」の話だったんです。

改めて、結とは何かを教えてください。

**下枝** 葛尾村は山奥にある農村地域で、昔の文化が今でも色濃く残っています。色々な村の人に話を聞くと結がすごく特徴的でした。

結は、お互いに支え合って共同で色々なことを進める精神のことですが、具体的に言うと、うちの団体で今一生懸命やっているのが、今の70～80代のおじいちゃんおばあちゃんが子どもだった頃のやり方で田植えををして米作りをする。人を集めて、一斉に作業をして、一緒にご飯を食べる。その中で文化を繋いでいく。そして、昔ながらの生活を通して村の人と外の人がつながっていく。

米作り以外にも日本酒やせんべい、甘酒などでも作っている？

**下枝** そうですね。

人が生きていくために生業を作る。そのために人のつながりを作る。葛尾村には人のネットワークがないので、それを根付かせる必要がある。その一環が、例えば、田植えで作ったお米であり、お酒だったり甘酒だったり、おせんべいだったりします。一度きりで終わらせず生業としてちゃんと成り立たせるために結的なネットワークを作る。葛尾村に何かしらで関係してくれた人や、葛尾を家族とか実家のように思ってくれるような人をたくさん増やそうと今動いています。

避難指示が解除されてから、一気にその構想が具体的な身を感じているようにも見えますが、ご自身の実感は？

**下枝さん** さっきもいいましたが、最初は何をやるかも明確ではなかった。団体として定款を作ったのが2012年のことで、その翌年2013年に団体の登記をしました。実はこの7年間の内5年近くはほとんど収入もありません。ひたすら福島の外から手伝ってくれる人、サポーターを探していたんです。サポーター作りがひと段落して、成果が出てきた感じはします。一方、いま思うのは、住民の強さ弱さと行政の強さ弱さがかみ合っていないということです。やっぱり行政は公平であろうとするのが背景にある。

新しいことを立ち上げる姿勢が行政にも求められているが、それを行政がやっていること自体に無理があるんです。むしろ、行政ではなく住民の方が何か始めることを率先してやらないといけない。サッカーで例えると、行政はスタジアムをどれだけしっかり整備して、使いやすいようにできるかを担っています。本来、住民はそのスタジアムの中で選手となって、どれだけ良いゲームができるかを考えて実行するのがあるべき姿はずだけど、住民が観客になってしまっている。そして、他所の外国人選手がゲームをしているのが現状です。これでは、住民側としても行政側としても、あまり自分たちの強みを出しづらくないかなと。



住民の中にどれだけ主体性を持っている人がいるかと言ったら、おそらく極一握りです。その極わずかの住民にすごく負担がかかっています。

でも、住民も何も考えていないわけでもないと思っています。丁寧にサポートをしていけば、住民の考えを引き出せる。

ただ、そのためには、少なくとも2～3年、下手をしたら5年ぐらいサポートをし続けないと、住民が本当にしたいことをポロっと言わない。

このサポートは、先ほど話したように、行政では行うのが難しい。行政の予算は長くても3年、下手をすれば1年とか半年で終わってしまいます。その中で、住民のやる気を行政が引き出すところまで持って行くのは難しいと思うんです。

うちの団体で学生さんとか地元の若い人に、地域コーディネーターとして研修をしています。最初に、彼らに「夢は何ですか?」、「何かやりたいことがある?」と尋ねます。でも、彼らは「別に」、「強いて言えば公務員です」という返答ばかり。東京でも同じだと思いますが、「なんで大学に入ったの?」と尋ねると、「親に言われたから」、「取りあえず来た」と言う。ただ、そんな若い子たちに、人と話すスキルや考え方をしっかり教え込んでいくと、彼らが勝手に夢を語り出すんです。うちもそこまで学生を持ってくるのに2年ぐらしかかりました。研修の助成金も30万とか50万ぐらしかかりました。2年間やったら、私がいなくてもちゃんと自分たちで研修を行い始めました。後から入ってきた子の面倒もちゃんと見ます。うちの団体で今やっている甘酒やツアーという小さい取り組みも、彼らがやり始めているんです。

だから、多分地元の人にもやりたいことはあると思うんです。地元の人声はすごく小さな声かもしれませんが、やったことのないことにチャレンジするのを恐れる気持ちもあるでしょう。

地元の人声を引き出せるのは行政ではなく民間です。お金の話をするならば、本当は民間じゃ無理なんです。だってお金を出せば出すほど、返ってくる見返りが少ないから。でも、住民側で動きを作れるようになることが大事なのかなと思ってやっています。

**学生なり若い社会人がそうやってやりたいことを口に始めると、今度はじいちゃんばあちゃんがそれに乗り始めて、やりたいんだったらこれをあげるとか、これを使えとか言って、手助けをしてくれます。**

**そういう循環を作るのは大変だし、時間もかかりますが、5年10年と腹を据えてやっていくべきなんだろうと思っています。その土台がなくては、いくらイノベーション構想だとか廃炉の円滑な進捗だとか言っても上手くいきません。たとえ種を植えても、芽は出ないし育たない。もし芽が出て、手厚く支えた双葉郡の中心部の一部だけでしょう。だからこそ葛尾でやる楽しみがあるんです。双葉8町村でもかなりマイナーな所だからこそ、やる意味はあるかなと思っています。**

村を出て行った人たちが戻ってくるかという話でいうと、どうとらえています?

なぜこう聞かかという、海に接している自治体は実際のところ廃炉産業があります。原発の中だけで5,000人規模の人が毎日働いているし、その波及効果を考えたら数万人規模になるでしょう。研究施設、関連工場などもできてくる。でも、葛尾はおそらくその効果は地理的に及びにくい。

**下枝** 震災から3～4年のとき、戻るかどうか、行政の判断を待たずに多くの人の腹の中ではもう決まっていたと思います。というのもその時期は、メンタル面での病気になるか、体を壊したという人が多い時期でした。同じ復興支援関係の仕事で集まってきた人たちも、みんな仕事を辞めるなり元の生活に戻ったりと、判断をしていきました。そのときが戻るか戻れないかのポイントだったんだと思うんです。その後から現在に至るまで、それぞれの決断は大きくは変わらないでしょう。

今いる人たちは、その中でも村に戻ると言ったじいちゃんばあちゃんです。でも、一応若い人たちもいるんです。4月6日が幼稚園や小学校、中学校の入学式だったんですけども、全部合わせて子どもは現在24人います。仮に1人に親が2人いるとしたら、大人世代は40人ぐらいです。葛尾村は205人なので、子どもを含めると4分の1は若手世代が支えています。

戻るか戻らないかというのは本人の問題です。でも、戻る戻らないの問題ではなく、どうコミュニティーを作るか、地域のあり方を描くかが大切になってくるんだろうなと思っています。

違う地域に住んでいるからコミットは弱いけれども、それでもつながっている人たちはいます。このつながりがある人たちまでを、住民として捉えるという考え方をすると、戻ってきた戻ってこないという議論は、若干違うのかなと。おそらく双葉郡にある感覚もしくは東北の被災地にある住民の感覚として、今言ったようなネットワーク的な自治体のあり方を探っているんです。

村の歴史を調べれば、集落がゼロになった時代も実はあるんです。あと、200人の集落って他にも青ヶ島とか、福島の近場だと、新潟に250人ぐらいの西栗島浦という島とかがあって、買い物、交通、医療とかの条件は、西栗島浦は葛尾よりも悪いんです。葛尾は24時間陸路があるのに、西栗島浦は1日にフェリーが1本の時もあります。でも、それらの自治体では、二百何人でもやっていけてないことはない。

基本的には人口の規模というよりは、若手世代をどう増やすかが大切です。そういう意味で言うと、仕事をどう作るかというのが1つ。

もう一つは、オープンになって人をたくさん呼んだところで、葛尾村にはそれをさばけるスキルとキャパがないんです。だから、1点集中でやるしかありません。例えば、九州にある大きな生協団体さんが、大体40万人の会員を抱えていて、そこを提携をして葛尾村の商品を開発して、販売しようとしています。それが実現すると、200人を支えてくれる40万人のコミュニティーできる。相手が決まっているので、広くPRする必要もありません。無駄にPRしても村の中に宿泊施設はなく、人を迎えるホスピタリティーも未成熟なので、そこは段階を追っていければと。

なるほど、よくわかりました。そんな中、福島第一原発の廃炉が続いていきます。

お役所は廃炉の話を、住民との対話だ、車座だといきなり言う。でも、今みたいなその地域に住む人の生活に根ざした課題から話を聞く気があるかというそうではない。「何が不安ですか」「トリチウムについてどうですか」、まあ言いたいことを尋ねてくるわけです。

それを地域のおじいちゃんおばあちゃんが考えているのか、っていう。もちろん、勉強会とかにわざわざ来る人は多少考えているかもしれないですが、おそらく、震災後の時間の中でごく一部の人が考えていないことでしょう。それは当然のことだし、考えていない人たちに、「不安はないですか」と尋ね、「そう言われれば」、みたいなところも無くはない。去年は無理にその点を引き出したところもありました。

ただ、そこにある生活の話をしなくて、上からイノベーション・コースト構想とか、復興政策とか、廃炉産業とか言っても仕方がないだろうという声もある。それはそうだと思います。そんな中で、いまおっしゃって頂いたような地域の生活を見た上で、廃炉と向き合う生活が続くことの問題をどう捉えていますか。

**下枝** 私は廃炉の不安はないんです。

ただ、経産省や東電の人と話したときもやっぱり入り口は「廃炉をどう思いますか?」なんです。

まず、その入り口は地域住民側からすると違っているんです。住民側としては廃炉が第1じゃないんです。どう生きるかなんです。どう生きるかということの前提として、確かに安全の確保があります。安全を確保するためには、廃炉について考えなければならぬという話も分かります。でも、その前にどう飯を食うかが大事なんです。

その場では他にどんなことを感じましたか?

**下枝** 廃炉にはあと30年かかると言いますが、そもそも30年過ぎる前に、多分町がなくなるんじゃないかという危機感のほう大きいはずなんです。その中で、いくら廃炉と言われても、それは俺たちは今は考えられないというのが、特に町を作っていく工商業者さんには大きいのかなと。俺たちは社員を食わせるのが大事だし、地域のつながりを作るのが大事だと、住民側は考えます。廃炉に関しては、あなたたち行政や東電が事故を起こしてある意味損害を与えたんだから、あなたたちが解決するのが筋だと。

もう1つ、東電の方はいかに信頼してもらおうかという入り口から来るんだけど、正直それももう遅い。信頼を取り戻したいという入り方を東電側はおそらく5～6年前からしているんです。「何か困ったことはありませんか付き合いますよ」という東電側の申し出に、住民は助けを求めたはずなんです。

でも、それに対して応えられなかったところがあるから信頼されていないんです。それは住民のオーダーが違っているのか、はたまた東電側が大きすぎる組織だから細やかな要求に応えられないのか。本当の現場の担当者はその瞬間は一生懸命なんだけれども、何度も来られる住民側からすると「5年前も同じことを言っていたよね」、「言ったのになんでまた聞くの」、「本当に解決してくれる?」と。住民側は何としても自分たちの要求を持って帰って改善につなげてほしいというふう思うでしょう。となると、やっぱり東電と住民の会話の前提がそもそもかみ合いません。だから、やればやるほどお互いに冷めていく。



## インタビュー 05

車座とかワークショップもいいですが、誰がやりたいワークショップなのかってことです。「住民側のためだと言いつつも、実は経産省や東電がやりたいんでしょ」と、だったら素直にそう言ってくれたら、私たち住民もそれに対して協力できる場所を探しますよという話なんです。そこがあちこちかみ合っていないのを感じました。かみ合わせがひどくなると、それで悪い感情を抱くことになる。だから、誰のための復興なのか廃炉なのかを明示する必要があります。「誰」をちゃんと立てないと、全て上手くいかない。

頑張っってパンフレットとかを使っても、実際には一般の人は読まないという話が現実でもある。

**下枝** そういところを乗り越えて、東電と地元をくっけると活動する人もいますが、でも、どうなのでしょう。住民のほうはそこまで廃炉とかに関して気にしていないんです。そんなことを言っている場合じゃないというのが限り、住民と東電はかみ合いません。ひと言で言うと、住民の方は廃炉に興味がないんです。

廃炉をやるところの how の話しをしようとするけど、その前段階の what と why をしっかり深めるか、地元の実力者、キーマンの人を囲い込んで動かすか。

やっていることが中途半端で、どっちも現実的にはできないんじゃないでしょうか。

本当に仰る通りですね。例えば、私たちの身の回りのゴミは、誰かがゴミ収集してくれているから片付けられている。これは何も問題なければ誰もあえて意識しないことです。でも、ゴミを分別すると量を減らすべきだと言った時に、なんで今、住民がゴミの処理の仕方を理解しなくちゃ駄目なのか、例えば、「分別作業をしないと地球環境に悪いんです。量が増えると私たちは困らないかもしれないけれども自分たちの子孫に有害だ」という話まで丁寧をやったら、倫理的にそうかなと思う人も一部に出るかもしれませんが。一方、そんなの自分には関係ないと思う人も確実に出てくる。そういった多様な反応を受け止め丁寧で解決していくプロセスが詰め切られていないわけですよね。

**下枝** そうです。除染や廃炉で出るゴミも、増えていく中で誰かが住む地域に置かなければならない状況が出てきている。同じ地域にいる以上は運命共同体なのでちゃんと対話をしなきゃいけない。でも福島は住民でそこまで考えている人は多分少ないんです。ゴミ収集も、そもそもそれは税金でやっているんだから、あなたたち役所が考えなきゃいけないんだと住民は言うかもしれない。でも問題の本質は政治家が良い悪いということではなくて、その政治家を選んだあなたたち住民がいて、その下に役所がいるという大前提がある。これを住民も忘れてます。その点、住民側は主体性がなさ過ぎると思っています。

それは廃炉に限った問題ではないですよ。団体として行政を倒すのではなく、自分たちで地域の資源から産業を作り、それでちゃんと飯を食えるという流れを自分たちで作ったときに、「俺たちはやったんだから、行政はちょっと手伝え、制度つくってよ」と自信になる。それを葛尾村でできたらいいなと思っています。今の日本では、それがメディアや色々なものに壊されちゃっているから難しいんです。それはそれで仕方ありません。

あえてその上で聞きますが、葛尾村の住民としてではなくて、自分自身が東電なり、経産省、資源エネルギー庁なりの立場から廃炉をどうにか進めなくちゃ駄目となったら、下枝さんだったら何から手をつけます？

**下枝** 多分、まずは住民を味方に付けます。

それはでも、東電は延べ何十万人単位で社員による復興支援活動をやったり、外でも小規模の車座とかやったりしていますが、信頼回復なり住民合意という点では、一定の効果はあったが、それ以上は頭打ちになっているというのが現状なんだろう。どうしますか？

**下枝** 形だけじゃなくて、ある程度実行を伴う対話をいかにつくるかということだと思います。これはある程度権限がないとできないから、偉くならないといけませんが。

あと、行政が対話の場に入ると、全部行政がやっていくように感じられるというのはあります。むしろ行政が有能すぎて、ある意味、子どもの面倒を見すぎて子どもをニートにしちゃうお母さんみたいな感じだと思うんです。行政がいかに適度に住民をサポートできるかというのが理想なんだろうね。

どうやって住民が主体性を取り戻していくか。住民のグループを作って、そこにお金を預けるというのが、案の1つです。国連ハビタットという組織があって、その組織のやり方をうちでは手本にしています。ハビタットは震災復興の中で家を建てたり、住宅を整備したりする部署なんです。大枠だけ決めて、具体的なやり方は住民に任せちゃうんです。「自分たちで住みやすい町を考えてください」、「家の形を考えてください」と言って必要なお金を預けます。ただ、住民では専門的なことは分からないので、必要に応じて専門家を派遣する。「結」も、それに近いものがあります。自分たちで作りたいものを決めて自分たちで作ってみる。つまり行政がある意味住民を手放すというか、住民に選択ぐらいしろと言えるようになったら面白いかもしれないです。行政もそれをしたがっているような気がします。でも、まだ住民は頼りないから、お金や仕事を預けられないなという本音もあるんでしょう。

まさにそうで、住民がある種、プロ以上に制度・政策や科学的なものを読み解く能力を持っていて、自己決定できるということまで行きたい、行政もそうなってほしいと思っている、という感覚はおそらくある。ただ、本気で任せられる状況にするためには相応の能力が住民側につかなければならない。そして、特に廃炉の話になるとそこがハードルが高くなっているからそうはいかない。

**下枝** そうですね。まずは小さい受け皿でいいから、住民が集まる場を作る。住民にファシリテーターなりマネジメントなりコミュニケーションなりのスキルを付けてもらって、その受け皿をいかに大きくしていくかと考える。自分が行政の立場にいたら、そういう形を目指すでしょう。

## インタビュー 06



### 谷 咲月 さん

原発事故直後、避難指示がかり人が住まなくなった地域を牛や豚など家畜として飼われていた動物が歩き回る姿があった。そういった動物を保護・飼育する活動はいまも続いている。大熊町の帰還困難区域で「もーもープロジェクト」を進める谷咲月さんは、県外から移住し、楢葉町に暮らす。牛の世話と一言で言っても、エサの調達、運搬、放牧地の拡大、元々農地として使われていたところにある残置物の活動など、やることは幅広い。週末を中心に県内外から集まる多くのボランティアがその活動を支えている。大熊町の活動拠点で話を聞いた。

いつからこの活動をはじめたんですか？

**谷** もーもープロジェクトという名前を決めたのは最近ですが、思い立ったのは震災直後です。当時、福島第一原発の事故で牛や馬が行き場を失くしていると、テレビのニュースで知りました。何も力になれないかもしれないけど、助けるための有益な情報がないか調べて、自分でまとめたんです。

そうしたら農家の方から声をかけられました。他にどこにも頼るところがないから助けてほしい、まず現場に来てほしい、と。それで行かざるを得なくなったというか。

遠方にも分かるような情報をまとめていたんですか？

**谷** そうです。誰でもできるような程度ですが。南相馬の方で、馬がばたばた餓死しているとニュースで見えてしまって、農家が何とか助けようとしている状態でした。

ただ、馬は救出されましたがポニーやヤギ、ダチョウとか他の家畜はそのまま。実際に町を歩いて思ったんですが、確かに廃炉の邪魔になりますし、勝手に民家に残っている食材を物を食べちゃうトラブルもありました。

避難がさせられないんだしたら、この町の中で何とか管理ができないものかと思ったんです。

最初に来たのはいつぐらい？

**谷** 3月、4月あたりでしょうか。農家の方に連れられてあちこち行ったんです。

その人はもともと知り合いだったわけではないですよね？

**谷** 知り合いではなく、私がやっていたブログを通じてつながりました。当時、だいたいの農家の方は携帯を持っていなかったんです。その中で携帯を持っている若い人がいて、ブログを見てメールをくれました。

そこからもーもープロジェクトが発足するまでは、どういうことをしていたんですか？

**谷** 私は農家でもなければ牛と関わったこともなかったのですが、何をしていいかも分からずサポートに徹していました。資金を

集めて送ったり、単管パイプを安く調達して柵を作るのを手伝ったり。

2012年に、農家の方たちと一緒に柵をあちこちに作りました。大熊町で最初に牧場を作ったのもその年です。

今からするとかなり早期ですね。

**谷** ただそこは壊されることになって。その次の牧場は3年間続いたんですが、県道35号線の開通にもなって立入り許可発行の要件が変わることになって。住民全員の同意が必要だと言われたのですが、一軒だけ同意を得られなかったんです。それで別の場所を探していたら、ここでしてほしいという要望を多くいただきました。

隣の田村市にあった牧場が撤去になったところ、声をかけてきたのがこの方々です。

牛を放って土地も回復していったと。

**谷** そうですね。ぜひやってくれという感じでした。

一から牧場を作り直して、電気はソーラーパネルを置いて。体力や資金面のことも考えると、一点を拠点に広げていく形が効率的でした。

ボランティアに手伝ってもらっているとはいえ、一人でここを作り上げてきたのはすごいですね。元々は、途上国の支援をされていたそうですね。

**谷** ほんの少しだけ。でも、大学の時から農業に関心はありました。

世界的に見ても日本の食料自給率と飼料自給率は低いです。一方で、耕作放棄地はどんどん増えている。トウモロコシや牧草の値段が上がらただけで牧場がつぶれたりして、バイオエタノールが普及してますますその悪循環になる。

だから、農家が楽になるようなエコな循環を生んで、牛もさらに幸せになれる仕組みができればいいなと思っています。

今牧場にいる牛は、大熊の酪農家の方から来ているんですね？

**谷** 大熊町で被災した1軒の和牛農家さんからです。ただ、放れ牛となってあちこちに放浪しているうちに生まれた子牛も含



## インタビュー 06

まれています。全て耳標番号で管理されていて、家畜保健所に登録されています。うちの牛もインターネットで10桁の番号を検索すると、全頭、警戒区域の牛と出たり、年齢が出てきますよ。白髪の生えている13歳の牛も月齢まで出ます。

**被災した牛はまだたくさんいます。本当はもっと飼いたいのでは？**

谷 面積に応じた適正頭数というのが設けられているので。依頼を多くいただいているので、敷地と一緒に牛を増やしていければと思います。

牛を荒れた農地に放っておいて、雑草を食べさせると、再び使える土地になります。

例えば競走馬はエリート中のエリートしかならず、96%が殺処分される世界です。騎手の武豊さんは、その競走馬になれなかった馬の第二の生き方を提案している。そういう話もある中で、馬も耕作放棄地や荒廃農地を再生させる役目としてご相談をいただきます。

牛の寿命は20年と言われていますが、20年後この土地がまた荒れるのかというと、そうではありません。土地を再生させる手段は無限にあるので、農家の方たちとともにやっていきたいです。

**ここに来なかった被災牛は、どういう所へ行っているんですか？**

谷 他の牧場にいます。富岡町や浪江町。やっぱりこの20キロメートル圏内からは出せなくて地域が集中しています。一番多いのは浪江町ですね。

浪江町は291頭と、26頭と40頭です。大熊町は29頭、富岡町は31頭です。

**合わせて400頭越え。それは誰の費用で、どういう人が面倒を見ているんですか？**

谷 面倒を見ているのは農家の方たちで、費用は私たち自身で工面しています。

農家は乳牛であれ和牛であれ、人の食になり人の命をつなぐことにプライドを持っているんです。和牛の繁殖や畜産の発展に力を注いできて、それを病気でもないのに全部殺処分することに納得できません。だから世話をしています。

放射能は宮崎の口蹄疫とは違うし、移るものではない。そうやって牛を伝染病扱いして殺すことで人への差別も助長するので、なんとかしてほしいですね。

**農家の方が世話をするのは分かる一方、谷さんが外からやってきてやることの意味や大変さを感じていると思いますが、どうですか。**

谷 ご高齢の農家さんたちとばかり話すんですが、まずはこの言葉を聞き取るところからですね。今は大丈夫ですけど初めは慣れなくて、「のまっちゃうぞ」とか独特の方言を勉強しながらやっていかなければいけない。そういった方言を勉強しながらやっていくんですけど、地元の自分たちではできないことをやってくれていると、よく言われます。

農家は一人ひとりが個人事業主だからお互いがライバルだったり、畜産組合やJAに分かれていたり、どうしても農家同士のしがらみがあるんです。乳牛と和牛、町ごとにもいろいろあって。この地域でもそうなんです、何か新しいことをやると噂が立ってしまう。特に避難されている方は仮設住宅で固まりがちで、ネットワークはみんな持っているので情報共有がで

きています。それはすごく良いところもあるし、悪いところもある。あまり表立っては活動できないということで、よそ者で農家でもない私がやってくれるのが助かると言われます。

私は表に出るのが嫌だからずっと裏でやってきたんですけども、表に出ざるを得なくなって、今出てきたんです。大熊町で活動しているというだけでパッシングされるし、表に出る人がなかなか他にいないんですよ。

**浪江町、富岡町に加えて大熊町で新しくやった経緯は？**

谷 大熊町は一番誰も手をつけようとしなかった場所で、一番困難だったので最後になりました。浪江町や富岡町は比較的入っていき、地元の人たちも動いていました。すごく過酷な状況で、生やさしくはなかったんですけど。でも大熊町に関しては、なんで大熊を助けるんだと浪江町の人たちに言われたのもあり、見捨てられなかったの。私は大熊町でということになりました。

**もーもープロジェクトを支えるボランティアの方々動き方を見ると、だいぶ手慣れた感じですね？**

谷 引越し前の牧場(山神)でやっている時からボランティアの方々頑張っていました、あそこは倉庫や設備が何もなかったんです。そこよりは、ここ(姥神)に来てからの方が、ボランティア専用のロッカーもできて仕組みが整ってきました。引越し作業は3年くらい前からずっと地道にやっています。2年前に牛を連れてここへ来て、開園式を去年やって一般の人も餌やりに入れるようにしました。だから牛たちにとって草を食べるのは今年で2年目なんです。

**一般の人が来たことで、大熊町でも安全に作業ができるんだということが伝わりました。ボランティアの中には一昨年、昨年からの人もいますけれど、今年からの人が増えてきているんです。**

**オープンから1年半が経ってどんな変化がありますか？**

谷 ここに牛を連れてきたのは2016年の9月と10月です。その前に以前の場所で3年間活動している中で、地元の方の集まりにお世話になりました。色々地道に手伝ってくれて。私はよそ者だから初めはいろいろ言われていたんですけど、誰が見ていなくても泥をかぶっていつも一生懸命作業をしているじゃん、と、裏で協力してくれました。見る人は見てくれているから良かったなと思います。

**震災時は東京にお住まいだったんですか？**

谷 東京に住んでいました。いまは、楢葉町から通っています。住むところとか働くところとか、地元の方が探してくれて、すごくお世話になりました。最初はいわきにいたんですが、渋滞で片道2時間半とか3時間とか平気でかかって、どうしようもなかったんです。

避難指示が解除される前から住んでいいと許可も出て。私はコンビニで働きながら生活費を稼いでいるんですけども、店舗は避難指示の解除前にオープンしていましたから。除染作業員と同じ扱いでそうになりました。

いろいろな縁でいろいろなお支援があって、すごく協力して下さりました。

**ここでの作業はほぼ毎日やることあるでしょうし、コンビニでも働くのは大変ですね。**

谷 時間や日数を結構調整していますので大丈夫です。

**その志の源は何ですか？5年先10年先を見据えてやっているのか、あるいは、例えば地元の人の方がもっと関わられる状態になるまでと決めているのか。復興関係の人で、ここまでが自分の仕事だと考えている方もいるかもしれない。廃炉でもそうだと思いますが、仕事がなくなることがゴールだ、みたいな。どちらのメンタリティーもあると思いますが、どうでしょうか。**

谷 一番いいのは、私がいなくなることです。ただ現実的に考えると厳しい状況ですね。

**そう見通しが立つものではないと。**

谷さん そうですね。そんなに簡単にはいかないだろうなと思っています。最終的な目標は、援助にしても何にしても、もう来なくていいぐらいの状態にすることです。この地域で、それがどこまで出来るのかはわかりません。

**何かしたくても何をしたいのか分からない、という想いを持つ人はいると思います。それをきちんと活かせるような仕組みを築くために、私にできることはしていきたいんです。**

**あとは、この場所は立入り制限が一番厳しいですから、それでも運営していける形を追求していくしかないと思います。そこで、困難な中だからこそ新しいものを生み出していきたいなど。今までの形とは違う、新しいものを他の社会でも役立てられるように発展させていきたいです。それが、いろいろな犠牲を無駄にしないことでもあるのかなと思って。**

**地元の人たちとの活動が多いと思いますが、孤独感はないですか？**

谷 私は結構孤独が好きなんですけれど、いろいろとご協力を頂いて、こんなに人と関わるとは思っていませんでした。はじめは大変なこと、どうしようもないこともいっぱいありました。けれども周りが認めてくれたり、なんでそこまでしてくれるのかというくらいサポートしてくださったりと、孤独だなんてとても言えません。得る感動は大きいなと思っています。

**福島第一原発の廃炉作業が同じ大熊町の中で続く中で、希望と課題はどのようなところにありますか。**

谷 40年後、無事に廃炉が終わり、なおかつこのエリアで何か他に得るものがあればいいなと思っています。単にマイナスをゼロにするのではなく、プラスになればいいなと。

うちに来ている人たちにもいろいろな考え方の人がいて、でも人間としての根本には結構一緒のところがあるんです。この地域全体で、こういう未来がいいねと話し合えたり、笑いあえたりする状態があって。完璧には無理でも、時間があるぶんすごくまとまれる。もし今後どうしていくかで対立したとしても、妥協できるところとか、もう少し歩み寄りあう姿勢とかが生まれるんじゃないかと。

**この地域には、今までの犠牲を犠牲としてだけでは終わらせない素晴らしい人たちも、苦しい思いを抱えた人たちもいて。そういったものを全部ひっくるめて、残していくべきだと思います。負の方だけ残していくのではなくて、そこからもう少し明るいものを、互いに協力して目指していけたらなと。**

**もう少し具体的に、おっしゃるような対立の解決のために、特に廃炉が横で行われている中で出てくるであろう問題の解決に、今何が必要でしょうか？**

谷 多分、皆さんはいろいろな経験をされています。人に語れないぐらいの苦しい思いをしている人もいるから、事務的に言っても納得する人とならない人がいるかもしれない。聞きたくなければどんな説明も入っていかない。知りたくなったことは、こちらから出せるようにしてあります。何がしたいのか、その実現のためにどうしたらいいか、この地域がどうであればその人の中で受け入れられるのか。それらを自分の中で具体化していけば、どんな人もある程度はどこかで妥協が必要だったり、もう少し冷静に考えなければいけなかったりすると思うんです。

**例えば放射能が怖くても、被災牛の処分の話を聞いて牛を殺す必要があると感じたり、人は内発的な感情には納得するんです。強制避難でもそうですけれど、人から言われたことはどうしても納得しきれずに、しこりになって残ってしまいます。こちらの説明が事務的であっても、自分がどうしたいかという意思に基づいてやっていくと、自分の中で納得できる。ストレスで亡くなっている人をたくさん見っていますが、自分がどう生きたいか、周りがどう生きていくべきなのかを主体的に考える機会があればいいですね。そうすると、いろいろなことを妥協しながら、穏やかに物事を考えられるんじゃないかなと思います。**

**廃炉について自発的に学んだり、理解したりする機会はありましたか？**

谷 不安は多かれ少なかれみんな持っていると思うんです。でもその不安と向き合おうとしている人より、情報から遠ざかって精神を安定させようとしている人の方が多分多い。

大切なのは、その人自身の気持ちをまず表に出して、自分で考える時間も取るようにして生き方を見つめること。それがストレスのない人生につながっていると思うんです。主体的に考えてから情報を出されると、自分から思ったり聞いたりできるようになる気がします。

**人は来られると身構えて引いてしまいます。無理に誘ってもアレルギー反応みたいなものがあるかもしれません。人生の選択肢のひとつにこういう情報もあります、来たればいつでもどうぞ、という程度に控えめな感じだといいいのかもしれない。なおかつ、こちらの考え方が伝われば、もっと知りたくなくなるんじゃないかなと。**

例えば、ここを別荘地にして自分が帰りたい時に帰るとか、帰った時に花がきれいだったらいいなとか、どういう未来がいいかを最初に描かせてみる。そうすれば、自分が帰った時はああしようこうしようと思える。どうせ国が全部決めてしまうかもしれないけれど、自分がこの地域に何かできるなら、政府がそれを考えてくれるなら一緒に考えてみようかと。その中の一つに、廃炉について正しく知ろうというのが出てくると思うんです。

ストレスを抱えている人は、あまり客観的に吸収ができないところもあるでしょう。塾で教えているのもあるんですけども、自分から知りたいと思わせることが大切なんです。子どもたちを面白がらせたり楽しませたり、どうしてもここに受かりたいと思う気持ちがあったり、自主的にやる気がないと。いくら分ちやすく教えて知識を頭に入れても、自分で納得しないとうまく吸収されない。自発的に話を聞く機会があれば、みんなもっと参加型になってこの地域が盛り上がるのかなと思います。



# インタビュー 06

なるほど。谷さん自身は、強い内弁性の中でご活動を続けて、実際に新たな理想を描き続けていらっしゃるんですね。例えば、**羊飼いが牧羊犬を使って羊を管理するみたいな、牛追いロボットを開発しているとか？**

谷 はい。牛が嫌な音があって、それを出すと牛が離れていく、という性質を使って、牛を動かしていくロボットです。ドローンでその音を出して牛を移動させれば、遠くにいても牛の管理ができるようになります。

元々新聞に私が取材をされて、たまたま小料理屋でその記者さんと話している時に女将さんに廃炉関係で活躍する研究者の方を紹介されて。接点はなさそうだったけどとりあえず話しました。私には実現したい夢があって、この場所から世界へ良いものを生み出していきたいという思いがあって、そのためにも作業を効率化したいんですよね、と。そうしたら、それは確かに、地域にも日本にも世界にもいいということで、すごく協力してくれて。

**それは、「イノベーション・コースト構想」の一貫での動きですか？**

谷 全然そういうのではないです。うちは小さい団体ですから、そういったものには乗っていません。

**でも、結構なイノベーションですね。人が行けない遠方までドローンで牛を追いかけるわけですか？**

谷 今、ここでは広い敷地に牛を飼っていますが、例えばブラジルでは牛 1 頭あたり 4 ヘクタールいることを考えると適正頭数なんです。その敷地を、全部人の手で見回ることになる。私は牛の飼育を戻ってきた人たちの仕事としても考えていて、その時にお年寄りが牛の管理で電柵を 1 周回れるのかなと、長い距離を移動できるのかと心配で。だから、もっと管理が簡単になればいい。

私自身が感じることでありますが、農業は暗い、汚い、大変だと思われがちです。それで放置しておくとか犯罪や火災、病気の発生とか、野生動物の侵入とかリスクもあります。それらのリスクを抱えて輸入に頼るのではなく、効率化して、楽しく生きられる社会を作るためにも、今ある技術を活かしたらと思って。**お年寄りでも非力な女性でも楽に管理ができるし、来るのも週 1 回で済むかもしれない。そういう管理システムができれば、日本だけではなく世界的に見ても農業が劇的に変わると思います。**

**夢があるし、現実的なニーズもありますね。**

谷 **それができたら、バーチャル柵を作りたいんです。物理的には何も置いていない場所に牛が近づくと、センサーが反応して嫌な音が鳴ったりして。**

ただ、現段階ではまだまだ難しく。研究・開発の協力者が立ち入るのにも当然許可証が必要で、パツパツとはいかないです。

**谷さんは元々そういったテクノロジー、エンジニアリング面から農業や環境にアプローチするのに興味があったんですか？**

谷 元から興味があったわけではないです。でも作業の効率化や、牛と人と自然の共存共栄を考えると、昔のやり方が 100% いいというわけではない。動物が、人間も含めて健康に生きるためには、テクノロジーの力も必要だと思うんです。

昔はそれが出来ず、大変だったから、今のような社会になり、

動物が絶滅して、生物の多様性が失われた。地球人口 90 億人の時代で食料を奪い合うようになった時、機械化することで世界が良い方向に進むのであれば、その方がいいと思っています。苦しんでいる経済発展途上国の人を助けたくて勉強してきて、人が亡くなるのも見てきているので。

**この福島第一原発周辺地域に対しては、イノベーションがポコポコ起る地域にするぞ、と様々な制度が作られているところですが、谷さんの話のような具体的な事例を聞くと希望が見えますね。**

谷 **ここで生まれるものは、日本で起きている多くの問題を解決できると思うんです。**

若者の新規就農がすごく少ないんですが、農業は自分のペースで出来ます。責任は自分で取らなければなりません、周りと助け合いながらだとリスクは減りますね。自分のスキルを活かして、自然と接しながら社会の役に立てる。それはとても良いことで、機械はその補助を担います。

**とらえず、この牧場の牛たちをカメラで 24 時間、オンラインで見られるようにしたら面白いかもしれないですね。**

谷 やりたいです。

猪苗代町の役場のホームページを見ると、ライブカメラを自分で動かして磐梯山を見れるようになってるんです。こっちは今、春だけれど磐梯山はどんな感じか、雪は先週より解けているかとか見て分かる。大熊町の牛たちや自然を見れるようにしたら、ボランティアも増えるかもしれない。あそこに咲いているのは桜の花ですか？

谷さん そうです、あれは桜なんです。

オリンピックの時に取材もあると思うんですけど、**バーチャルホープツアーを始めたいんです。原発がある場所だからといって、チェルノブイリのような廃墟のみを強調するような売り方ではなく、事故は事故でも、人間がその後ここまで復興させたという姿を見せたいんです。**

国内でもここに来られる人は限られているし、海外の人はさらに難しい。介護など事情がある人もいる。だからインターネットで、いつでも映像を見られるようにしたいんです。入場料は 300 円とか 500 円で、奥までぐるっと見て回れるコースもあって。冬の餌代にできれば。

**現時点でインターネットはつながってないんですか？**

谷 ネットはないんです。そもそも電気が来ていないんです。

**ソーラー発電でもできるでしょう。ライブカメラだけなら、消費電力も少ないです。**

谷 そうなんですか。ライブカメラが出来たらすごくいいんですけども。

**最近の普通に誰でも手に入る民生用のライブカメラは夜でも赤外線数十メートル先まで映せるから、野生動物も見られます。**

谷 本当ですか。牛の体調に何かあったとしても、許可証の制約もあるし夜は牧場に入れなくて心配でした。ライブカメラで牛の様子を見られたら助かりますね。



**すぐにできることも多そうですね。**

谷 牛が草を食べるのは本当に速いから、区画を広げたらみるみる除草されるのが分かりますよ。ここは農地の始まりなので、荒れてしまった農地にどんどん広げられればと思っています。

**農地の始まりとは、具体的にどういうことですか？**

谷さん ここが大熊町の農地の最西で、ここより西の山側にはもう田畑がありません。航空写真でも分かるんですが、ここから東に向かって、元々の農地が広がっています。

ここを**山と里の間の緩衝地帯「カウベルト」**にできたらと思っています。

**カウベルトは富山県で盛んに作られているんですが、山からおりてきた動物が里に入ると、交通事故になったり、危害を加えて駆除の対象になったりする。それを防ぐために、牛による除草で緩衝地帯を作るんです。動物には穏やかに山に帰ってもらう。食と住が充実しすぎないようにして、繁殖を抑えて、狂いがちな生態系を安定させる。人と動物がお互いにいい状態になるわけです。**

野草や柳が繁殖すると、山火事が起きて原野になったりもする。それをここで防ぐという効果もあります。

**はじめ、単に牛を飼っているという情報からは想像しきれなかったことがだんだん見えてきました。5 年後 10 年後、この地域全体がどうなっていたらいいと思いますか？**

谷 ツアーで人がたくさん訪れて、生き物と人間と自然が Win-Win-Win になっている新しい空間へと踏みだせたらいいなと思っています。いまま、西日本から来る人たちが初めは怖がっている人も、来ると全然怖くないと分かりますし。ただ除草されるのと、牛たちが生き生きとしているのとは、ほっとする感じが違うんです。人間の意志をちゃんと汲んで言うことを聞くような、人間に近い動物たちがここにはいます。牛たちがのんびり草を食んでいる姿は牧歌的で、希望をくれるというか。放射能の数値に左右されるのではなく、もっと人生には大切なことがあると感じてもらえる場所になっていると嬉しいです。

**なればいいですね。動物は見ているだけで嬉しくなりますもんね。**

谷 そうなんです。生き物がモフンと言いながら草を食っていると、食べるためだけではあるんですけど、ここで一生懸命頑張っているのが伝わってきて。どういう生き方をするのかが生きる上で大事なんだと思わせてくれます。

不必要な被曝をするかもしれない。それでもストレスフリーで生きられるなら、それも幸せだと。私も、東京にずっといれば余計な被曝なんてしなかったのになんで、とよく言われます。でも、現状を見て何もできない無力感で自分が嫌になって、そのストレスで死んでいたと思うんです。だからここに来られてすごく良かった。

仮設住宅で困っている人はストレスから暴飲暴食して健康を害している人もいる。私にはそれが幸せには見えなくて、それよりはうちの地主さんたちみたいに、ここに出てきてワイイと言っている方がいい。震災前に農業をなりわいとしていた人はここで生き生きしています。

**首都圏にも観光牧場がありますが、ただ動物がいるというコンテンツだけで、子どもも大人も楽しめる。この風景にも同じものを感じますね。**

谷 この光景は財産だと思っています。牛たちはやけに人懐こくて、みんなにかわいがってもらっています。日本中に感動を与えた犬のタロとジロもそうですけど、**生き延びた命というのは人に希望と勇気を与えてくれる。しかも牛たちは、糧やさまで与えてくれる。この事実を世界に知ってもらって、残していけたらいいなと思っています。**

**チェルノブイリ原発周辺にいても、野生化した牛や馬を見たんですが、ガイドをしてくれた地元の人「珍しいぞ、あなたたちは運がいい、見とけ」と大喜びでした。シビアな現実を見た先で拍子抜けした部分もありましたが、微笑ましく印象的な場面でもありました。**

**良い意味で、外から人が集まるきっかけになっていくと良いですね。**

谷 はい。今は牛の里親募集をしようと思っています。毎月、一口 1000 円からで冬のエサ代に充てる仕組みなんですけれども。里親さんたちの寄付でプロジェクトが成り立っていけばな、と。解除された後三年間は広大な農地全てに除草のための国の予算がありますが、その後は出ないと言われてます。補助金の延長を申し出ても数年の応急措置にしかならなくて、その先が続かない。

この地域では、新しいことをし続ける必要があります。ここならではの付加価値がある特産品を作りたくて、ベビーキウイの開発を考えています。大熊町では元々キウイが特産なんです。主にチリやアメリカで栽培されているのがベビーキウイなんです。キウイには毛があるから日本では皮を食べないですよね。でも、これは丸ごと食べられて、食べやすい皮に含まれる栄養価も高いんです。

**なるほど。今日もちょうど、元々キウイを栽培していたところの草刈りをしていましたね。しかし、ボランティアこれだけ人が集まるのは貴重ですね。「いまま被災地にボランティアのニーズはあるのか」とよく聞かれますが、ここに来てほしいですね。**

谷 もう支援でもないだろうという意見が主流になってきているので、単なる支援だけでは続かない。でも、自分の楽しみを見つけながら新しいものを生み出す感じだといいですね。みんなが使命感に燃えて、楽しくやっていたらいい。このボランティアの人たちとは、助けたり助けられたりのいい関係が築けていると思います。



# インタビュー 07



## 猪狩 久市 さん・西山 正則 さん 齋藤 徹 さん・松本 里香子 さん

全町避難から避難指示解除を経て、4割以上の住民が町内に居住するようになった楳葉町。一方で、避難を続ける住民や原発事故後に新たに街にやってきた住民の生活、公営住宅や商店街のオープン、Jヴィレッジの再開など、町を取り巻く環境も大きく変化し始めている。地域の産業・まちづくりの今後について住民の話を聞いた。

まず、猪狩さん、今何をやっていらっしゃるか教えていただけますか？

猪狩 楳葉町観光協会の会長職というのを仰せつかっているんですけども、私は震災前は小売業を営んでいたんです。でも、この事故以来、やっぱり避難という形になって、いわき、東京、仙台を渡って、去年の4月に戻ってきました。今はパトロール隊をやっているんですよ。地元の防犯パトロールのね。3交代24時間制です。原発事故の後、空き巣被害にあった住民が多くいたんだけど、これをやってから、5件くらい犯人逮捕に繋がりました。

現在、元々営まれていた小売業のほうは？

猪狩 これまでのお客さんもいるので、廃業届は出していませんが、これから先、なかなか商売は難しいと思っています。そして、木戸川漁業協同組合にも所属しています。今年3月で、自前の鮭稚魚が2回目の放流ということで、137万匹放流しました。しかし、すぐに昔の形には戻らない。ただただ、あとに引き継げるように、いくらでもいいから昔の状態に戻したい。そういった思いで、我々は漁業をがんばっています。楳葉には、Jヴィレッジ、木戸川のサケ漁、天神岬公園、木戸川渓谷、色々な観光資源がある。それらを、震災前の様に戻してやりたい、戻ってほしい、そういう気持ちでいるんです。

建物や道路はできて町・人の賑わいが戻るのには時間がかかりますが、それでも当初に比べればだいぶ戻ってきた感じはありますか？

猪狩 そうだね。組合の鮭販売所なんかは会津や中通り、県外からも急に来るお客さんが多いんですよ。避難している地元の人でもなかなか来られないけど、電話予約もはいるようになってきました。

ありがとうございます。次は、西山さんですが、商工会の職員をされているということでもよろしいですか？

西山 商工会の職員になって3年目です。楳葉町商工会・観光協会の事務局長をしています。商工会は、町の復興・中小企業の各種支援・地域総合振興事業、観光協会は観光資源のPRおよび開発事業・イベント事業を取り纏め、「ならばマミーすいとん」、木戸川の「紅葉汁」「楳葉のゆず」「楳葉の酒」などを町内外へ発信し、楳葉町役場と協調して活動を行っています。ただただ、がむしゃらにつっぱして来ました。

ここに入る前は何をしていたんですか？

西山 30年ぐらい原子力・火力発電所のほうで勤務していました。廃炉関係の状況は毎月1回東電さんが説明に来ますが、以前仕事をやっていたから内容は分かります。システムが構築され、安全になってきているということも。今後の安心につなげていただきたいと思います。

住民の居住状況についてはどう思いますか？地域の産業を成立させる上でどのくらいの住民が必要だと考えています。

西山 もともと震災前の町民数は8,000人であり、多くの事業者がギリギリで商売をしていたと聞いています。80%以上戻ってこないとかつて商売（特に小売業）をされていた事業者は再開が非常に困難です。復興関係の仕事も落ち着いてきているかなとは思っています。現状、再開した事業者は8割を超えているのかな。ただ、それがすでに頭打ちになっています。小売業が再開できないと昔ながらの町並みも見られませんか。

齋藤さんは実際地元の声を聞かれていると思いますが、どんな印象ですか？

齋藤 地元の企業さんは少しずつ戻ってきています。今度できた、「笑ふるタウン」の商業施設は一つの転換点になるのかなというのは期待しているところなんです。ただ、やっぱり基本的に住民の人をお客様・顧客として商売ができるかということ、実際そうではない。言い方は悪いですが、住民の方だけを頼ってはいけない部分はあります。やっぱりそこは廃炉の作業員の方だったり、地元に進出した企業体などとのBtoB（企業間取引）

だったり基盤になるかなと思っています。

今年度、大きな動きが二つあります。商業施設ができるのとJヴィレッジが再開することです。この二つを起爆剤にしているか、過渡期に入るのでは、と思いますね。

西山 Jヴィレッジとは震災前から町内事業者取引があり、商工会としては、地元事業者がお取引ができベース売上が出来ればとの思いで活動をおこなってきています。Jヴィレッジは、世界に発信できる場所ですから。サッカーの大会とか、それ以外にもいろんな企画があると伺っています。そういった企画の中で、町内ホテルとの連携もお願いしております。他の企業間取引に於いても、さまざまな業種の事業者マッチングのお手伝いを行っています。

やはり、待っている商売だけでは今後、成り立たない。原発事故前は昔からの商店があって、お客さんがいて、待っていても成り立っているところはありましたが、いまはそうではないですから。

業種によりますが、町民の声として「食料品関係の移動販売があると助かります」との声も多く聞きました。震災後、仮設販売時は可能な範囲は対応していたようですが人材・食材不足の関係で非常に厳しかったと聞いてます。商業施設（コンパクトタウン）が出来れば、電話注文配達等も充実させると伺っています。「食料品」のお話ですが。

なるほど。そして、松本さんは地域の名物「マミーすいとん」の普及活動をしていらっしゃるということですね。

松本 はい、「ならばすいとん研究会」ですね。私は、今、楳葉町の山側に自宅を構えています。一番最初に息子夫婦が楳葉に移動して、次においしいちゃん、おばあちゃんが戻って私たちが最後に戻る形で。

西山 松本さんは「ならばすいとん研究会」の会員なんですけれども、ほとんどメインでやってもらってます。マミーすいとんを県内外のイベントなどで出す機会が出てきたら、私がどこどこでお願いしますと依頼して、その段取りをしてもらったりとか。「ならばすいとん研究会」は前前年度、世代交代したんです。みんなだんだん高齢になっちゃって。現在16名ほどが活動しています。

松本 商工会長・観光協会会長さんから、何とかやってほしいか、人集めてくれないかということで頼まれて。最初ずっとお断りしていたんですけども、でも、私たちが楳葉に帰ってきて何か一助になればと思ひまして。だったら「すいとん」でと思って。

楳葉町の名物のすいとんを公的に頼むときに、研究会に話が流れてくるということでしょうか？

西山 昔からそういった流れはあって、年間行事でどこに行くかが大体、すでに決まっています。他にもいきたいのですが、手が回らないので断らざるを得なくて。活動としては、年間25回くらいですね。六本木の福島フェスとか宮城県登米市はとフェスティバルが結構大がかりなイベントで、マミーすいとんを出店しています。大きなイベントでも、遠距離の場合、交通費や宿泊費で赤字になってしまうんですね。

松本 夏期（7～8月）はお断りしています。食中毒もあるし、提供してもなかなか食べ切らないので。作る側も熱中症になったり。

ならばすいとん研究会の活動歴は長いですが、まだ私たちが参加して2年目なので、まだお手伝い感覚でやっているところがあります。これから楳葉町のためにいろんなイベント活動に参加してやっていきましょう、っていう気持ちは皆さんそれぞれにあると思うんですが、孫がいたり、おじいちゃんおばあちゃんを抱えていたりしているので、完全にすいとんに時間をかけられるというのは無理な人もいます。その中で余っている時間をメンバー皆で調整しながら少しでも協力できればということに参加しています。

西山 どこの団体もなかなか人がいないんです。もとは10人いたところが2人だけとか。ところが「ならばすいとん研究会」は16人だから大きなイベントが2つあってもやりこなしてきた。土曜日、日曜日と別のところでイベントをこなしたり。すいとん研究会はかなり名が知られているし。方々で、「ならばマミーすいとん」のPR活動はできているんじゃないかな。

そもそも、どうしてすいとんなんですか？

猪狩 戦時中、この辺りは食が乏しかったものですから、みんなすいとん食べていたんだよね。それをもう一度現代によみがえらせようという町民がすいとんをつくるコンテストをやって。コンテストでグランプリを取ったすいとんを、当時のサッカー日本代表監督「フィリップ・トルシエ」氏に食べてもらったら、「おいしい！故郷のおばあちゃんの味だね」とおっしゃって、「マミーすいとん」と名付けてもらい、それからですね。

廃炉に関して住民の方はどう思っているのでしょうか？

松本 あんまり興味を持たなくなったっていうか、もうお任せって感じです。私たちが知ってどうなるわけでもないですし。

西山 安心・安全ということは難しいかもしれないけど、その人なりの判断に委ねるとしか言えませんね。

松本 年に一回でも良いから、やはり東電の方から町民に対して、特に若い人たちに、分かるように説明があれば少しは考え方や見方が変わるのかなって。

西山 楳葉は、昔から町民と東電のお付き合いはうまくいったと思いますよ。地域密着型でコミュニケーションを図っていたので。お祭りなんかは住民向けのバスを出して原発敷地内でやっていたしね。それと、地域住民の雇用も多かったのは確かですね。

猪狩 そうだね。原発の町だったからね、みんなこの辺は。

松本 やっぱり事故があったことに関しては、本当に残念で取り返しのつかないことになってしまったなと思っています。ここは、原発ができて共存共栄してきて、一緒に今まで来たというのがありましたから。

猪狩 原発事故の廃炉に関していろんな噂を聞くんです。最終的にチェルノブイリみたいな石棺状態になるとか。日本ではそ



## インタビュー 07

んなことはないと思いますが、そういう陰口をいわれている、作業員の人は大変だと思う。ただ、安心するということはありません。我々は、3月のあの事故以来、安心ということとは絶対ないんです。だけど、絶対安全にはやってもらいたい。ただそれだけです。

全てをオープンに、不透明なところをなくして、やっぱり昔の安全・安心、報・連・相っていうのをメディアを介してしてやってほしいですね。些細なことでも何かあったら報告しつつ。普段はそうやってるんだけど、たまに忘れてるところがあるから、それを突っつかれちゃうんでしょうね。報告が、2、3日遅れると致命傷になったりね。下請けから上がってくる途中で止まって、何も報告できないとか、確実な情報をそろえてからと報告が遅れるとか事故以前もありましたね。

夕方にすぐその国道6号線が混雑する状態も続いていますね。

**猪狩** それも問題ですね。欲を言えば、2、3車線欲しいな。いずれもっと町民が帰ってきて店も開くようになった時に苦情は出てくるよ。しかし、復旧・復興が完了したら、将来的にとかを考えると、目先の話になるのかな？

**松本** こんなに人が入って廃炉に向けて皆さん活動なさってる。うちの前も、朝も6時ぐらいに見るともう混んでいて。

**西山** トラックが信号のところで10台以上並んで通りに出れないときがあるんだけど、これに文句言っちゃったら今度は工事が進まなくなるでしょ。それは当たり前の話で。

ただね、作業の方はだんだん原発に近いほう、富岡とか大熊に活動の拠点を移すようになってきているから、結局は。向こうのほうが時間（作業）効率も良いし。前はここから富岡まで昔10分で行けたのに、いまは朝夕の時間だと30分ですからね。それ考えると、向こうの宿に泊まるでしょ。

ホテル業は難しくなってきましたね。昨年あたりから榎葉町で宿を契約していた業者が、次から契約しないで北の方へ行っちゃったとか、話は聞きましたね。

落ち着いちゃっていくのは分かるんだけど、そうすると、ここはどうやっても商圏を昔みたいにはできないしね。ある商圏でやるしかないんだけど、町外商圏へも目を向けていかないとだんだん厳しくなっちゃうんですよ。昔からですが、業種によっては待ち商売っていうのはないですからね。

**松本** 人がいないとね。

放射線の認識はどうなっていますか。

**松本** 畑でとった野菜なんかは測ってみて数値的には大丈夫だとは思いますが、やっぱり子供にはどうなのかなって。主人なんかよく言うんですけど、今まで前例がないことなので。

**西山** 広い土地がある人たちは庭仕事やっているね。巡回して、「大丈夫かい？」って聞くと「大丈夫だ」って答えてくれる。そういう人たちは震災後すぐ戻ってきて、自分で作って食べてた。ただ「もう年だから、おら、いいんだ」っていう話を聞いたね……。

うちも孫二人、息子たち夫婦もいるから、同じ悩みがある。「本当に戻ってくるのか？」「戻ってこなくても大丈夫だよ」「いい、

戻るんだ。一緒に住むんだ」って言ってきて。だから、親二人、うち二人と息子夫婦孫で四人。8人で住んでいるんですけど。長い時間が経過した分、難しいところは往々にしてあるんじゃないですか

新規産業で若い人に魅力ある地域にするという話もあります。イノベーション・コースト構想もありますね。

**西山** イノベーションコーストは、私も3回くらいはいろいろ見に行ったんだけど、会員の人のマッチングで。ただ、入れる隙間がないんですよ。特に小企業ならなおさら。

東京だったら東京の大企業でどんどん先に決まっている。そうやってシンポジウムとかで成果として発表していかなければならないから。それにぶら下がるのは、本当に特別なネジとか。そういった製品の一部部品だったら受け入れられるかもしれないですけども、それ以上なかなか入り込めないですよ。地方で開催される頃には、企画（企業含め）はほぼ決まっているということですね。そうでなければ、プレゼンテーションは出来ませんからね。

**猪狩** こういう災害があったでしょ。みんなバラバラに避難した家族もいる。それを昔だったら長男だからお前家に残らなきゃだめだとか言った。でも、今はそれもだめ。言えなくなってしまったんですよ、この一件から。恐らくこういうのはみんな悩んでると思うよ。無理に連れてくるわけにはいかなくなってきた。

**松本** 若い人たちは子供たちがいても、小児科がないので不安を感じていますね。いわきまで行くのは大変ですし、いわきにいったからといってすぐに小児科にかかれるってわけでもない。お休みになっちゃうところもありますし。やっぱりそこら辺は、戻ってきたくても戻ってこれないっていうことが背景にあるでしょうね。お食事できるようなところが欲しいなっていうのはありますね。いわき市まで行かないと、飲んだり食べたりするところがあまりないので。時間的にも……。

**西山** だけど、こども園から小中学校含めて160名くらい子供がいるんですけど。これはすごい数字ですよ。校庭でこどもの声を聴くと嬉しくなりますね。やっぱり娯楽、楽しめる場所っていうのが、必要な。大手企業が進出する際、ゴルフの練習場なんかも作りましょうという話があったんだけど、途中でだめになっちゃった。

**猪狩** 家の電気がポツポツと点いているのが多くなってきたんですよ。帰ってきているんでしょうね。これは間違いなく増えます。

**松本** ただ、昔は家の鍵なんか掛けなくても寝られたのに、震災後の今は本当に「鍵、鍵、鍵」って。意識が全然違いますね。街灯がついたり、パトロールが続いているのを見ると安心しますけどね。

## インタビュー 08



### 西本 由美子 さん

原発事故後の浜通りの道路に桜を植え続ける人がいる。あの日々を忘れないように、そして現在は避難している子どもたちが30年後、故郷に帰ってこれるように。西本由美子さんは、そう願いつつ福島の街道沿いに10年間で2万本の桜を植えることを目標に、福島県内外、様々な立場の人を巻き込みながら活動を続ける。西本さんは、震災・原発事故から7年を経て、国だけでなく住民もこの生活に慣れきってしまっていると指摘する。この地域で生きる住民は、廃炉とどう向き合うのか。そして、若者や子どもたちに何をどう伝えていくべきなのか。廃炉との付き合い方、廃炉とともに生きるとはどういうことか。第3回目のフォーラムを前に、今後の地域住民のあり方についてお話を伺った。

西本さんには、昨年の第二回福島第一廃炉国際フォーラムにも参加頂きました。まず、このフォーラムの役割をどうお考えですか。

**西本** こういうものをやるときは、いつも同じ人ではなくて、今、頑張っているのにみんなが気づいていない人たちにチャンスを与えてほしい。双葉郡を残したい、再生したいんだっていうふるさと愛を持って頑張っている人とか。そういう人たちに焦点を当てると、「頑張るとちゃんと聞いてくれる人がいるんだ」という励みになっていくと思うので、この廃炉フォーラムは、そういうこともまかかってほしい。本当の意味で、地域を盛り上げていこうと頑張っている人たちの目線、立ち位置などをぶつけてほしいと思っています。

この夏にJヴィレッジが再オープンするんだけど、地元を何とかしたいっていう熱いものをもっている職員がいる。大熊、双葉町を再生したいって熱い思いがある若い経営者もいる。富岡に土地買って、工場建てて、これからの自分たちのふるさとにどう責任をとれるまちづくりをしていって考えている人もいる。そういう若手のリーダーになる子が新鮮な意見を出していくと思いますよ。

廃炉について、いかなる課題に向き合うべきでしょうか。

**西本** 行政やNDFはもう、地域だけ置き去りにして1Fの廃炉だけ見てればいいですっていうわけにはいかないはず。これから8年目に入るんだけど、町づくりをおろそかにすると廃炉も成功しなくなってくるのが見えてきているんじゃないでしょうか。

ここに住んでいる人は運命共同体で、一緒に生活していかなければならない。廃炉をやりながら感じたこと、30年、40年先までできること・できないことをしっかりあげていただいて、廃炉をやるために「どうしてできないか」「こうすると可能性がある」「でも住民の皆さんにはこういうデメリットがあります」と正直に我々にぶつけなければ。我々は意見を言う権利もあるし、知る権利もある。知る権利はいいことだけ知ればいいのではなくて、ダメなことでも知らなければいけない。そこ

ははっきりしてほしいですね。

1日目はそういうことにぶつかっていかないと成功にはならないんじゃないでしょうか。去年よりグレードアップしないといけないうわけだから。

国って綺麗事が好きじゃない。でもこの廃炉に関しては綺麗事じゃないのよ。なぜなら、我々はここで生きていかないといけないから。人間として綺麗事だけ受け止めて生きていけないわけじゃない。汚い事も受け止めて生きていかないといけない。国には汚い事を隠そうとしないで、一緒に悩んで解決していく方法を手探りでもいいから探していってもらえないかなと感じています。

一緒に悩む、ということ、言うのは簡単ですが、実際には簡単では無いでしょうね。

**西本** 住民の側も、ここでの生活に慣れてきて、そういう熱が薄れているとも感じるんです。最初の2～3年はビリビリ感があったけど、7年経ってこの生活に慣れちゃったのよ。住んでいるとすごくよくわかる。だって広野なんか朝刊こないでしょ？ コンビニや売店で買うでしょ？ 最初は文句たらたらだったけど、今はもう慣れちゃって、当たり前のようになっている。生活するってこういうことなんです。慣れが怖い。特に廃炉にこの慣れは絶対にあってはならないと思います。でも、これでいいやって思う我々がいることも事実。もう諦めている。それはダメなの。

国も東電との関係もそうだけど、お互いにいろんなところで緊張感が薄れてしまっているから、もう一度見直さないといけない。だからそういうことを若者たちも交えて話せば、若者たちはピリッとする。それじゃいけないんだって、思うようになってくるかもしれないですね。

原発事故後にここを訪れて、中にはここに住み始めた人もいます。そういう方々は、現状を見て、これが元からの普通の姿だと思うでしょうね。

**西本** そう。視察に来た人は、こういうもんかって思っているよ。



# インタビュー 08

**でもそうじゃない、もともとは違うんだよ、これが普通じゃない。前に進むためにも、そういうことって知ってもらわなければならないと思います。**

ここに住んでいる人の現状を伝えるっていうのは、すごく難しい。人それぞれ十人十色で伝え方はみんな違うし、十人十色の想いがあるから。ただ、みんな想いは違うけど、結局、自分の心のふるさとっていう想いは最後になにか一つになっていくのかなって。そこを一緒にまとめようと思うとそこが難しいでしょうね。

そこはいろんな想いがあっていいということですね。

**西本** 私はそれでいいと思う。そうでなくてはおかしいかなって思います。みんな違うんだから、そこをひとつにしようとする、どっかに歪みが出てきてうまくいかない。違っていいと思う。

**行政は、自分がやった感の満足度があればいいという姿勢でイベントをしようとするでしょ。「この人たち仕事でここにきているんだらうな」ってあからさまにそういう姿が見える。あの中何%が本気で考えてくれる人がいるのか。地域の人を置き去りにされて、まだまだ我々の想いが届いていないのになんていうのを感じます。**

地域を巻き込んで盛り上げていこうと、イノベーションコースト構想もはじまっています。一方、地元住民の中には、あんまり自分に関係ないんじゃないかと他人事のように感じている人もいます。何か変化は感じますか。

**西本** 唯一最近いいなって思うことは、「イノベーションコーストのための人材育成」が各高校に降りてきたことかな。私は行政のイノベーションコースト構想を検討する会（経済産業省「福島イノベーション・コースト構想推進分科会」）の委員になっているけど、私ははじめの頃から人材育成が必要、ワンランク上の子どもたちを浜通りで育てましょって言ってきましたが、5年かかってやって成果として出てきました。そこは評価に値することができたかなっていうのは私の中ではあります。

でも、イノベーションコーストを利用して各自治体で箱物の競争合戦が起きていることは反省することかな。もっとやるべきことがあるんじゃないかなって思います。

とはいえ、人材育成が成果を出し始めるのは、10年後、20年後に高校生が現役世代になってという話ですね。むしろそのぐらいの時期になったらイノベーションコーストなんて聞かなくなっている可能性もあります。

**西本** もう忘れてるよ。でもイノベーションコーストっていう話が出なくても、人を教育するっていうのはやっぱり大事。人を教育するっていうのは、5年先、10年先、20年先を見て、長いスパンでやらないとできないんです。何もやらないよりは、そういうかたちができてきたっていうことは少しよくなったのかなって。5年かかって踏み出したことは評価できるかなって思います。

地域で活動しようという若い人は不満だけど、期待はしている。自分たちがこれから戻ってくる。廃炉を受け止めて、どんな事業をしなきゃいけない、どういう仲間を呼び寄せないとい

けないそういうことをしっかり考えている。まだまだ諦めちゃいけないんだなっていうのを感じます。何かやりたい、声を出したいっていう若い子は結構いるのよ。ただ情報がないだけで。



なるほど。

**西本** 廃炉って我々の知らない世界でしょ。だから答えだっただけ簡単には出ない。答えのないところに向かって行っているわけだから、課題が残るのは当たり前で。でも、住んでる住民はわがままだから、課題を結果にしてほしい。「こういうわけだから結果が出ないんです。今ここを改善して次のステップに行きますから、だからみなさんも協力してください」「心配だけ待たせてください」とか、細かく言ってほしい。

いいんですよ。廃炉をやっているからって今、結論が出る問題じゃないじゃないですか。みんなが手探りでやっているから。ただ最低限今やっていることを理解してもらおうための努力っていうのは必要なかな。結果じゃなくて、今やっていることをみんなに理解してもらおう。そして、廃炉っていうのはすぐ解決しないんだよっていうことを教えていかないとけないと思う。10年やっても決着はつかないし、下手すると一生付きまといいかもわからないから。そこで国が理解してもらおう努力をしない限り、住民には不満だけが残る廃炉になるでしょうね。

「すみませんけども、これはどうしても長くかかるんです」っていうのは常に伝えないとけない、と。

**西本** そうそう。みんなそこに住んでいる以上、協力して一緒に住まないとけないわけだから、それが不満になるのは言葉が足りていない、誠意が足りていないということでしょう。相手が理解しないうちはそれは説明したにはならないでしょう。

住民同士で語るのも難しいよね。でも語りたくなるような人がくる場所、ここなら安心して廃炉の問題を誰に気兼ねなくお話しできる場所を作っていくっていうのも必要でしょう。不安だから口に出したいっていう人はたくさんいるわけだから。そういう人のためにもふらっと入ってしゃべれる場所って大事だと思う。これは長期戦、永遠の課題。

ただ、いまでも車座だ、対話だっているんな震災のNPOを作ったりしているのはどうでしょう。3ヶ月で何百万の予算つけるからいろんな人呼んで勉強会やってくださいとか。じゃあそれが、何か結果になってるのかって言ったら、私の知る限り何にも形に現れていない。税金だとしたらものすごい金額でしょ。普通の家庭でそれだけ使ったら、家を建てましたとか何かが残っているはずなのに、この地域に対して予算が切れてもずっと続けていけるようなものが何かあるのになんていうと、不安になります。

それを7年間見てきて感じたから8年目に入った今、そういう反省を踏まえてきちんと若い人たちと一緒になにか考えて、

切り替えないといけない。やっぱり行政に期待ってできないよね、今。悪いけど。

箱物は確かにいっぱい建った。でも箱物だっただけ、予算がなくなったらどうするの？ お年寄りばかりで、戻る町民も数が足りないなかで、自分たちで管理しなさいって言われたら、管理できないでしょ。支出する年寄りはいらるけど、収入になる若者はいないのになんてやって管理するのか。それって若者のお荷物になるんじゃないかっていうふうには私は思っています。おそらく双葉郡に関しては人口が減っていくんだから、減っていても作った施設を運営していけるようなやり方を考えてつくらないと、絶対住民のための施設にはならないと思う。住民のための施設が欲しいのであって、お荷物になる施設はいらないから。

廃炉についても、予算、その他、結局若者の負担になるんじゃないか、という意見が去年のフォーラムで出ました。

**西本** 廃炉なんて特にそう。やり方とか取り組み方、先がわからないんだから、それをみんなに共有していくって相当な努力だと思う。子どもに勉強を教えるのと同じで、繰り返し繰り返し繰り返し繰り返してというのがものすごく大事で。今の子は廃炉に無関心になってきて、「廃炉」や「放射能」という言葉自体もわからない子がいっぱいいるから。このままでいったら、パパとママになってわからない子がどっさり増えますよね。わからないなりに、自分が自分の子どもに廃炉ってこうなのよっていうことを伝えられる、そういう子を育てていく、そういう教育をしていくのが我々の務めなのかな、と思います。



日々の繰り返し的大事だと。

**西本** その通りだと思います。桜を植えていても、日々の生活が大事で、桜を成長させていくことが大事なのであって、イベントが大事ではない。イベントが成功すると喜ぶのは行政だけです。イベントはやってもらなくてもいいの、私たちは。イベントありきではなくて、毎日生きていく上でどうするかっていう手助けをしてもらったほうがずっとありがたい。毎日少しずつ頑張っている人たちを応援することの方がとても大事だと思う。そう思って私は活動しています。

そういう姿を大人として子ども達に見せていくことがどれほど人材育成になるか。華々しいことがすべてじゃないんだよって。毎日こうやって桜の木のまわりの草をかったり、ハサミで枝をはらったり、これがないと木は育たない。地味だけど、これがどれほど大事かっていうことを日々の中で教えていくことが、イベントをするよりも大事だと思う。育てるってそういうことですよ。

そこが私と行政との最初からのギャップなの。

今回のフォーラムは、廃炉についてこういうことやるってなかなかないから、ちょっとでも廃炉について知っていただき、いままで無関心の人が何か一つでも気付いて行ってくれたらそれは成功ですよ。そして、その人が、たくさんの人にこうだったよってしゃべってくれるだけでもいいことなんじゃないかな。しゃべりたくするようなフォーラムにするといいかもしれない。1日目っていうのは、「知る、話す、問う」なんだから、まさしくおばちゃんの井戸端会議でいいと思う。

登壇した人や会場の想い。話しを聞きたいみんなの想いって似てるんだよね。そういう想いがうまく会場で表現できるといいね。さっきも言ったけど、廃炉って終わりがいいんだから。それこそあと50年先、100年先になるかもわからないものと我々はおつきあいしているわけだから、結論出そうと思っただけで絶対無理なわけ。私はこの廃炉については結論ありきでは絶対にあってほしくないと思っています。

押し付けられる結論がないということは、自分たちで責任をもって結論を出していくということでもありますね。

**西本** 今度、浜通りの高校で、昨年ベラルーシに行ってきた子どもたちが学んできたことをまとめた副読本を使って勉強会を開きます。学校の先生方に協力してもらって。行政を通さなくてもできることってあるんですよ。自分たちのできることを自分たちで向き合っていくっていうのが大切なのかなって思っています。地元の子供を育てようと思ったら、国が手を出してくれないからできない、補助金をもらえないとできないじゃなく、なんとかやれる方法を見つけなきゃいけないんです。だって子どもは生きる権利も知る権利もありますから。それを大人が塞いじゃだめなんです。

語るだけでなく、行動で示すこともできるっていうことを、ここに住んでいる子どもたちに教えていきたいかな。大人からしたらうるさいおばちゃんだよ。でもやっぱりそういう人もいないとダメなんです。

そうですね。お願いするだけでなく、我々ができることは我々がしなきゃいけない。地元の我々のみんな協力しなきゃいけないと思う。一緒に運命を分かち合っていくんだっていうフォーラムにしてほしいですね。





# インタビュー 09



## 松永 武士 さん

福島県内各地に民俗芸能や伝統工芸品が存在し、それは重要な観光資源、地域産業となる一方で、後継者不足、市場環境の変化の中で苦境に立たされてきた。原発事故被災地においてもそれは例外ではなく、とりわけ避難を余儀なくされた人々が出た中で苦境はより深まった現実がある。大堀相馬焼は相双地域を代表する焼き物で、300年の歴史を持つ。廃業する窯元も出る中、その伝統を引き継ごうと力を尽くす若者がいる。松永 窯・4代目・松永武士さんに話を伺った。

松永さんの今の取り組みを教えてください。

松永 もともと窯元は継ぐ気がなかったんですけど、学生の頃から東京や海外でベンチャーをやっていたもので、全く別の視点から、焼き物に携わろうと思っていたの仕事をはじめました。東日本大震災、原発事故が起こって、浪江町へ帰れない状況になったあと、一時帰国したときに、仮設住宅に行ったんです。知り合いのおばあちゃんが大堀相馬焼を持っていて、「なんで持ってますか」って聞いたら、「これを見ると町を思い出す」と言っていたので。生まれたときから身の回りにあるものだったんでそれまであまり意識していなかったんですけど、こういうものが町を思い出させる重要な指標になるんだなと。こういった町のアイデンティティ、誇りを残すことが、町を残すことになるっていうふうに思いました。そして、これって浪江だけじゃないし、福島だけじゃないし、日本だけじゃないなっていうのが僕が今感じることなんです。誰にとっても、どこにとっても、こういった文化、手作りの大切なものがあるはずで、それを広めていくことが、自分の中のミッションだなと思うようになりました。まずは実家の大堀相馬焼を活性化させよう。

それで僕自身の関わり方は、どちらかっていうと、もの作りの現場っていうよりは、商品企画とか販売とか、そっちに力を入れています。

なるほど。今、原発事故から7年ほどたっているわけですが、手応えはどうですか？

松永 そうですね。最初、戻って実際に少しずつコミットし始めたのは、震災から2年経過した2013年ぐらい、本格的には2014年、15年ぐらいからなんです。なので、本腰入れて4年ぐらいたったところなんです。

やはり伝統産業っていうのは、なかなか厳しい業界だなって身をもって感じましたし、ただ一方で、旧態依然としている産業といえますか、あまり他の業界とコラボレーションしてないなかったりとか売人の考えが強かったりする産業なので、逆に新しい知見を入れていくことで、風向きが変わるんじゃないかなと、そこにチャンスがあるなと思っています。海外に行く中でも、外に出て行きやすい、色々な可能性がある商品、商材だなと思っています。

大学生のときは、海外で医療関係のベンチャーをやっていた？

松永 そうですね。医療関係の仕事をしていて、投資家に投資をしてもらって中国の大連で日本人向けの内科クリニックの運営をやっていました。向こうで困っている駐在員とか出張者、旅行者に対して、ドクターを紹介する。ぼくはドクターではないんですけど、営業をしたり、ドクターの派遣、保険の手続きのような裏方の仕事をしておりまして、そこでいろいろ学ばせていただきました。

そんなグローバルかつ新しいビジネスの業態から、かなりドメスティックでローカルなところに来て、伝統を守るというミッションに向かう。そこに何かつながる部分はあったんですか？

松永 今までの仕事で一貫して感じているのは、現場サイドにあまりにもコミットし過ぎると視野が狭くなりすぎて、イノベーションが起きにくくなるのではないかとことです。医療の他に、マッサージ店、エステ店もやってきたんですけど、やっぱり現場サイドの力が強すぎると、結局枠を超えていけない、差別化ができていけない。相当な熟練者、年齢が上の経験者じゃないと上に立てない、勝てないような業界はダメなんです。伝統産業はまさにそうなんです。

しかし今、僕らの世代の有利なところって、インターネットがあって、それを武器にすれば、上の人たちとも対等に渡り合える部分が出てくる。そこに面白みを感じていますし、日本さえ超えてしまえば、あとは結構割と楽にいけるなっていうのを感じていて。文化や工芸のレベルでは、割と日本は強いので、固い枠組みの外に出れるかと。

まさにおっしゃるような話は、第2回福島第一廃炉国際フォーラムでも出ていました。これから人材確保をどうするんだ、技術力が足りるのか、と東電の廃炉トップに聞くと、そのとおりなんです。廃炉のことをやる、その課題、壁を乗り越えていく、というのは、廃炉だけを見てはダメで、他のいろんなジャンルの、ロボットなのかもしれないし、AIなのかもしれないし、そういう人たちが寄ってきてはじめて廃炉に役立つイノベーションが起こってくる。そのためには、人や知恵が集まるだけの魅力ある地域にしないちゃ駄目ですよ、と。そういう、現場の視点と、そこを超えて壁を壊していく視点の

双方が必要だということ。これは、廃炉の技術開発の問題に限らず、これから福島の復興に関する広い文脈でも必要なのかなというのは思ったりしますけどもね。

松永 おっしゃるとおりで、やっぱり難しい地域ほど、編集力とかミックス能力が高い人のほうが強いなというのがすごい感じていて。いろんな顔を持ってたほうがいいなとは思ってるんですよ。一つのものだけじゃなくて、これでもできる、あれもできると。それぞれがちょっと浅いかもしないんですけど、そういうふうに横断的にできるほうが、難しい産業とか、難しい地域ではやっぱり強いと思いますし。でも今後、そういうのがトレンドになってくるんじゃないのかなと思っています。それを、今、活躍してる人たちが皆さん結構そういう人が多いなっていう感じもあるので、よりそういったところが強くなっていくんじゃないかなと思っています。

今、そんな中で、外部のデザイナーを入れてこれまでにないようなデザインの大堀相馬焼を作ったりしながらブランディングするとか、バーチャルリアリティを使って届かない層に大堀相馬焼の魅力を伝えていったり、そういう最新技術と伝統の融合みたいなことに取り組んでいらっしゃる。

松永 おっしゃる通り、ここまでは自分の中で前衛的な、攻撃型の策をやってきました。でも、最近はちょっと守りをやろうとしていて、例えば人材育成とか、経営管理とか、実家を皮切りに、他の窯元さんでもやっていこうと考えています。

結局ブランディングして、ファンの開拓しても、土台がきちりしないとな、というのがあって。例えば、国や県の補助金は割と、販路開拓とかそういうところに目がいきますけど、やっぱり肝心なのは基礎力で、すごい地味なんですけど、そこは今ちょっとずつ開拓しています。一時的に東京のメンバーを何人か入れて、これまで曖昧になっていた部分を仕組み化していったり、当たり前のことなんですけど、当たり前のができてないっていうのがあった。人材育成も、ちゃんと採用活動をする。先週京都行って来たんですけど、説明会をして、インターンを夏休みに呼んで、彼らの中で優秀そうな子がいたら移住してもらおうと。すでに、これまでのインターンのうち2人が地域おこし協力隊で、今年の4月から入ってます。

行政の制度があって、その箱に頼りきるのではなく、ちょっと工夫することで全然変わる。地域おこし協力隊とそれを受け入れる地域の間でミスマッチが起こっているとよく言われますが、ちょっと自腹切って最初インターンでやって、選別するっていう作業をしたら、割といい人が来るようになったんです。そういった土台を今から作りたいと思います。

なるほど。ということは、ブランディングによる売り上げ向上等々は、大体成果が出たと捉えていらっしゃる？

松永 そうですね。生産量が追いつかなくなっちゃってきて、それはいいことなんですけど、これ以上売れても、質が落ちちゃうなっていうのは思っていて。質を担保するためには、技術力、生産力を高めることが重要。うちは両親が主軸でやるとるんですけど、だんだん高齢になってきていて長くは続かない。若手を育てるっていうところにシフトして行ってます。

人材の部分は、松永さんが開発している、バーチャルリアリティをつかって誰でも遠方で、画面の中のろくろを回しながらやきものを作ってみる体験ができるシステムも使うわけですか？

松永 そうですね。やっぱりそういったところにも、興味があるような人を積極的に採用しようと思ってます。もちろん基礎的なろくろもできる子なんかはまずメインになってくるんですけど、ITリテラシーが低い場合もあるんです。美術大学で一生懸命勉強してきたというような人なんです。いずれ彼らが独立したり、新しい窯を構えるのは大歓迎なんです。そういったときに役に立てればなと思っています。

松永さんはそうやってうまくやっている、もちろん松永さんが世代が近いから人材採用に強いというのもあるでしょう。でも他の窯では後継者問題は厳しんじゃないですか？

松永 はい。元々25軒あったのが、いま10軒です。県内ではばらばらに再建しています。うちよりもっと北のほうだと飯坂とか大玉村とかにありますけど、やっぱり息子、娘はみんな別の職業に就いてる。こうなると再開してもいずれ廃業になっちゃう。新しい人に働いてもらって、独立してもらって。じゃないと産地として成り立たないかなとは思ってるんで、そういうところもしています。

世代交代みたいなものなかなか難しいのか、あるいは、意外と興味持つ若手はそれなりにいるのか、ていうとどうですか。原発事故で辞めるといふ要因と、年取ったから辞めるといふ話とが入り交じっているんでしょうけど、若い人で外からわざわざ興味持って入ってきてる人がいるのか。

松永 いますよ。

いまの担い手の中心は、高齢になってきて生きがいでやってるとい人が多い。どちらかっていうと。前のお客さんがいるからとかそういう理由ですね。ただ、将来を考えて産業としてやっていく場合には、それだけだとちょっと厳しい。

一方で、若い人はやりたくてもやれる場所がない。例えば、京都でやきものをやろうとすると激戦区だったり。あと、そもそも食えないというのもある。すでにうちでは若い人が新たに来て働いていますが、3年あれば何とか稼げるようにはなるかなとは思ってます。あとは彼らの頑張りで、何とか自走できるようになってっていうところまでできればなと思ってらるんで。

現状、松永窯は何人ぐらいで回ってる感じですか？

松永 今は、両親2人とパートさん1人と、地域おこし協力隊の2人が入ってきて。きょうはたまたまちょっと、東京に販売会行ってますけど。もう一つ窯元が白河にあるんですけど、そこも地域おこし協力隊が一人居て。

なるほど。その点、東京での販売とか、流通、プロモーション、あと外から移住してくる働き手への魅力として、ここは拠点として悪くないのかもしれないですね。西郷村って東北新幹線・新白河駅がすぐそばなんで、ある面では東京に1時間ちょっとで行けるという点では、地の利は元々いた浪江に比べて格段にあたりするんじゃないですか？

松永 そうですね。割と。私自身、東京とこの往復の生活をしているんで、それはすごく感じます。

ただ、土はもともと地元の浪江の土を使ってたんですけど、



## インタビュー 09

全部汚染されてしまって。瀬戸の土を調査して、2年かけて、ようやくできあがったものがいまの原料です。

窯元さんの中では、前の土でやりたいという人もやっぱりいるんですが、特に、表面の土なんで、一番放射線量があるところでなかなか難しいですね。

なるほど。すいません、初歩的な質問で申し訳ないんですけど、大塚相馬焼に使われる土は、深く掘って出てくる土じゃなくて、表面の土を使うってところがポイントなんですか。

松永 そうなんです。でも、これは心情的なものもあって、実際に放射線量を測れば低かったりもするんです。そもそも、やきものなんで、高温で焼いている段階で放射性物質は飛びます。ただ、それを売っているって、いうのがちょっと気持ち悪いってというのがこっぴどい。

なるほど。松永さん自身は、浪江の元の家には帰られたりとか、整理に行ったりとかってことを最近はしていますか。

松永 年に1回行くかどうかってとこですね。結構、家が崩れちゃって入れないっていう状況なんで。

となると、こっぴどで事業も生活も続けながら、たまに行くかなぐらいだろうって感じですか。

松永 そうですね。浪江町とは10%でも20%でも関わりは持っておきたいなとは思っています。

町役場とは、いろいろと連携させていただいてまして、そこはありがたいことです。大塚相馬焼さんどうですかみたいな話は、組合に対して、今も出てるんです。組合は二本松にありますけど、いずれ、あそこを出ていかなきゃいけない。じゃあ、どこに行くんだとかいう話もあります。

そういう町との接点はありましたが、実際にどこに立地するか、場所としての接点はどうしようかなっていうのはまだ定まっていないですね。

そのときに、確かに山のほうは放射線量が高い、生活は厳しいという話はあるけど、海のほうは線量も低く、すでに生活を再開している人も、だから浪江町内のどこかに、というのは、ある人はあるでしょうね。

松永 はい。6号線沿いとか、役場近くだったら全然大丈夫なので。地域おこし協力隊の中で、浪江でやりたいって人が出てきていて、それはそれで、本人たちの意思を大事にしたいですね。最初はすごい応援してもらえますでしょうし。

ただ、戻ったときの不便もあるでしょうね。

松永 そうですね。住んでたから分かります。元から不便で、今、さらに不便になってますけどね。

松永さん自身はやっぱり、この事業に関わらなければ戻ってくる予定はなかった？

松永 なかったですね、一切。高校に通ってるときは、地元を出なくてしょうがなかったですから。

そんな中、いま家業や浪江町に関わるようになった。横で廃炉作業が数十年続くわけですけど、そこはどう気になるのか、あるいは気になんないぐらいになっているのか。いかがですか。

松永 いや、やっぱり気になる点と言えば、僕、原子力に関しては不勉強なんですけど、海外に行くたびに、どうなってるんだって結構言われるんで、きちんと説明できるようにしようというのがあるんです。

廃炉作業はやってると思うんですけど、もう少し進捗が伝わってこないとは思っています。それはメディアとかが報道しないものもあるかもしれないんですけど、一部の廃炉に関心がある人とか、原子力で被害に遭った人しか状況が分からないっていう中、多くの人やみくもに不安になっている。いや難しい問題ですね、これ考えると。無関心な人に知らせるって相当難しいことだと思うんで。これはやり続けるしかないんですけど、わざわざ情報を取りにいかなくても状況を知れるような機会があるといいかなと思います。ただ、関心がないとやっぱり流されちゃいますよね。それがちょっと怖いなと思いました。

海外で、でもあそこすぐ近くから来たんだろうと言う人に、逆に説明できる範囲でどういう話をしてますか。

松永 いや、全然人は住んでるし、安全ですっていうことは、きちんと写真も見せて言っています。そこに住んでたし、行ったしというのは説得力につながります。一方で、住めない所もありますよっていうのはきちんと説明する。全体の状況を説明することで納得感を持ってもらう。

一方で、海外のメディア、海外の人たちは、それでも、それって本当に正しい情報なのかとか、隠されているんじゃないか、って日本のメディアとは違う視点で来るので。そうなるうちちょっと、僕らも答えられなくて。

国内メディアなら、じゃあ自分で取材して見れば、で終わりますが、海外だとそういうことよくありますよね。

松永 あと、基準値の定め方がおかしいんじゃないか、とかいう話になると、自分では答えきれない。そこで不安になる人もいるでしょうね。

自分なりに自分の言葉で説明しないといけないんですけど、それがずれてる可能性もあるから毎回ちょっとずつ調べてって感じですよ。幸い、ビジネスとしての質問の話のほうが中心なんで対応できることが大部分ですけどね。

なるほどね。復興や廃炉について言えば、地元の中学校の同級生とかいって働いているわけじゃないですか。みんな元気にやっていますか。

松永 はい。やっぱりみんな現場で働いているので、普通になっちゃってるんですね。

7年前から働いていて、いま30前後だったら、自分の職業人生のほとんどがそこにいるって話になってきてるでしょうね。

松永 例えば、「おまえ、福島第一原発の門の近くにこの前立ってたろ？」みたいな話とか、そういう話を聞くと、あー本当に現場行ってんだと改めて思います。逆に僕は全然遠い所にいるんで、違和感というか変な気持ちですね。

そうですね。そこって、日常になっていて良くないという話もあるでしょう。廃炉の仕事も何十年後には産業として終わりを迎えるかもしれない。一方で、そうだとすると、そこに仕事や生活が成立してんなら、それでもいいじゃないかっていう考えもあるかもしれない。だって、消滅する地域なんて現にいくらでも出てきているし、遠くない未来に潰れる産業も身の回りに腐るほどあるわけですよね。そういう中で、この地域にどんな希望があるんですかね。

松永 廃炉前は貧しい地域だったっていうのは、よくうちのおやじとかじいちゃんに聞いています。復興、廃炉の仕事が縮小していくとして、その後の産業を、ロボットでとか言ってますけど、必死で生み出し続けないと、何も無くなんじゃないかとは思っています。IT、AIも良いけど、それ東京でやったほうが効率いいよね、と言われたら終わりなんです。

その点、今、浜通りで、新しいビジネスをつくらうというイベントがいくつかやられてると思うんですけど、そういう動きは大事なかなと思っていて。本当に100でも200でも新規事業が生み出されて、1個でも当たればいいと。じゃないとおそらく、その次が育たない。若い人の移住も進めながら、少しでもいい方向に向かってくれたらと。

なるほど。今県外から来た人っていうのは京都から2人ですか？

松永 はい、京都の学校で4年間通って基礎はできています。彼らは就職口が限られていて、あったとしても、でっち奉公で月に5万円とか。

その点、うちは良い条件なので喜んで来ていただいていますし、結構自由にやらせてるんです。ECサイトの運営の仕方とかも教えているんで、それが意外とためになるみたいなことも言われて。自分が仮に独立したとして、その後の姿を描いていけると、満足度は高い。

ただ、一方で、急に知らない土地に来て周りに知り合いもない中で、白河駅近くにあるコミュニティカフェ「EMANO N」さんみたいな、若い人と知り合える場はありがたいですね。僕らもずっと付きっきりでいれないというか、プライベートまで一緒にいられると苦しいかなと思って。

そこは重要ですよ。家族、地域でもなく、仕事でもない、いわゆるサードプレイスが充実していないと人は離れていく。都会に人があつまるのはその点があるわけで、自分自身を振り返ってみても、そこが無いから戻ってくることはないだろうと子どもの頃思っていました。

松永 そうですね。そこはある程度変化してってほしいというのはきっと誰でもあるんで。そういう意味で僕は東京に出てったわけですけど、これからは、そういう刺激が必要です。

ここまでは、震災があって、それができていたんだと思うんです。県外からどんだん人が入ってきて。これからもそういう所にできればなと思ってますね。

松永さんはここと東京とを往復しながら生活しているわけですよね。

松永 常々考えてやっていく中で、半分東京にいるのが良いと思っています。やっぱり、東京に行けばいろんな人がいるし、全然売上高からすれば、僕の同世代で、10倍でも20倍でも稼げる人なんていくらでもいるんで、全然駄目だなとなれて。

なるほど。そういうことも含めて、これから長期的に西郷村を拠点にしていこう。

松永 いや、難しいところなんです。でも、まずは西郷拠点でやっていきます。ここもいずれ改築するんですけど、色々な人が出入りしながら若手の職人を育てるようなものづくりのワーキングスペースをつくらうと思って。いま働いてもらっている職人には普段は商品を作ってもらっているんですけど、彼らも自由に作品を作りたい。その環境も必要なので。ろくろ以外にも3Dプリンターとか置いてもいいと思うんですけど。そういうスペースつくりたいなと思ってます。

そこにおいて、浪江であったり、大塚相馬焼であったりのアイデンティティーってどうなっていくんですかね。現実の土地に。

松永 根差してない。

って話になってくる。

松永 土地性っていうのがかなり難しく、結局、まず最低限残すのはこっぴどでやらないといけない。ゼロにしちゃうと何もなくなっちゃうんで。ここですべてを置いて、できることを浪江に移設していくっていうのが現実的なやり方かなと思ってます。ただ、今は現実的にリソースが割けるわけでもないの。体制が整ったらやっていきたいなと。

例えば、さっき言ったものづくりのワーキングスペースなんか、浪江でやると面白いかなと思ったりもしてるんで。

話題になりそうですね。

松永 はい。そういうスペースを。小さくても少なくともいいんで、そういう場所が浪江であるといいかなって思ってます。

いまもテレビの特集でとりあげられたりは定期的にありますか？

松永 3月は絶対来ます。毎年、全国ネットで何かしら来るんで、それは。

なるほど。それは直接売上につながるでしょうね。

松永 そうなんです。ただ、そんなときかかって行くんですけど、それだけなんです。

小売りはどうしても先が読めない。イベントごと、例えば父の日には売れるかなって考えても全然売れない。去年、おととしから予測しておくんですけど、それでも予想を思いっきり外すんで。

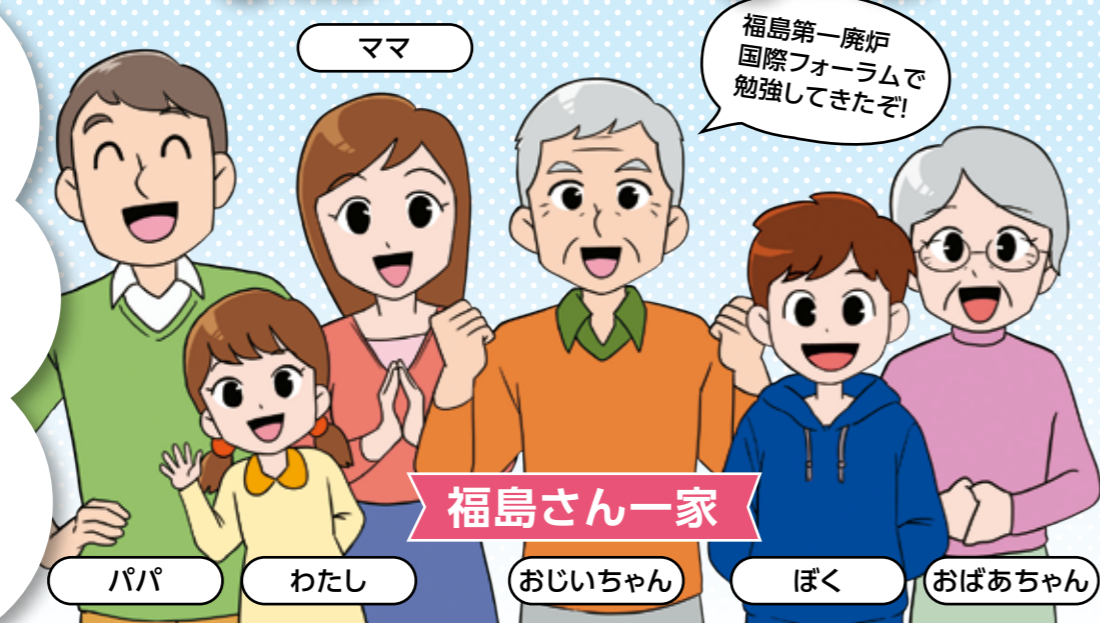
今後はそこ頼りにせず、継続的に売上をつくれるように、自らメディアをつくっていかねばと思っています。



# 「はいろ」のいろは

考えよう！ みんなで一緒に

福島第二原子力発電所(1F)の廃炉(はいろ)に向けた取組について



## Q1 (疑問・不安) 福島第一原子力発電所は安全なの? 今後も大丈夫なの?

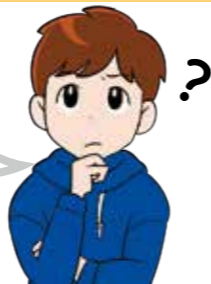


A1. 事故当時、水素爆発が起きるなど危険な状態だったが、様々な対策を講じた結果、1Fは現在、「安定状態」にあるんじや!

- ★ 原子炉内は低温に保たれ、爆発する可能性は限りなく低い
- ★ 1F構内で一般作業服などで作業できるエリアは95%
- ★ 放射性物質の飛散を低減する対策をとり、常時監視している

このまま放置すると「不具合が出る」可能性があるんじや! リスクを減らし「安全な状態」にするため、「はいろ」作業を行うんじや!

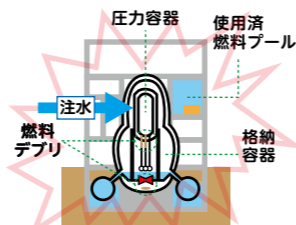
安定状態って、「安全」ということなの?



各種対策  
冷却、除染、  
汚染水対策  
など

このまま放置すると  
リスクが高まる

【高まるリスク】  
燃料の変化や建物の老朽化により放射性物質が外に漏れることなど



## Q2 (疑問) そもそも「はいろ」って何をすることなの?

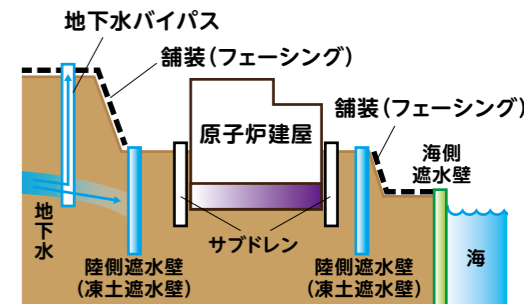


A2. 建物から燃料を取り出し、安全に貯蔵して処分していく作業のことなんじやよ! 大きく分けると3つ!



### ① 汚染水対策

汚染源に水を「近づけない」「漏らさない」「取り除く」取組のこと

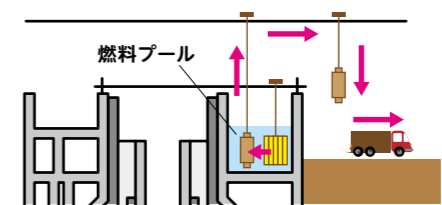


【イメージ】

### ② 燃料の取り出し

燃料プール内の燃料や溶けて固まった燃料(燃料デブリ)の取り出し

1~4号機の「使用済燃料」の取り出し



### 燃料デブリって何??

燃料と建物内の金属が溶けて混じりあったもので、1Fの燃料デブリは、その性質などが現在、不明であるため調査をしていく必要があるんだ! 2号機の内部調査で「燃料デブリ」らしきものが確認されたんだよ!



### ③ 解体・後片付け(廃棄物対策)

燃料デブリってよく聞くけど、どうして燃料を取り出さなきゃならないの?



歯医者さんのパパの出番かな?

燃料の取り出しを「虫歯治療」に例えて話すよ! 虫歯があっても痛みがないとき、君はどうする?



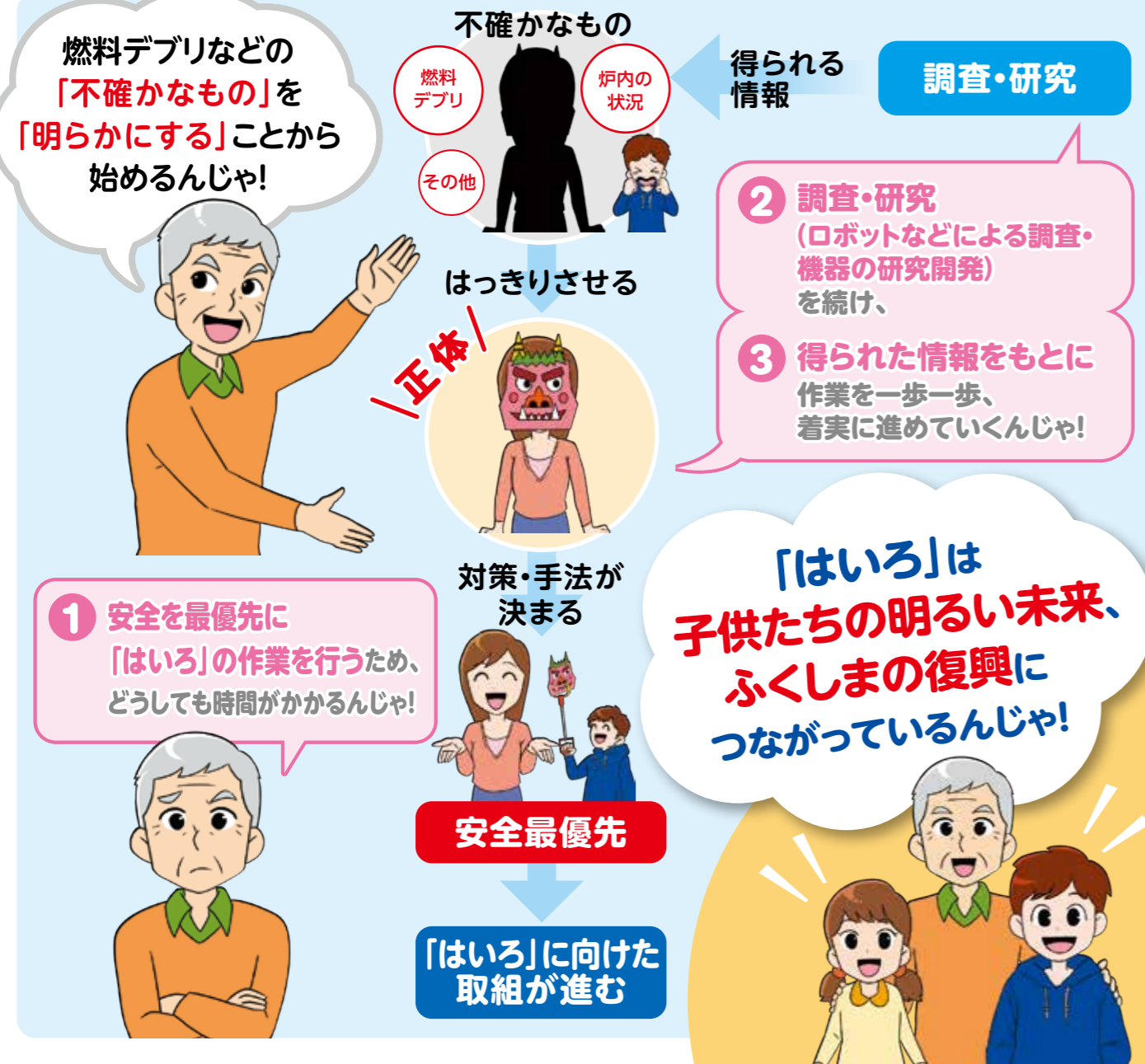


# Q3 ( 疑問 ) 「はいろ」の完了まで どのくらいの時間がかかるの?



A3. 物事を進めるには、まず、目標や計画を立てるが、「はいろ」の計画でもある「**中長期ロードマップ**(※)」では**30~40年**かかるらしいんじゃ!

※福島第一原子力発電所の廃止措置等に向けた中長期ロードマップ(国が策定)



# Q4 ( 不満・要望 ) 分かりやすい情報をきちんと発信して!

A4. NDFでは、「**福島第一廃炉国際フォーラム**」を開催し、「はいろ」に関する情報発信や地域の皆様と意見交換を行っているようじゃ! フォーラムに参加して、「はいろ」への想いを専門家にぶつけてみよう!



**第2回 福島第一廃炉国際フォーラムの様子**  
(2017年7月2日)  
於:広野町 484名参加

事前に聞き取った地域の皆様の声を冊子「**ぼいす ふうむ ふくしま**」にまとめ参加者全員に配布し議論に生かしました。これについてはホームページで公開しています。



**第3回 福島第一廃炉国際フォーラム**  
2018年 8月5日(日) 榎葉町コミュニティセンター  
8月6日(月) いわき芸術文化交流館アリオス

**インフォメーション** 【NDFリンク集】  
「はいろ」の取り組みに関するポータルサイトです。ご活用ください。

URL: <http://www.dd.ndf.go.jp/jp/link/index.html>

## 終わりに

今回のプレリサーチの中で「ここ1年の変化は大きかった」と色々な立場の人から聞きました。

大幅な避難指示解除後の学校の再開や病院などの新設、あるいは、福島第一原発内では凍土壁の本格的な運用がはじまると同時に困難なデブリ取り出しの道に作業の軸足が移行してきた。「帰還して日常がはじまった人は廃炉に興味がない、戻ってくる前に気になっていた人も語らなくなるのでは」「最初の2～3年はピリピリ感があったけど、7年経ってこの生活に慣れちゃったのよ。住んでいるとすごくよくわかる。だって広野なんか朝刊こないでしょ？コンビニや売店で買うでしょ？最初は文句たらたらだったけど、今はもう慣れちゃって、当たり前のようになっている。」などと、緊張感の緩和と「廃炉に付き合わされること」への無意識の忌避感と言えるようなものも生まれてきていることも見えてきたことです。

それでも、廃炉とともにあらざるをえない生活が続く中で何を共有して、未来を描くのか、これから本格的に問われることになるでしょう。

本日の議論を今後につなげ、地域の未来を語り合う土台になっていけばと思います。

ファシリテーター・開沼 博

今日のフォーラムは、  
「福島第一原発廃炉や周辺地域についての正確な事実の共有をすることで、  
地元の幸せな未来を考える場」です。

### 【全ての問題に答える場】ではありません

長いようで短い、時間が限られた場です。住民が廃炉主体に直接納得行くまで質疑応答ができる貴重な時間を有効に使うために、論点を「福島第一原発の廃炉」と「それに向き合う人の生活」について絞ります。

### 【全ての地元住民の全ての思いに答える場】でもありません

そもそも「地元」という言葉自体曖昧です。地元の状況、住民の立場は時間の経過の中で、細分化し続けています。その中で、まずは避難指示等過酷な被害があったこの地域で、ここに様々な形で関わる方々の声を聞くところから始めようというのがこのフォーラムの位置づけです。

### 【一回で終わらせる場】でもありません

地元の多様な言葉を拾い上げていくにはこの場だけでは足りない。人の気持ちは移ろい続ける。来年以降もこの地元向けフォーラムを継続していく予定です。言い足りないことや拾えてない声もあって当然です。「もっと言いたい、聞きたい」という方、ぜひ、今日以降も続くこのフォーラムのリサーチへのご参加・ご協力をお願いします。

### 要望を伝えて意思決定を迫る「陳情の場」や「吊し上げの場」でもありません

目的は「正確な事実の共有」を通して、「住民と地域の幸せな未来を描く」準備をすることにあります。「何が分からないか分からない」問題を「そうだったのか」と納得できるものに変え、同時に、そもそも「なぜ私たちは廃炉について考えるべきなのか？」といった根本的な問いへの答えも問い続けて行きます。

### 最先端の専門性を徹底的に追求することだけが目的の場ではありません

今日のフォーラムは、最先端の専門性を徹底的に追求する場ではありません。あくまで住民の立場にたつて廃炉や地域の未来を考える場です。より専門的なことを知りたい方は明日いわき市で開催されるDAY2ははじめ、実務家・専門家向けの情報発信の場をご活用ください。

## ほいすふるむふくしま 2018

2018年8月5日 発行

開沼 博・編

第二回 福島第一廃炉国際フォーラム アドバイザー：井出 茂 坂上 英和 小林 奈保子

デザイン・印刷：株式会社サードクリエイティブ 〒972-8301 福島県いわき市草木台2丁目12-13

### 「ほいすふるむふくしま」について

本冊子『ほいすふるむふくしま』は、原子力損害賠償・廃炉等支援機構から依頼を受け、「第三回福島第一廃炉国際フォーラム・DAY1」のファシリテーターを務める開沼博が、上記アドバイザーによるアドバイザー会合での議論を経て編集しました。アドバイザー会合では、「廃炉の話を経験的なことにとどまらず、地域の未来像を同時に描くことも大切」「廃炉と向き合う生活をまず見るべき。いきなりイノベーションコースト構想など大きな話をしてもついていけない」「若者の意見を取り入れていくことも重要」「住民の中には、なぜ廃炉につきあわされなければならないのか、という気持ちも出てきている。その点をまず踏まえるべき」といった議論がなされました。